

---

# 最強のメイジ殺し

海東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強のメイジ殺し

### 【Nコード】

N4202Q

### 【作者名】

海東

### 【あらすじ】

“最強のメイジ殺し”と呼ばれた男、レイ。そんな彼がハルケギニアの世界を旅する話です。オリキャラを割と出すつもりなので、苦手な人はご注意ください。原作キャラも勿論出しますし、絡ませます。アンチ要素は時と場合によりけりですが、極端なヘイトはしないつもりなのでご安心を。

## ブログ（前書き）

息抜きで前々から妄想していたものを書き下ろさせて頂きました。  
息抜きなので更新は不定期になると思います。

## ブローグ

その男はあまりの強さ故、歴史に名を残すことすら憚られた。ハルケギニアにおいて、彼の存在は一種のタブーであった。故に彼のことを実際に知っている者は少ない。

男の名はレイ。

ダーティーブロンドのやや長い髪にアッシュグレイの瞳。

顔立ちは良く、とてもハンサムだが左目に付けられた大きな傷跡が、異様な雰囲気醸し出していた。

年齢は20代後半から30代前半といったところ。

何処か老熟しているように見えるかと思えば、時に少年のようなあどけなさを見せるなど、見た目からは分かりづらい。

長身だが、筋肉が目立つと言う体格では無く、着ている鎧もあまり大きいものではない為、寧ろ細身に見える。

だが、その実無駄な筋肉が無いだけで、脂肪も少なく非常に引き締まった体をしていた。

その体中に細かいものから大きなものまでありとあらゆる傷が刻み込まれていて、左目の傷と合わせて、彼に近寄り難い印象を与えている。

平民出身で魔法を使うことは出来ないが、それを補って余りあるほどの剣術、そして体術を持っている。

その剣さばきは、それを見た者に、かのガンダールヴの再来とまで言わしめるほどのものであった。

レイは“最強のメイジ殺し”と呼ばれていた。

メイジ殺しとは、その名の通り魔法を使えずともメイジを殺すこと

の出来る者のことである。

彼には、真偽はともあれ、様々な噂があった。

スクウェアアークラスのメイジ数名を瞬殺した。

ドラゴンを1人で討伐した。

エルフと戦い勝利した。

等々

噂は一人歩きをするものだが、彼の本当の強さを語る時、彼を知る者は皆口を揃えてこう言う。

「物凄く力持ちだとか、剣術が秀でているとか、そういうんじゃない」

「彼は、ただ純粹に“強い”」

これは、そんな彼の語られることの無かった旅の物語である。

## プロローグ（後書き）

この先、かなりオリキャラが出て来ると思いますが、ご了承ください。  
また、原作キャラとの絡みは勿論予定しております。  
オリ主の強さはグインサーガのグインとかそんな感じです。

## トリスタニアにて 1（前書き）

早速ですが、原作キャラが登場します。

## トリスタニアにて 1

レイは旅をしている。

だが、その目的は特に決まっていはいない。

ただ思うがままに歩き、世界を回る。

それがレイの旅であった。

時には東方にある幻の秘薬を探しに行ったり、時には火竜山脈へ魔物退治に行ったりと、その時その時で旅の理由は変わった。

今、トリステイン王国の首都トリスタニアへ向かっているのも特に理由は無かった。

強いて言うならば、風の向くまま気の向くままである。

レイは自由を愛していた。

トリスタニアへ向かう街道を歩いていると、レイは視線を感じた。

「……………ん？」

つけられている。

気配の消し方からして、素人ではない。

相手は明らかに自分を狙っているようだ。

ここはあまり人気がない。

暗殺者か、それとも山賊の類か。

前者については身に覚えがあつて余りあるだけに思わず苦笑する。

だが、どちらにしろ殺気や敵意のようなものは感じられなかった。

それでも、万が一を考えてレイはいつ襲い掛かれても大丈夫なように身構えていた。



それから数メートルの距離を進んでも追跡者に新たな動きは無く、ただ自分の後をついていくだけであった。

追跡者の意図はよく分からないが、このまま街までつけられて四六時中監視されるのはいいい気分ではない。

それに相手はどうやらかなりの実力者らしい。

このレベルならば街の中、人混みに紛れて……といった手段も通用しないだろう。

仕方無い。とレイは立ち止まった。

仮にやり合う羽目になっても街の中でやり合うよりはマシだろう。

レイは振り返らずに追跡者へと声を掛けた。

「何者だ。何故、俺をつけている？」

それ程大きな声では無かったが、それでも確実に相手に届くように言った。

すると、追跡者は意外と呆気なくレイにその姿を現した。

「あゝあ、バレちまったかい。まだまだだね、あたしも」

悪びれる様子もなくそう言っただけなのは、エメラルドグリーンの髪的美女であった。

レイは女の顔に見覚えがあった。

「お前は確か……フーケ、だったか？」

「久しぶりだねえ。レイ」

女は巷で話題の盗賊、“土くれのフーケ”であった。

「俺をつけていたのは何故だ？お前は確か貴族専門の盗賊では無かったのか？……野盗にでも成り下がったか？」

レイが訊ねると、フーケは顔に少しだけ悔しさを滲ませながら答えた。

「なあに、今のあたしの実力であなたに気付かれることなく街まで行けるのかちよつと試しただけだよ。結果はご覧の通りバレバレだったけどね」

「俺がお前と気付かずに、そのまま殺してたらどうするつもりだったんだ？」

「おや？あんたは確か殺人狂では無かったんじゃないのかい？」

そう言つてフーケは肩をすくめる。

相変わらず食えない奴だとレイは思った。

「ま、ここで会ったのも何かの縁つて奴さ。久し振りの再会を祝して飲みにも行かないかい？」

フーケがそう言つと、レイはこくりと頷いた。

「そうだな。街に着いたらどのみち酒場には寄るつもりだった。人よりは2人の方が話も弾むし酒も美味くなる」

「それもこんな美人と一緒になら尚更、だろ？」

「ああ、そうだな」

レイはフツと笑った。

トリスタニアへと着くと、すっかり日も暮れて宵の口であった。  
2人は手頃な酒場を見つけて中へ入った。

「乾杯」

そう言つて2人は木製ジョッキを軽くぶつけ合った。  
2人同時に中のぶどう酒に口をつける。

「あー、美味しいねえ」

「……確かに」

2人はぶどう酒の味を楽しむと、木製ジョッキをテーブルの上に置いた。

「……しかし、レイ。何だつてこんなトリステインくんたりまでやつて来たんだい？」

フーケがそうレイに訊ねると、レイは素っ気無く答えた。

「さあな。気付いたらここへ来ていた」

「相変わらずだねえ。少しは何処かに落ち着こうとは思わないのかい？あんたの腕なら、ゲルマニアにでも行けばすぐに貴族になれると思うよ」

「生憎、一つの場所にじつとしていられない性分だね。王族に生まれてなくて本当に良かったと思つてるくらいだよ」

「そうかい。ま、貴族のあんたなんか想像出来ないしね」

「お前はどんなんだ？フ……」

レイは思わずフーケと呼びそうになって口をつぐむ。

場末の酒場とは言え、誰が聞いているか分からない。  
それを察したフーケは小声で言った。

「取り敢えずはロングビルとでも呼べばいいよ」  
「ロングビル……分かった」

レイは再びぶどう酒に口をつけた。

「……ロングビル、お前はどんなんだ？お前こそゲルマニアに行ったら、成功しそうな気がするが」

「あたしは貴族なんてもう真っ平なのさ。今の稼業も嫌いじゃないしね」

「でも、何時までもその稼業は続けられないだろう？」

「まあ、ね。だからこそ、今の内に稼げるだけ稼いどかないとね」

「……そう言えば養っている子たちがいる。と言ってたな」

レイは思い出したかのように言った。

すると、フーケが少し寂しそうな顔をする。

「そう。その子たちの為にもあたしは捕まるわけにはいかないのさ」

「そうか」

「そうだよ」

2人は暫く無言でぶどう酒を飲むと、その後はお互いに他愛の無い話をした。

酔いの効果もあって、素面ならそれ程面白くない話でも、とにかく笑えた。

「……それで、あの成金ジジイの間抜けな顔と来たら、もう爆笑もんだったよ！」

「それは是非見たかったな」

「ああ、あんたがあたしのパートナーだったら、この稼業もどんだけ楽だろうかねえ」

「パートナー、か」

レイは片手で木の実を弄びながら呟いた。

「……守るものが出来ると、人は弱くなる」

「それは何だい？」

「守るべきものが無ければ、人はどんな無茶でも出来る。いくらでも自分を傷付けることが出来る。だから強い。だが、守るべきものが出来ればそうはいかない。そいつを、そして自分を守らなければならぬ。結果的に弱くなる」

「そついうもののかねえ？でも、守るものの為に人は強くなれるんじゃないのかい？」

「それも正しい」

「矛盾しているねえ」

「ああ、矛盾している」

「……あたしはあんたに守られるのかい？」

「そついう日が来れば……な」

フーケはぶどう酒を一気に煽った。

「プハッ、……フン、否定出来ないのがどうにも悔しいねえ。あたしのパートナーなんて、あんたにとっては役不足以外の何者でもないからね」

「そうだな」

「否定しないんだね。……でも、あんたのそついうところは嫌いじゃないね」

「それは愛の告白と受け取っていいのか？」

「プツ、あんたがそんなジョークを言うなんてね」

「いつぞやのお返しだ」

「アハハ、そんなこともあったねえ」

楽しい時間は早く過ぎ去るもので、気付くと店の客もボチボチ帰り始めていた。

「そろそろ出るかね？」

「ああ……」

2人はお勘定を済ませ、酒場を後にした。

酒場を出ると、フーケは「うーん」と伸びをする。

「ちよつと、喋り疲れたね」

「話が弾めばそうなる。お前はその後どうするんだ？」

「少し野暮用があつてね」

「例の稼業か？」

「ハハハ、まさか。酒が入ってるのにそんな大仕事は出来ないよ。

ちよつと、人に会いに、ね」

「そうか。じゃあ、ここで別れだな」

「あんたにはまた会えそうな気がするよ」

「その時はお互い敵でないことを祈る。流石の俺も気に入った奴を殺すのはいい気分じゃない」

「おお、怖いねえ。安心しな。 magari間違つてもあんたの敵になるような真似はしないからさ。でも、気に入って貰えたことは素直に嬉しいよ。それじゃあね」

手をヒラヒラと振りながらフーケは路地の向こうへと消えて行った。フーケと別れたレイは取り敢えず宿を探そうと歩き始める。

明かりの少ない路地を歩きながら、ふと夜空を見上げる。

空はすっかり深い闇に覆われ、二つの月の輝きだけが夜を照らしていた。

その幻想的な美しさは何度見ても見飽きることがない。  
暫く、夜空の双月を見ながら歩いていた。

「おじさん」

その時、背後からレイを呼び止める声が聞こえた。  
振り向くと、そこには1人の少女が立っていた。  
暗くて顔はよく見えない。

こんな時間、しかもこんな暗い夜道に1人でいる幼い少女。  
ただことではない。

「何か用か？」

レイは訊ねた。

レイは別にお人好しでも無ければ、どちらかと言うと厄介ことは避けたいタイプの人間であつたが、この状況で自分を呼ぶ声を無視する程冷たい人間でも無かつた。

少女は何処か暗鬱な目をこちらへ向ける。

「おじさん、もしかして凄く強い？」

「……弱くは無い」

それだけ答える。

少女はポケットの中を弄ると、2枚の銅貨を取り出した。

「……それがどうかしたか？」

「おじさん、これである人を殺して欲しいんだけど……」

「殺しの依頼？誰を殺すんだ？」

少女は今にも掠れそうな声で言った。

「……ラ・ヴァリエール公爵」



## トリスタニアにて 1（後書き）

と言うわけで、マチルダさんと絡ませてみました。  
この2人は過去にも何かあったようですが、その話は追々という  
とで。

## トリスタニアにて 2 (前書き)

今回も原作キャラが出ます。

## トリスタニアにて 2

ラ・ヴァリエール公爵

言わずと知れたトリステイン屈指の名門貴族であるヴァリエール公爵家の当主である。

トリステイン王国とも関係が深く、国の重要人物の1人である。

政治や世相にあまり関心の無いレイでもそれくらいは分かっている。更に彼の妻カリーヌ夫人は、かの伝説のマンティコア隊長『烈風のカリン』である。

そんな人物を殺して欲しいと頼むのだ。

まともな思考をしていれば、誰も少女の言葉など齒牙にもかけないであろう。

何が少女をそこまで駆り立てるのか。

レイは少女にわずかながらも興味を抱いた。

レイは少女の顔を改めて見る。

暗くてよくは見えないが、薄汚れていて怪我もしているようだ。近付いて間近で見ると、少女の顔は痣と乾いた血にまみれていた。

ちゃんとしていれば年相応にあどけなく、可愛い顔つきをしていたのであろう。

「誰にやられた？」

「いっぱい……」

レイが訊ねると、少女は小さな声でそれだけ言った。

どうやら少女は通りすぎる屈強そうな者たちに手当たり次第に声を

掛けていたのであろう。

大半の連中は少女を無視したのだろうが、中には暴力を奮った輩もいたようだ。

レイは懷から特製の軟膏を取り出すと、少女に握らせた。

「……これは？」

「見ての通り、俺みたいな奴の必需品だ。塗れば多少痛みは和らぐ」

「……………」

「いないなら返せ」

「……………！」

少女は無言で軟膏を顔にペタペタと付けた。

時々、沁みたのか痛みに顔を歪ませるが、一通り塗りたくった後に軟膏をレイに返した。

それを懷に仕舞いながら、レイは少女に話し掛ける。

「さっきの話だが……」

その時、少女の腹の虫が「ぐー」と鳴った。

少女は恥ずかしそうに顔を赤くして俯く。

見た目通りろくな食生活をしていないのであろう。

そう言えばレイも小腹が減っている。

先程の酒場ではつまみ程度の食事しか取っていなかったことを思い出した。

レイはある程度空腹でも問題は無いが、少女はそうも行かないだろう。

もう3日はまともなものを口にしていけないという顔をしている。

「……………取り敢えず何か食うか？」

少女はこくりと頷いた。

無口だが、割と素直な性格らしい。

レイは少女を連れて歩き出した。

先程の酒場には大分長い時間滞在していたようで、もう深夜になるうとしていた。

この時間だと定食屋などの店はまず開いていない。

（そう言えば、確かこの辺だったか……）

レイはかつてこの街へ来た時の記憶を辿って歩く。  
すると、1軒の酒場が見えてきた。

「そう、ここだ。『魅惑の妖精』亭」

そこは小洒落た看板と店構えが特徴的な酒場であった。

外から見ると、店の中は盛況らしく、客入りも少なくない。

レイは少女と共に店内へと足を踏み入れた。

「いらっしゃいませ」

店に入ると、際どい格好をした黒髪のグラマラスな少女が出迎える。

彼女はレイの顔を見とめると、驚きの声を上げた。

「レイ！レイじゃない！」

「久し振りだな。ジエシカ」

「うわー、まさかレイが来るなんて夢にも思わなかったよ。……しかも子供連れで」

「立ち話も何だ。取り敢えず席へ案内してくれないか？」

「はい。えーと、2名様でいい？」  
「ああ」

ジェシカに案内されて、レイと少女は店の奥の方の席へと向かう。席に着くと、ジェシカが注文を聞きにやって来た。

「ご注文は何にする？」

「取り敢えず何か食うもの。そんなに高くも無く量があるものを出  
来るだけ早く頼む」

「ハ―イ、かしこまりました―」

ジェシカが去ると、入れ替わりに中年の男がこちらへやって来た。  
男はやたら筋肉質な肉体に女性用の服を着込んでおり、レイとは違  
った意味で人を近寄らせない雰囲気を出している。

男はレイの姿を見るなり、やたら甲高い声を上げた。

「あら！レイちゃんじゃない！久し振りねえー！」

「あんたも相変わらずだな、スカロン」

「ほんつと久し振りよ！いつこつちへ来たの？手紙くらい寄越しな  
さいよ！！」

「生憎だが俺は筆不精でね」

「そう……。ところでその子は誰？……まさかレイちゃんの子供！  
？隠し子なの！？ねえ！？」

一人テンションを上げるスカロンに対し、レイは苦笑する。

「少々ワケありだね。まあ、俺の子供で無いことだけは確かだ」

「あらそう？ところで、フンフン……お酒の臭い。レイちゃん、う  
ち以外の店に入って飲んだのね？」

「ああ、珍しい奴と出会ってな。ここで飲んでも良かったんだが、

相手の素性が素性だけに、な。お前も面倒に巻き込まれるのは御免だろ？」

「ふーん。ま、そういうことにしておいてあげるわ」

スカロンは拗ねたような顔をして言った。

その時、「ぐー」という音が聞こえた。

音がした方を向くと、少女がばつの悪そうな顔をして目をそらす。そんな少女を見て、スカロンは「あらあら」と笑いながら去って行った。

すると、調度良いタイミングでジェシカが料理を持って現れる。

「お待ち遠様！鶏肉と野菜のクリーム炒めでーす」

ジェシカは馴れた手つきで皿を2つテーブルの上へ置いた。いい匂いが漂って来る。

レイは少女にフォークを渡す。

「ほら、食べる」

「うん！」

少女はガツガツと料理を食べ始めた。

クリームソースが服や顔に飛び散っている。

傍から見れば行儀悪いことこの上ないが、レイは特に注意はしない。すると、ジェシカがナプキンを手に少女へ駆け寄った。

「ほらほら、お口の周りがベトベトよ」

まるで母親のようにそう言うと、ナプキンで少女に飛び散ったクリームソースを拭った。

ジェシカはレイの方を振り向く。

「もう！こういう時にちゃんと注意するのが大人の役目でしょ！」

「そうか。善処するよ」

「もう！」

ジェシカは頬を膨らませる。

レイは気にしないで料理を口にした。

「ふむ、美味しいな」

「でしょー？」

料理を誉められ、ジェシカが得意気になる。

実際に料理を作ったのはジェシカでは無いのだが。

今度はジェシカがレイに話し掛ける。

「でも、レイがここへ来たのって、そんなに前ってわけじゃないんだよね。何かずっと昔って感じがするけど。トリステインに何か用でもあった？」

「いや、特に理由はない。暫くは滞在するが、またすぐ何処かへ行くつもりだ」

レイは、目の前の少女をチラッと見ながら言った。

「なーんだ。私を嫁に貰いに来てくれたわけじゃないのね」

「それはまたの機会にさせてもらおうよ」

ジェシカの冗談を軽く受け流すと、店の奥からスカロンが声を上げた。

「ジェシカ！下らないこと言っていないであっちのお客に付いて頂戴



！」

「ハ―イ！……あれが地獄耳って奴？」

「奴も奴なりにお前のことが心配なんだろ」

「そうなのかな？　そう言えば暫く滞在するんだっけ？　ならウチに泊まりなよ！　レイなら大歓迎だからさ！」

「そうだな……宿を探す途中だったし、その好意を受け取ることにするよ」

「本当！？　ヤッター！　じゃあ、また後でね！」

レイに向かって軽くバイバイをすると、ジェシカは別のテーブルに座っている客のところへ行った。

ジェシカがいなくなると、この店に来て初めて少女と2人きりになる。

レイは目の前の少女の名前を知らないことに気が付いた。

「お前、名前は何だ？」

「……………ユイ」

少女はもごもごと咀嚼しながら答えた。

何か口に入れたことで大分顔に生気が戻って来ているようであった。先程までの思わず幽鬼と間違えてしまいそうな暗鬱な顔はもうしていない。

傷や痣を除けば、愛らしい少女そのものである。

こうして見ると、こんな少女がどうしてラ・ヴァリエール公爵の殺害などを口にするのだろうか。

レイは後できつちりとその辺のことを訊ねることにした。

「んっ！」

ユイは突然、フォークの手を止めた。

レイはやれやれといった感じで水の入ったコップを渡す。

「……急いで食うからそうなる。ほら水だ」

ユイは慌ててコップを受け取るとごくごくと水を飲み干した。

一通り食事を終えると、2人はジェシカに寝室へと案内される。  
2人で1つの部屋であった。

「別に構わないよね？レイ」

「俺は構わないが……お前はどうか？」

「……………（こくり）」

「だ、そうだ」

「じゃあ、お休みレイ。また明日ね」

そう言っただけでジェシカは欠伸をしながら再び仕事場へ戻って行った。  
酒場の喧騒は夜明けまで続くのだろう。

部屋へ入るなり、レイはユイに訊ねた。

「ここならば、他人には聞かれないな。……さっきの話の続きだが、  
何故ラ・ヴァリエール公爵の殺害なんかを企む？」

「……………」

「流石に何も聞かずに殺してくれ。と言われて殺すほど俺はお人好  
しでも血に飢えてもいないのでな」

「……………お母さん」

「母親がどうした？」

「ラ・ヴァリエール公爵のせいでお母さんが……」

そこまで言つとユイの目からぼろぼろと涙がこぼれた。

レイは何も言わず、続きを待つ。

ユイは袖口で涙と鼻水を拭くと、話を続けた。

「……お母さんが病気で、ずっと治らなくて。それで、お母さんのお友達の人がお母さんを診てくれたんだけど。お母さんが凄く苦しくなっちゃって、そのお友達の人がいらないとお母さん助からないのに、そのお友達の人をラ・ヴァリエール公爵がね取っちゃったの」

ユイはたどたどしく起きたことを連ねていく。

「それでね。お母さんが……死んじゃったの……」

ユイはそこまで言つと、わーっと泣き出した。

レイは今の話を自分の中でまとめてみた。

「……つまり、お前の母親は重病で、それをその母親の知り合いの水メイジが看病していた。だが、ある日お前の母親は発作を起こした。だが、その時側にいる筈の水メイジはラ・ヴァリエール公爵に呼ばれて、お前の母親を診られなかった。と、こういうことだな？」

ユイは泣きながら頷く。

「ユイ、お前は貴族だったのか？」

レイは訊ねた。

平民であればいくら知り合いとはいえ、水メイジの看病をずっと受けることなど財政的に難しい。

となると、ユイの家は貴族である可能性が高い。

ユイは鼻水を啜りながらまたも頷いた。

「そうか……不躰なことを聞くようで悪いが父親はどうした？」

「スン、スン……お父さんは私が赤ちゃんだった時に死んだって聞かされました……」

「そうか。他に親類は？使用人とかは？」

ユイはブンブンと首を振った。

「そうか。ユイ、お前は独りなんだな」

親を失った小さい娘がそのまま貴族として生きるのは難しかったのだろう。

誰の庇護も受けられず、そのまま家も失い路頭に迷う。

没落貴族の成れの果てである。

残酷なことだが、その中で少女は生きて行かなければならなかった。ゴミを食べ、地面を這いつくばり、時にはとても言えないようなこととさえしなければならぬ。

そんな劣悪な環境の中、少女を支えていたのが、あの日母親を救うチャンスをつつたラ・ヴァリエール公爵への復讐心だったのである。

自分では無理だと分かりつつ、それならばその復讐を実行してくれる人を探して、時に殴られても諦めずに。

「お前は強いな、ユイ」

そんな絶望の中でも死を選ぼうとしない少女をレイは称賛する。生き抜くこと、それはとても誇りあることだから。レイは決めた。

「ユイ」

「.....」

「その復讐.....引き受ける」

「.....!!」

ユイはレイの力強い言葉に思わず泣き止んだ。

## トリスタニアにて 2（後書き）

出ました、スカロンさんとジェシカ。

そして魅惑の妖精亭。

彼らとも過去に何かあったようですが、それも追々……（こんな  
ばっかだ）。

そしてオリキャラであるユイ。

ユイの年齢は大体10歳くらいです。

ちなみにユイという名前は某軽音楽部のキャラでは無く、某奇面組  
のヒロインから取りました。

## ヴァリエール領にて 1（前書き）

作中の文章を一部修正しました。

## ヴァリエール領にて 1

翌朝、レイは夜明けと同時に目を覚ました。

長年の習慣で、レイは起きたい時に起きることが出来るようになっていた。

例え起きる意思が無くとも、夜明けには目が覚めるように体が出来ている。

隣を見るとユイが安らかな寝息を立てて眠っている。

レイは音を立てずに部屋から出て行った。

暫くしてから戻ると、今度は寝ているユイの側へ寄って行き、躊躇なく体を揺すった。

「起きろ」

「ん……ん……？」

ユイは寝惚け眼を擦りながら顔を起こすと、不機嫌なのを隠さずに声を上げた。

「……………何？」

「起きろ。出発するぞ」

「……………もう行くの？」

「善は急げ、という奴だ」

いくら何でも早過ぎないか？と聞く前にレイは支度を調えていた。

ユイはベッドから降りると欠伸をしながら着ている服を脱ぐ。

ユイが今まで来ていた服はあまりにもボロくなり過ぎていた為、昨日の晩スカロンからジェシカが小さい頃に来ていた服を借りて寝たのだ。



また着替えも用意されており、こちら目覚めたら着ていいとのことであつた。

若草色のワンピースで、高価な装飾こそ無いもののリボンなどの飾りが着ている者の可愛らしさを強調させている。

（ジェシカの子供の頃のお洋服、もう着られないんだけどネ。でも何だか捨てるのも勿体無くて……。ユイちゃんが着てくれるならきつとお洋服も喜んでくれるわ！どうぞ持つて行つて頂戴！）

スカロンの言葉に甘えて、その服を貰うことにした。

ジェシカの服を着て見た目を多少改善すると、ユイはとても可愛いらしい少女に生まれ変わった。

元々貴族の出ということもあり、何処か気品が漂っている。

顔にはまだ腫れや痣が残つてはいたが、それでもなお可愛いと言わしめるだけの魅力は持っていた。

（腐つても貴族の令嬢……と言つたところか）

「……………」

「おっと、すまん。じろじろ見て」

「……………別にいい。レイなら」

何時の間にか呼び捨てにされていたが、レイは特に咎めはせず、ただ肩をすくめるだけだった。

「何処へ行くかは知らないけれど、行つてらっしゃいね。また何時でも来て頂戴！」

「レイ、今度こそ私を嫁に貰いに来てね！」

スカロンとジェシカに別れを告げ、レイとユイは『魅惑の妖精』亭を出発した。

街中でヴァリエール領方面へ向かう駅馬車を見つけると御者にいくらかの金を渡して2人で中へ乗り込む。

中には他に誰もおらず、まるで貸し切りのようであった。

馬車はそのままトリスタニアを発つと、街道をひたすら進んで行く。

道中、レイは特に言葉を発することはなく、目を閉じて瞑想をしていた。

対して、ユイはこの沈黙があまり心地良くないのだが、レイに話し掛けられる雰囲気でも無かった為、せわしなく指を動かしたりして時間を潰していた。

そんな風に暫く揺れていると、途中の駅で商人風の格好をした壮年の男が乗り込んで来て、2人の前に座る。

男はレイの姿を見ると、物珍しそうな顔でこちらへ話し掛けてきた。

「おや、子連れの傭兵とは、これは珍しい」

男は口髭をいじりながらレイとユイの顔を交互に見やる。

「この先はヴァリエール領ですが、あなたさん方はあそこに何か御用で？」

「……彼の高名なラ・ヴァリエール公爵殿ご自慢の兵団に自分の腕を買って貰えないかなと思ってね」

流石に今からラ・ヴァリエール公爵を殺しに行くとは言えない為、レイは口から出任せを言って誤魔化した。

「成る程……。しかし、ここ最近のラ・ヴァリエール公爵は争いご

とをなるべく避けるように振舞っています。ここ最近兵力の増強もしていないみたいですし、あなたがいかに強くとも雇ってもらうのは難しいかも知れませんか？」

「その時はその時で考えるさ。何しろ、小さい子供を1人、養わなければならぬからな」

そう言つてレイはユイの頭を撫でた。

ユイは少しだけ慄然とした表情でレイの顔を見る。

男はふんふんと頷きながら言つた。

「そうですか……。やはりこのご時勢、我々みたいな平民は大変ですなあ。……ああ、これはこれは私ばかり話してしまつて申し訳ありません！」

男は被つていた帽子を取つて頭を下げた。

「申し遅れました。私はハイマンと言うケチな商売人です。普段はゲルマニアの方で商売をしとるんですが、少々こちらに用があらましてね。今はその帰りなんですよ」

ハイマンと名乗つた男はその日に焼けた浅黒い顔をニカツと笑わせた。

「どうです？ 御入り用のものは何かありますか？ ここで会つたのも何かの縁。お安くしますよ？」

なかなか商魂逞しい男だなとレイは思つた。

こうして他人と積極的にコミュニケーションを取り、隙あらば客にしてしまおうという抜け目のなさ。

彼は生粋の商人なのだろう。

「いや、今は特に必要なものは無い」

「そうですか……。では、また何かの縁で出会えたらその時はよろしくお願いしますよ、傭兵さん」

そう言うと、男は軽くウィンクして見せた。

いつかこの男と再会したら、その時に思いがけず何か買ってしまったいそうである。

「お、そろそろヴァリエール領ですよ。傭兵さん」

外の風景を覗いて見ると、畑が広がる田園地帯を進んでいた。農民たちがせっせと畑仕事に精を出している。

馬車はそのまま道を進み、最寄の駅が近付いて来た。

「俺たちはここで降りることにするよ」

「いやあ、短い間でしたが旅の仲間との別れはやはり辛いものですねあ。……お、着いたか。ここをずっと先へ行けばラ・ヴァリエール公爵の屋敷が見える筈ですよ」

「有難う、ハイマン……だったか？」

「名前を覚えて頂いて光栄です。では、また縁があれば」

ハイマンは馬車の中からこちらへ向かって手を振った。

レイとユイもハイマンに向かって手を振り返す。

やがて馬車は出発し、あっという間に見えなくなってしまった。

それから暫く経ったが、2人はまだヴァリエール領内の街道に立っただけだ。

ユイが不安そうな顔で訊ねる。

「…………どうやって、ラ・ヴァリエール公爵を殺すの？」  
「それを今考えているところだ」

レイは特に問題はない。といった表情で返した。  
ユイは少しだけ啞然とする。  
そんなユイの顔を見て、レイは言った。

「まあ、何とかなるだろう」

あまりにも堂々と言ったので、ユイは逆に何か安心してしまった。

確かにレイならば何とかしてしまいそうだ。  
そっという雰囲気は何処かレイには漂っている。

「ったく、ここにいたのかい！」

突如、後ろから誰かに声を掛けられた。

振り向くと、そこにいたのはエメラルドグリーンの髪の美女であった。

レイは「待っていたぞ」と言わんばかりの表情で彼女に話し掛ける。

「やあ、フーケ」

「やあ、じゃないっつーの。全く、朝いきなりあんたの顔見た時は心臓が止まるかと思ったよ」

「悪かったな、心臓に優しくない顔で」

「大体、何であたしの泊まった宿が分かったんだい？」

「勘、だな」

「恐ろしい勘だねえ……何処そのカジノで大儲け出来るんじゃないかい？」

「お前の気配を感知した。と言ってもお前は信じないだろ？」

「そっちの方が余計に恐ろしいよ！あんたは本当に化け物じみてるねえ」

フーケは両手で体を抱いて震えるポーズを取った。  
レイはフツと笑った。

「お前が俺を尾行していた時のことを覚えているか？あの時、気配を消していてもお前が何処にいるかは分かっていた。それならば逆も可能だろ？」

「随分とまあ、簡単に言ってくれちゃってるケドねえ……」

フーケはチラリとユイの顔を見た。

「……で、この子は一体あんたのなんなのさ？……隠し子？」

「いや、違う。……実はこの子のことでお前に頼みがある」

「まさかあたしに養え！とか言わないだろうね？」

「そうしてくれるなら是非とも頼みたいが、今頼みたいことはそれじゃない」

「……何だい？……聞くだけなら聞いてやってもいいよ」

「回りくどく言うのは面倒だし、お前と腹芸するのもアレだ。単刀直入に言おう。ヴァリエール公爵家の情報……主にラ・ヴァリエール公爵の動向についてだが、それをお前に探って欲しい。出来るか？」

「……これまた無茶言うねえ。ラ・ヴァリエール公爵と言ったら彼のヴァリエール公爵家じゃないか！そこへ忍び込めってかい？」

「別に盗みに入れとは言っていない。ラ・ヴァリエール公爵の動向、その情報だけ知りたい。それならば、宝を盗むよりもリスクは少ない筈だ」

「元々でかいリスクなんだから少し小さくなったって危険なのは変わらないよ。それに情報って言っても、どっという情報が欲しいんだ

い？成功する確率はその内容にもよるよ？」

「例えば……」

「例えば？」

「ラ・ヴァリエール公爵が必ず1人で出掛ける用事……とかな」

「そんな都合のいい情報あるわけが……」

「当てはある」

レイはユイの方を振り向いた。

ユイが昨日話してくれたこと。

ラ・ヴァリエール公爵はユイの母親を看病していた水メイジを呼び寄せた。

一体、何の為に？

ただの嫌がらせ？

……そんなことする意味も理由も無い。

誰かが急病だった？

……ヴァリエール公爵家は貴族の中でも有数の名家だ。お付きの水メイジや懇意にしている水メイジの1人や2人はいるだろう。

それらの水メイジでは解決出来ない問題があった？

……これが正解だろう。でなければわざわざ他人が懇意にしている水メイジを呼び寄せたりはしない。

では、その問題は何か？

恐らく、ずっと長い間病気で苦しんでいる身内がいたのだろう。

その身内には自分たちが知る水メイジのありとあらゆる治療を試したが効果が無かった。

それ程の重病なのだろう。

だから、一縷の望みを託してユイの母親を看病していた水メイジを呼び寄せた。

ユイの母親も相当な重病だったらしいから、その水メイジも相当優秀だったのだろう。

これがラ・ヴァリエール公爵の目に留まらぬ筈が無い。

そして、それ程の重病ならばいくらその水メイジが優秀でも完治はしていないだろう。

貴族の中には体裁を保つ為、重病の身内を別の場所で療養させることがあると聞いたことがある。

ここからはあくまで都合のいい想像だが、ラ・ヴァリエール公爵の身内が別の場所で療養しているならば、その病気の身内をラ・ヴァリエール公爵が訪問する日があるかも知れない。

いや、身内だからこそ訪問せざるを得ないだろう。

そして、ラ・ヴァリエール公爵と言えば、ただでさえ国の重要人物と謳われているような人物である。

ならば堂々と訪問はしない。

訪問するならば隠れてこっそりとする筈。

その時を狙えば……。

レイは自分の考えをフーケに伝えた。

「出来るか？」

「……ちよつと考えさせてくれるかい？」

フーケはそう言うと考え込んだ。



無論、先程の意見はあくまでレイの推測であり、希望的観測も含まれている。

理路整然としているなどと胸を張って言えたようなことではない。断られる可能性は低くは無い。

断られれば、別の手段を考えるまで。

レイが1人そう思考にふけていると、ユイが心配そうな顔でレイを見つめた。

レイはユイの頭を馬車の中でしたのと同じ様に撫でた。

そうしている間もフーケは考え込んでいた。

暫く考えた後に「ウン」と頷くと、フーケはレイに改めて向き直った。

「面白いじゃないか。いいよ、引き受ける。あんたには借りもあるしさ。ついでにヴァリエール公爵家の宝でも見つけたら儲けものだしねえ。『土くれのフーケ』一世一代の大仕事だね！」

そう言うフーケの顔は、まるで悪戯をする子供のように無邪気な顔となっていた。

## ヴァリエール領にて 1（後書き）

オリキャラその2、ハイマンが登場しました。  
年齢的には40歳程度です。

そして、マチルダさん再登場で話は佳境へ。

## ヴァリエール領にて 2 (前書き)

今回は多少原作とは異なる設定が入ります。  
ご了承下さい。

## ヴァリエール領にて 2

レイとユイはヴァリエール領内の小さな農村に滞在していた。いくらフーケが凄腕の盗賊とはいえ、相手はあのヴァリエール公爵家である。

そんなすぐには情報を得ることは出来ない為、暫くは何処かに滞在する必要があった。

2人は村長に話をつけて、宿泊費を出す代わりに村長の家へ泊めてもらっていた。

「すまないな、村長。急に押し掛けるような感じになって」

「いえいえ……。婆さんに先立たれてからずっと独りだったからねえ。誰かが側にいるっただけで僕は嬉しいよ。それで更に宿泊費までくれるんなら、文句なんかとても言えないねえ」

「そう言ってもらえると助かる」

レイは村長に素直な感謝を述べる。

一方、キッチンの方ではユイが何やらシチューのようなものを作っていた。

いい匂いが仄かにしてくる。

ここ数日間、村長の家の炊事洗濯などはユイが行っている。

まだ幼く、しかも元貴族の令嬢という身でありながら、こうして家事が出来るのは、そういった教育が行き届いていたことは勿論、やはり母親が病気だったということも関係しているのだろう。

「……出来た」

耳をすまさないで聞こえないほど小さな声でユイは料理の完成を告げた。

村長はそんなユイを見ながら微笑む。

「あんたたちと一緒にいると、まるで息子と孫娘が同時に出来たみたいで……。死んだ婆さんは子供が作れない体で、孫はおるか、子供すらいなかったからねえ。いい死に土産だよ」

「あんたが死んだら次の村長はどうするんだ？」

「村長つて言っても、ここは見ての通り村と呼ぶのもおこがましい集落でして。こんな集落でも人がそれなりにいると領主様は税をお取りになりますから、そういう時に面倒な手続きをする役を押し付けられただけなんですよ。儂が死んだら、別の奴がその役をやる。それだけでねえ」

「そうか」

レイはそれだけ言うに留めた。

すると、ユイが出来たてのシチューを皿に入れて運んできた。

「……………どうぞ」

レイは木のスプーンでシチューを一口啜った。

村で採れた野菜の残りくずで作った割にはなかなかの出来である。

「美味しいな……………体も温まる」

「……………有難う」

ユイははにかんだ。

その様子を村長は満面の笑みで見つめていた。

こうして今日も楽しい夕餉となった。

食事が終わると、村長はゆっくりと立ち上がる。

「さあ、儂はもう寝ますだ。どうも年を取ると、飯食った後にすぐ

に眠くなっていけねえ」

そう言つて村長は寢室へと向かった。

この数日間、村長は夕食の後はずぐに眠っていた。

だが、早く眠りにつく割にレイより起きるのは遅かったりする。

食器の片付けを終えたユイはテーブルに戻って椅子に座ると、向かい側に座っているレイに訊ねた。

「……怖くないの？」

「……何がだ？」

「……メイジが。レイは平民でしょ？」

ここハルケギニアの世界において貴族、そしてメイジという存在は別格である。

平民が彼らに逆らうことは勿論、戦うなど以ての外である。

仮にそういうことを口にする平民がいたら、気でも触れたかと思われることは必至であろう。

特に貴族の場合は下手すれば侮辱した罪で処刑されかねない。

これから対峙するであろうラ・ヴァリエール公爵は生粋の貴族で優秀なメイジである。

彼の伴侶が伝説とも謳われた『烈風のカリン』であることからイマイチ忘れられがちだが、彼自身も高い実力を秘めている。

殺すと言つて簡単に殺せるような相手では無いのだ。

レイは確かに何処となく普通の平民とは違う雰囲気を持っている。だが、魔法を使うことも出来ない彼は、やはりただの平民でしかないのだ。

「逆に殺されるって思わないの？」

「……じゃあ、逆に聞くがメイジだから何なんだ？」

ユイの問いにレイは淡々と答えた。

ユイはあまりに素っ気ない答えだったのと、自身もレベルが低いながらもメイジの端くれであつた為、少しムツとした。

「だって、メイジは魔法を使う……。私だって少しの魔法なら使える。でもレイは使えない。魔法を使われたら……」

「魔法を使われたら何が不味いんだ？」

「え？」

「魔法なんて言ったところで所詮は武器の一つに過ぎない。銃やナイフと一緒に」

あつけらかんとレイは言つてのけた。

ユイはレイのあまりに無謀な態度に首を横に振つた。

「レイは分かつていないよ。魔法って怖いんだよ？」

「分かつてるさ。十分過ぎる程に、な」

そう言うと、レイは左手の手袋を外した。

ユイはレイの左手を見て思わず息をのんだ。

「……それ……!!」

レイの左手は細かな傷跡があちこちに刻まれているが、それより目立ったのは左手の半分を覆うほどの火傷の跡であつた。

肌が妙な色に変色し、ただの火傷で無いことが一目で分かる。

「どう……したの？」

「……これは何処ぞの陰険クソジジイとやり合つた時に出来たものだ。相手は相当な強者だつた。そいつはスクウェアを超えた。とか

自称していやがったが、その戯れ言に違わないくらいには強かったよ。そいつの火の魔法を受けて左手が炭クズみたいになってな。知り合いに治療してもらってようやくここまで回復したよ。だから俺には魔法の恐ろしさも便利さもよく分かってるつもりだ」

「……そのメイジは？」

「叩き切ってやったさ。この手で真つ二つにな。……まあ、それでも死んでとは思えないのが奴の本当の恐ろしさではあるが……」

レイは苦笑する。

「俺にとって魔法なんてそんなようなものだ。相手が使う武器の一つでしかない。使われると不味いなら使われる前に斬り伏せてしまえばいい」

普通の人と言えば、夢物語、または妄言となりそうな言葉だが、レイが言うとまるで簡単な出来事のように聞こえる。

「俺もお前に一つ聞いていいか？」

「……？なあに？」

ユイが小首を傾げた。

レイはユイの顔を改めて見据えた。

「お前は本当はどうしたいんだ？」

「……どうということ？」

「言葉を変える。お前は本当にラ・ヴァリエール公爵を殺して欲しいのか？」

「……どうしてそう思うの？」

「お前の言葉には殺意が無いからだ」



レイは指摘する。

「本気で相手を殺したいと思ったら、普通は殺意を抱く。それはどんなに隠していても言葉や仕草から読み取ることが出来る。だが、お前からは一切の殺意を感じない」

「……………」

「お前は一体どうしたいんだ？」

「……………分からない」

ユイはそう言うところをボロボロと大粒の涙を零した。

「分からない……………分からないよう。ラ・ヴァリエール公爵がおじちゃんを呼び出さなければおじちゃんがおかあさんを助けてくれた。おじちゃんを取ったラ・ヴァリエール公爵がにくい！殺したい！でも、でも……………分からないの」

今、ユイの中には様々な感情が渦巻いているのだろう。

母親を失い、家を失い、全てを失った。

幼い彼女がその現実をすぐに受け止めるのは、とても難しいことだったに違いない。

最初は困惑、そして時を重ね、現実を受け入れていくことでそれは復讐心にならなくなって行った。

だが、幼い彼女は憎悪をずっと心の中に飼っておける程強くは無かった。

彼女は生きている。

だから、日々を重ねていく内にそれは別の感情によって薄れていく。復讐相手のラ・ヴァリエール公爵にしても、彼が直接ユイの母親に手を下したわけでも無いが故に復讐の相手としてのイメージは薄かったのだ。

「殺して欲しい」と街行く人たちに頼んでいたのも、その憎悪を忘

れたくない一心だったのだろう。

憎悪を忘れることは母親を忘れることに等しい。

幼い彼女にはそう思えて仕方なかったのだから。

本当はもう復讐なんて考えていないのかも知れない。

「……でも、復讐は成就させるべきだ」

「え？」

レイの意外な一言に、ユイは目を丸くした。

「俺の知り合いがこう言っていた。『復讐しなかった後悔は、してしまった後悔よりも深い』とな。俺は何となくだが理解出来る」

「復讐しなかった後悔……」

「殺す、までは行かなくても、すべき復讐はするべきだと、俺は思う」

「レイ……」

（レイ、君は歪んでいるね）

かつて、言われた言葉。

レイはそれを自覚しているつもりであった。

自分は決して正しくないし真っ直ぐではない。

間違っていて当然の存在であると。

だが、改めて他人に言われると、それに反発している自分がいることに気が付く。

自分はどうありたいのか。

レイはまだそれを見つけてはいない。

だから、旅を通してついでにそれを探しているのだ。

「俺は歪んでいるか？」

思わずレイはその言葉を口に出していた。  
すかさず口元を手で押さえる。

自分はどんな言葉を期待しているのか。  
ユイが不思議そうにこちらを見ている。  
そして、何か言おうと口を開こうとした。

その時、何かが窓を叩く音が聞こえた。  
窓の方へ目をやると、そこに人の影が見える。

「……来たか！」

レイの言葉にユイは思わず口をつぐんだ。  
目をこしこしと擦って涙を拭き取る。

2人は村長の家を出て裏手に回ると、そこには黒いローブを羽織ったフーケが立っていた。

フーケの姿は夜の闇に溶け込んでおり、よく目を凝らさないと気付かない程である。

こういうところからも彼女がただのコソ泥とはレベルが格段に違うことが伺える。

レイはフーケに話し掛ける。

「世間を騒がす大怪盗にしては、少し遅かったんじゃないか？」

「相手はあのヴァリエール公爵家だよ？ 寧ろ、これでも早い方さ」

「で、どうだった？」

「あたしを誰だと思ってるんだい？ あんたのお望みの情報、掴んで来たよ」

フーケは指でOKのマークを作った。  
レイは素直に感心する。

「流石は世間を騒がせているだけのことはあるな」  
「実力あつての名声ってわけさ。……で、ラ・ヴァリエール公爵のことなんだけどさ」

フーケは辺りを警戒し、声を潜める。

「ラ・ヴァリエール公爵は月に1度か2度、虚無の曜日に非公式で、ある場所へ出向いているそうだ」

「ある場所とは何処だ？」

「ラ・フォンティーヌ領。聞くところによると、そこにはラ・ヴァリエール公爵の娘が療養しているそうだよ。ラ・フォンティーヌ領へ続く道でヴァリエール公爵家の馬車が通ったのを何人かの農民が目撃してる。お忍びの訪問の割に嚴重に口止めていないのを見ると、たかが平民と氣にも掛けていなかったみたいだねえ。まあ、根っからの貴族主義の公爵様らしいけどさ」

そう言うと、フーケは肩をすくめて見せた。

「虚無の曜日……丁度明日か」

「更に耳寄りな話があるんだけどねえ、明日の昼頃にどうやらラ・ヴァリエール公爵が例の非公式訪問を行うみたいなんだよ」

「それは本当か!？」

「ああ、間違いないよ。非公式訪問の際にいつも連れる護衛のメイジを呼び寄せたらしいんだよ」

「なるほど、それならラ・フォンティーヌ領へ先回りするか……それにしてもお前のその情報網は凄いな」

「情報は本業の命綱だからねえ。それなりに信頼出来る情報屋をあ

「ここに置いておくのは常識だよ」

「怪盗の常識は知らんが……助かったよ」

「いいよ。それに言っただろう？ あんたには借りがある。それを返すチャンスが来たと思えばね」

フリーケは不敵な笑みを浮かべて見せた。

「行くぞ、ユイ。今から行けば、ラ・ヴァリエール公爵より先にラ・フォンテーヌ領へ着くことが出来る」

「……うん」

こくりと頷くユイ。

レイはフリーケに向かって袋を投げた。

フリーケは慌てて受け取る。

「何だい？これは？」

「あの爺さんに渡す予定だった宿泊費の残りだ。俺たちはもう発つてここへは戻らないからな。その金はお前への謝礼代わりだ」

「別にあんただったら金はいらないんだけどねえ。おや、そこそこ入ってるじゃないか。……あとでテファのところに送るかねえ」

「……有難うございました」

ユイは礼儀正しくぺこりと頭を下げた。

フリーケは笑いながら手を振ると、やがて夜の闇に完全に溶け込み、その姿を消してしまった。

レイはユイを連れて夜の街道を進む。

その道中、ユイはボソッと呟いた。

「レイは別に歪んでいないよ……」

その言葉はレイに届くことは無く、夜の闇へと消えて行った。

## ヴァリエール領にて 2（後書き）

カトレアさんをこっちの都合で自宅ではなくラ・フォンテーヌ領へ移動させてしまいました。  
色々と申し訳ございません！

## ラ・フォンテーヌ領にて 1（前書き）

今回もかなりのオリ設定が入っています。  
ご了承下さい。



## ラ・フォンティーヌ領にて 1

ラ・フォンティーヌ領に2人が辿り着いたのは、夜明けから少し経った後であった。

まだ朝の気配が辺りを支配している。

フーケから教わった場所へ近付くと、大きな屋敷が見えた。あそこにヴァリエール公爵の娘が療養しているという。

「行くぞ」

「……………！」

レイの言葉にユイは無言で頷いた。

なるべく人目に触れずに、道無き道を移動する。

やがて、屋敷の敷地内へと足を踏み入れた。

敷地内に入ると、珍しい鳥や動物などが放し飼いにされているのをよく目にした。

山猫や狼などがこちらを監視するように見つめている。

本来夜行性である筈の彼らがこんな朝っぱらから人前に姿を現すのはどう考えても不自然である。

（人の手で飼われた……………か）

何処か威嚇するような目付きをしているが、迫力は野生のそれとは明らかに劣っている。

恐らく屋敷の中の“主人”を守ろうとしているのだろうが、これでは小心者のコソ泥ぐらいしか追い払えないだろう。

レイが少しだけ殺気を向けると、彼らは目に見えてたじろぎ後ずさ

っていった。

相手が自分では敵わない存在であることを認識出来るくらいには野生が残っているようである。

屋敷の側まで来ると、レイは感覚を研ぎ澄まして、敵の気配を探った。

これだけ大きい屋敷で、更に公爵の娘が療養しているとすれば見張りも少なくはないだろう。

(……おかしい。明らかに人が少ない)

先程よりも感覚を研ぎ澄ますが、それでも感じる気配は僅かであった。

レイのこの能力は何度も死線を潜り抜けた末に身に付けたもので、感覚的なものである。

機械のように正確では無く、相手の数が多いか少ないかくらいしか分からない。

それなりの実力者であれば、その者の“<sup>オーラ</sup>気”として認識することも可能であり、フーケの時のように相手を探すのに使えることもある。この能力は幾多の場面でレイを救って来た。

敵の数を知るとは戦場ではとても重要なことであり、それ如何で戦い方も変わってくるからである。

故に、レイは自分のこの感覚を大事にしていた。

それが示す情報なので、疑うのはレイにとっても不本意ではあるが、常識的に考えて公爵家の娘の家の警備が手薄などとは有り得ないことである。

(考えられるのは、ヴァリエール公爵自身が既に娘を切り捨てているか、もしくは娘本人がそう言い付けたか……ってところか)

月に必ず1度は非公式で訪問する程に通いつめているヴァリエール公爵が、いくら重病だからとは言え愛する娘を切り捨てるとは考えにくい。

ということとは、その娘があまり警備されるのが好きではないという方が可能性が高いであろう。

自殺願望でもあるのだろうか。とレイは思った。

公爵家の娘である以上、彼女を付け狙う輩はいくらでもいるだろう。しかも、本人は重病なのである。

それに対しての備えを拒否するのは、公爵家に生まれた人間としては正気の沙汰ではない。

僅かに感じた気配は、恐らくヴァリエール公爵が彼女に内緒で置いて行った者であろう。

そこそこの手練ではあるようだ。

「見張りが邪魔だな……」

レイは1人ごちた。

「ユイ、お前はここで待っている。すぐに戻って来る」

「え？……うん」

レイは自らの気配を消すと、さっと駆け抜けて行った。

「ヘクトス。調子はどうだ？」

「ダイラーか。ああ、悪くは無いよ」

2人の男がそれぞれ庭の整備をしながら会話を交わす。  
ヘクトスは植木の手入れを。

ダイラーは花に水をやっていた。

2人は、この庭について何か変化は無かったか。  
動物たちはどうしているか。

などの情報をお互いに笑顔交じりで交換し合っていた。  
そうした話を終えると、2人は途端に顔から笑みを消して、違う話を始める。

「……今のところ、何か問題は無いか？」

「ああ。問題は無い」

「……この間は、山賊の連中が屋敷の中へ押し入ろうとしやがったからな」

「そうだな。あの時は俺とお前で連中をやらなかったら、カトレアお嬢様に危害が及ぶかも知れなかった」

「カトレアお嬢様もお嬢様だな。『警備はいりません』って頑なに拒んでしまわれて。……公爵様からのお言い付けで、俺たちが庭師としてここに潜り込んでなければ何度死んでいたか」

「侍女や執事も遠ざけて……あの大きなお屋敷にはカトレアお嬢様と最低限のお付きの者しかない」

「……こんなこと聞かれたら公爵様に殺されるかも知れないけど……死にたいんだろうな、カトレアお嬢様は」

「やはり、御病気のことを負い目に感じていらっしやる？」

「……エレオノールお嬢様もカトレアお嬢様の為にアカデミーへ行って研究の毎日……この間のご婚約も破談となってしまったそうだ」

「ルイズお嬢様もカトレアお嬢様の為に水メイジになると仰られて

ましたね。……御自分の御病氣のことで愛する姉と妹の将来が狂わ  
してしまうことが耐えられないのかも知れないな」

「……ああ、始祖ブリミルも何と残酷な運命をカトレアお嬢様に背  
負わされたのか」

「……そろそろ仕事に戻るぞ。……庭師のな」

「……ああ」

ヘクトスとダイラーはそれぞれ仕事に戻ろうとお互いに背を向けた。  
その時であった。

「!？」

ヘクトスは目の前に見知らぬ男が現れたのを目視すると、その直後  
に重たいハンマーで殴られたような衝撃を腹部へ受けた。

胃の中のものが急激に逆流して彼の口を塞ぎ、呻き声一つ上げられ  
ずに膝をつく。

その状態で頭部へ更なる衝撃を受け、ヘクトスはそのまま深い深い  
闇に沈んだ。

ドサツという音を聞いて慌ててダイラーは杖を抜いて振り返る。  
しかし、そこには倒れたヘクトス以外に誰もいなかった。

「ヘクトス!!」

ヘクトスへ駆け寄ろうとした瞬間、ダイラーの首に何かが巻きつい  
た。

それが男の腕だと分かった瞬間、そのまま絞め上げられた。

急激に首を絞め上げられた為、瞬間的に呼吸が止まり意識が混濁す  
る。

首に巻きついた腕はそれ程太くも無いのに、振りほどくことが出来

なかった。

男はダイラーの手に持った杖を奪うと、目の前でへし折って見せる。そして、ダイラーの耳元で囁いた。

「……他に見張りは？」

「……賊に語る言葉など無い！」

「……………」

男はダイラーの口に片手を突っ込むと、奥歯を2、3本素手で引き抜いた。

「ゴア！？ガッ！！！！」

激痛と同時に口の中が鉄の味に塗れる。

男は冷たい声でもう一度耳元で囁く。

「他に見張りは？」

「……いない。俺とヘクトスだけだ」

「見張り以外は？」

「……お嬢様を世話をする者が1人いる。それ以外は……いない」  
「そうか……………」

男はそれだけ言うと、首を絞める力を強めた。

ダイラーはあつという間に意識を手放し、口から血を零しながらガクツとうな垂れる。

それを確認すると、男は彼らを近くの茂みの中へ隠してその場を去って行った。

数分後、レイが戻ってくるのを確認してユイは安心する。

「レイ……！」

「見張りは消した。他にはいないそうだ」

「……殺したの？」

「いや、殺してはいない。それなりに怪我は負わせたかも知れんが、魔法なら十分治療出来るレベルだ。……屋敷の中にも世話係が1人いるだけらしい。乗り込むなら今だな」

「……分かった」

レイとユイは堂々と正面から屋敷へと乗り込んだ。

屋敷の中へ入ると、中にも様々な動物たちが放し飼いにされていた。まるで、動物園のようである。

2人はそれらに構わず進んで行くと、途中で中年の女性と鉢合わせする。

どうやら彼女が見張りの言っていた世話係のようだ。

「……ひ、ひいい、ど、どちら様で……？」

「調度いい。案内しろ。ここで療養しているという女の元へな」

そう言うレイは彼女を案内役へと仕立て上げた。

彼女も恐怖のあまり、レイの言いなりとなっていた。

彼女はある部屋の前まで案内すると震えながら言った。

「こ、ここがカトレアお嬢様のおおお部屋でございます……」

レイとユイは頷き合うと、その部屋の扉を躊躇無く開けた。部屋の中には、大きなベッドとその中で上半身を起こしながらこちらを見ているピンクブロンドの女性がいた。

彼女は柔らかな笑みを浮かべると、その可憐な口を開いてレイへと話し掛ける。

「どなたですか？……私に何か用ですか？」

「ああ……」

レイは感情も込めずにそれだけ言うと、部屋の扉を閉めた。



## ラ・フォンテーヌ領にて 1（後書き）

完全にオリ設定入ってますね（汗）。

あまり原作と乖離してしまう展開は少ない方がいいですかね？  
ご意見、ご感想お待ちしております。

## ラ・フォンテーヌ領にて 2（前書き）

ユイの復讐の物語もいよいよ佳境を迎えました。  
不定期更新と言った割に、こっちのが定期的に更新されてるのは内  
緒です（汗）

## ラ・フォンティーヌ領にて 2

某日、虚無の曜日。

ラ・ヴァリエール公爵は護衛用に2人のメイジを連れて、ヴァリエール家を出発した。

馬車を走らせ、ラ・フォンティーヌ領へと急ぐ。

車内は重たい沈黙に満ちており、2人のメイジも口を閉じて、ただじっとしているのみであった。

ラ・ヴァリエール公爵が目を閉じ、ため息を吐く。

「……またもカトレアを救ってくれる水メイジは見つからなかったか」

誰に言うでも無く、そう呟く。

こうして月に1度か2度、わざわざ会いに行くのも、ただ愛娘の顔見たさだけで行くわけではない。

巷で評判の腕のいい水メイジを探しては、治療の為に連れて行くのも目的の一つであった。

しかし、どんなに腕のいい水メイジを連れて来ても、娘の病気を完全に治療してくれる者は1人もいなかった。

現状維持が関の山である。

そうして国内有数の水メイジを次々と連れて行き、今では連れて行く水メイジもいなくなってしまった。

それでも、娘の顔を見たいと思うのは親としては当然の感情である。故に、訪問自体を止めることはしなかった。

ラ・ヴァリエール公爵は目の前に座る2人のメイジに声を掛けた。

「エイフラン、シイモン」

「「はっ！」」

「……いつもすまないな。私の我が俣に付き合わせてしまつて」「そんなことはありませんぬ！」

エイフランが首を振って否定すると、シイモンも続く。

「我々の身も心も公爵様のものでございます。何をお気遣いなされますか！」

「公爵様は気兼ねなく、我々をチェスの駒のように扱って下さつて良いのです」

2人の言葉にラ・ヴァリエール公爵は目頭を押さえる。

「……私としたことが、カトレアのことです少々参つていたようだ。そうだな、貴様らの命は私のものだ。これからも存分に働いてくれるな？」

「勿論でございます」

「右に同じ……！」

その時、ポツポツと雨が窓を叩き始めた。

ラ・ヴァリエール公爵を乗せた馬車が間もなくラ・フォンティーヌ領へ入るといふ頃には雨は本降りとなつていた。

「……嫌な天気だな」

ラ・ヴァリエール公爵は呟いた。

まるで、この先の未来を暗示するかのようになつた空を見上げて。

ラ・フォンティーヌ領に入ってから暫くすると、カトレアが療養している屋敷が見えて来た。

その途端、かつてない程の不安に襲われた。

（何だ……このもやもやしたものは？）

ラ・ヴァリエール公爵は突然湧き上がった不安を何とかして振り払おうとする。

……大丈夫、何も無い。

いつもの様に屋敷の中でカトレアと世間話をして、その後に帰る。それだけだ。

……本当に？

ザーーーーー

しかし、それを許さないかのように雨足は強くなるばかりであった。

「あなたたちは……一体何者なんですか！？」

カトレアは顔に不安の色を滲ませながら言った。

レイはまるでそこらに落ちている石を見るかのように興味無さそうな顔でカトレアを見つめている。

その無機質で機械的な表情がカトレアに恐怖を与えていた。

カトレアは幼い頃からとても感受性が強かった。動物たちの心が手に取るように理解出来、まるで会話をしているかのようであった。

動物たちもそんなカトレアに懐き、自然とカトレアの周りには様々な動物たちが集まるようになっていた。

また、カトレアは人の心の機微にも敏感であった。

相手がどういう人物であるかも、一目見ると何となくだが分かるような気がしていた。

そしてそれは実際によく当たっており、カトレアの勘のするどさは、まるで魔法みたいだと彼女の父や母も驚きながら話していた。

カトレア自身は人の心を完全に理解出来るなどと自惚れたことは無いが、それでも人と出会った時の第一印象は大事にしていた。

だからこそ、目の前の男にカトレアは脅えていた。

それは相手が殺意に満ち満ちていたからとか、そういうことでは無かった。

目の前の男があまりにも空っぽであること。

そのことに脅えていた。

その目はガラス細工のようで、生気を感じられなかった。

その口は死人のような土気色で、まるで呼吸をしていないかのよう

に微動だにしていなかった。

そして、その心は何も無い、正に空虚であった。

彼女のそう多くは無い出会いの中でも、レイは異質の存在であった。まるで人間であることを捨てているかのよう。

「……俺はまだ人間を止めたつもりは無いんだがな」  
「え？」

レイの一言にカトレアは思わず息が止まる。  
自分の心が読まれたのか。

そう思っていると、レイがフツと笑う。

「前にそんな風に俺を言った奴がいてな……。お前は今、そいつと同じ目をしていたぞ？」

「……すみません」

カトレアはそう言つて、本当に申し訳なさそうに頭を下げた。  
それを見てレイは肩をすくめる。

「あんたは面白い人だな。今の状況を見てみる。あんたの生殺与奪を握つてるのは俺たちだ。罵られこそすれ、謝られる道理は無いな」  
「……すみません」

カトレアは再び頭を下げる。

改めてレイの顔を見ると、先程よりかは人間らしさを感じられるようになっていた。

どうやら、先程は不安などで少々困惑していたらしい。

とは言え、やはりレイの心は他の人に比べて読みにくいことには変わらない。

カトレアは不安な表情のままレイの顔を見つめていた。

レイは興が削がれた、という表情でユイの方へ顔を向ける。

「……………」

ユイは無言ではあったが、まるで悪鬼のような目付きでカトレアを睨み付けていた。

歯を食い縛り、拳を強く握り締めている。

ユイに取ってカトレアは母親が死ぬことになった最大の要因である。それを実際に目の当たりにすることで、ユイの中で燻り始めていた復讐心に火がついたのであろう。

レイは再びカトレアの方へ顔を向けた。

「俺たちがここへ来たのは何故か、それは分かるか？」

「いえ……。でも、あなたの隣にいるその子からは私に対する強い憎しみを感じます」

カトレアはユイの方へ視線を移した。

「ごめんなさい……。何であなたがそんな風に私を憎んでいるのか、私には分からないの……」

「……………！」

ユイは何も言わない。

ただ無言で睨み付けるだけであつた。

レイが言葉を続ける。

「ここに用があるのはこの子……ユイだ。勿論、あなたにも用はあるが、それ以上に用のある奴がいる」

「……もしかしてそれは！」

「あんたの父親、ラ・ヴァリエール公爵。俺たちはそいつへ復讐の為にやって来た。いや、俺たちでは無いな。この子は、か。俺はその手助けた」

「……………！！！」

カトレアは絶句する。

まだ見た目にも幼い少女が、自分と父親へ復讐の為に、ここへとやって来た。



そして、その理由にまるで見当がつかない。  
そのことにカトレアは大きなショックを受けていた。  
すると、カトレアは急に咽始める。

「ウツ、ゴホツ、ゴホツ！」

「カトレアお嬢様！？」

レイの後ろで震えていた世話係の女性が慌てて部屋内に置いてある  
水差しを取ってカトレアへと駆け寄った。

水差しを直接カトレアの口に付け、少しずつ彼女の口の中に水を流  
し込む。

カトレアの喉がごくりと動く。

「……ハア、ハア。有難うビーチエ。も、もう大丈夫よ」

「し、しかしカトレアお嬢様！！」

「ハア、ハア……」

荒い呼吸を何度も繰り返すカトレアだったが、暫くするとそれも落  
ち着いてくる。

「……本当に大丈夫よ。急なことに少し驚いただけ。あなたはここ  
から出た方がいいわ。もしかしたらあなたを巻き込んでしまつかも  
知れない」

「そ、それは出来ません！！カトレアお嬢様にもしものことが起き  
たらどうなさるおつもりですか！」

「……すみません」

「カトレアお嬢様！そんなこんな卑しい身分の者にお下げにな  
らないで下さい」

「……すみません」

そのやり取りを冷めた目で見ていたレイは再び口を開いた。

「まあ、今すぐにあんたをどうしようってことはしないさ。ただ、あんたもこの子の復讐の相手だということを分かって貰いたくてね」  
「……あなたたちは悪魔よ！」

レイの言葉を聞くなり、ビーチと呼ばれた世話係の女性がこちらをまるで汚物でも見るかのような目で睨み付けた来た。

「カトレアお嬢様が何をしたって言うのですか！？お嬢様は産まれた時から御病気で、今までも決して幸福では無かったのですよ！？そんなお嬢様にあなたたちは……」

「何もしなかったことが悪いってこともある」

「！？何ですって！？」

「関係者なのに何もしていないから、本人は自覚無し。これが一番タチが悪いと俺は思うがな」

「……一体どういうことなのですか？」

カトレアが震えながら訊ねた。

「一体、私はその子に何をしてしまったのですか？」

「カトレアお嬢様！こんな連中の言葉をお耳に入れてはいけません  
！！」

「ビーチエ、それは違うわ。耳を塞いではいけないの。私は……私はこの子が私を憎む理由を知らなければいけない」

「カトレアお嬢様……」

レイはカトレアの言葉を聞いて、ため息を吐く。

ふと窓から外を見ると、雨が降っているのが見えた。

大降り、という程ではないもののすぐに止みそうな感じは無い。

「ん？」

入り口の方に屋敷の中へ入って来る馬車が見えた。  
馬車にはヴァリエール公爵家の紋章が付いている。  
それは間違いなくヴァリエール公爵家の馬車で、中にはラ・ヴァリエール公爵がいる。

「行くぞ、ユイ」

「……………」

ユイはこくりと頷いてレイの後についていった。  
レイの背中へ向けてカトレアが言った。

「何処へ…………？ もしや父を！？」

「……………」

レイは何も答えずにカトレアの部屋から出て行く。  
閉まる扉に向かってカトレアは手を伸ばすが、それは何も掴むことは無かった。

ビーチェがカトレアの手をそつと両手で包み込む。

「カトレアお嬢様……………」

「ビーチェ……………」

部屋の中に残されたカトレアとビーチェは互いに身を寄せ合い、窓から雨が降りしきる庭を見ていた。

## ラ・フォンテーヌ領にて 2（後書き）

次回、とうとうラ・ヴァリエール公爵との対峙です。

ラ・フォンテーヌ領にて 3 (前書き)

いよいよラ・ヴァリエール公爵との対面です。

### ラ・フォンティーヌ領にて 3

屋敷の敷地内に入ると、ラ・ヴァリエール公爵一行は馬車を降りた。雨はまだ降り続いており、すぐに屋敷の中へと入る。

「ふー、まったく……何もこんな日に降らんでもいいだろうに。……まあ、天気相手に怒るのも馬鹿馬鹿しいか」

そう言うと、ラ・ヴァリエール公爵は服に付いた水滴を払った。屋敷の中はしんと静まり返っている。

普段ならば、放し飼いに動物の鳴き声やら気配がする筈である。いくら雨が降って辺りが暗くなっているからと言って、ここまで静かなのは何処か不気味である。

「おい、ビーチェ！おらんのか!？」

大きな声でカトレアの世話係を呼ぶ。

呼べばすぐに来るように指示してあったが、彼女からの返事はない。

「……サボっているのか？フン、馬鹿な。あいつに限ってそんなことある筈が無い」

10年以上も愛娘を見守り続け、自分の命に背いたことも無い従者である。

その仕事ぶりにはラ・ヴァリエール公爵も最大限の評価を与えている。

そんな人間が今までサボったことも無いのに急にサボったりするだろうか。

「そう言えば、ヘクトスにダイラーの姿も見えないな」

庭師として潜り込ませた、カトレア護衛用のメイジ2人。

警備の為に衛兵やメイジを置こうとすると、カトレアはとにかく嫌がった。

その為、こうして身分を偽らないと彼女の護衛をする者を置くことが出来なかった。

そうやって他にも護衛用のメイジを置こうとしたが、それもカトレアは強く拒否を示し、結局最初に置いた2人しか彼女を護衛する者はいない。

彼らは一応庭師なので、普段ならば庭で仕事をしている筈だが、外は雨が降っている。

ならば屋敷の中へ居てもおかしくない筈である。

「……この雨の中、庭の手入れをしているのか。まあ、それもいいだろ」

彼らは自分の護衛についているエイフラン、シイモンに負けず劣らず優秀なメイジである。

何かあったとしても、ただの悪党に負ける。ということは無いだろうと思ひ直す。

「おい、ビーチェー！ビーチェー！」

もう一度世話係の名前を呼ぶが、やはり返事が無い。

ラ・ヴァリエール公爵は取り敢えずカトレアの部屋まで行くことにした。

廊下を歩いていると、やはり何かいつもと違う雰囲気を感じる。

ラ・ヴァリエール公爵は思わず気を張った。

「カトレア……？」

愛娘の名前を呼んでみる。

娘に何か起きたのではないかと思い、動悸が早くなっていくのを感じた。

その時、エイフランがラ・ヴァリエール公爵の耳元で囁いた。

「公爵様……お気を付け下さい。誰かいます」

エイフランがそう進言するとラ・ヴァリエール公爵は無言で頷いた。この違和感、侵入者がいると考えたら納得出来るものであった。ということは、ヘクトスとダイラーはどうなったのだろうか。

やられた。

そう考えるのが自然であろう。

となれば、相手は相当の実力者であることが伺える。

ラ・ヴァリエール公爵は杖を抜き、身構えた。

彼とて歴戦のメイジである。

例え相手がただ者では無くとも、それに遅れを取るようなことは無い。

神経を研ぎ澄ますし、相手の気配を伺う。

エイフランとシイモンも杖を抜いて身構えた。

辺りを沈黙が支配し、雨の音だけが僅かに聞こえる。

稲光が辺りを照らした。



その時、バン！という扉が開く音と同時に一迅の風が通り抜けた。それは剣を構えたレイであった。

次の瞬間、シイモンの杖を構えた腕が宙を舞った。

あまりに速すぎる太刀筋に、本人もすぐには腕を斬られたことに気が付かなかった。

切り口から血が噴き出すまでに数秒のタイムラグが発生した。

「うわあああああ」

腕から血が噴出すのと同時にシイモンは悲鳴を上げる。

レイは体の向きを変えると同時にシイモンの後頭部へと蹴りを放った。

それが綺麗に延髄に決まると、シイモンは呆気なく失神する。

「き、貴様！」

エイフランは振り返ると、レイに杖を向け、詠唱を開始する。

だが、その半分も終わらない内にレイが目の前まで迫ってくると、突風をその身に受けた。

次の瞬間、杖を持つ手はエイフランの体を離れ、地面を転がる。

「ああああああ！」

エイフランが叫ぶと同時に血がまるで炭酸水のように噴射する。

レイはすかさず剣の峰をエイフランの腹部へと力任せにぶち当てた。

「うっごおあ！？」

言葉にならない呻き声を上げると、エイフランは吐瀉物を口から垂れ流しながら、糸の切れた操り人形の如く地面に突っ伏した。

この間、僅か10数秒。

2人の人間の腕を斬り落としたにも関わらず、レイの剣には一滴の血も付着していなかった。

エイフランとシイモンが犠牲になっていた隙に詠唱を終えたラ・ヴァリエール公爵は杖をレイに向けた。

「ウインディ・アイシクル！」

「……………！！！」

しかし、ラ・ヴァリエール公爵の魔法は発動しなかった。

呪文を唱え終えるよりも早く、レイの剣がラ・ヴァリエール公爵の杖を真つ二つに斬っていたのである。

ラ・ヴァリエール公爵は半分になった杖を向けながら自身の敗北を認めた。

「…………貴様、何が目的だ？」

抑えたつもりではあったが、その言葉は怒りにより震えていた。

非公式の訪問故に護衛は最低限しか連れていない。

それでも、相手に遅れを取るようなことは無いだろうとたかをくくっていた。

だが、目の前の男はあつという間に護衛のメイジを斬り倒し、自身の杖を真つ二つにした。

とんだ屈辱である。

「…………復讐」

レイはそれだけ言うと、ラ・ヴァリエール公爵の目を見据える。  
ラ・ヴァリエール公爵は苦虫を噛み潰したような顔をしながら再び訊ねた。

「……もう一つ聞く、貴様は平民か？」

「貴族に見えるか？」

「……だろうな。貴様みたいな卑しい顔した者が貴族な筈が無い」

そう言うと、ラ・ヴァリエール公爵は陰惨な笑みを浮かべる。

「貴様……ここから、生きて帰れると思うなよ？ 仮に生きて帰れたとしても、このハルケギニアに貴様が平穩無事に過ごせる場所はないと思え！」

「と、言うത്？」

「平民如きが貴族に刃を向けたのだ……貴様の顔と名は世界に轟くだろうな。罪人として！」

ラ・ヴァリエール公爵は勝ち誇ったように笑い声を上げる。  
すると、レイは哀れな者を見るような目で笑って見せた。

ラ・ヴァリエール公爵が激昂する。

「貴様……何がおかしい！？」

「そりゃあ笑いたくもなるだろうさ……つまりあんたはこう世界に触れ回りたいわけか。『彼の高名なヴァリエール公爵家の当主は、たかが平民に手も足も出ませんでした』と」

「何だと！？」

「俺は別に罪人になろうが構わない。かかる火の粉は払うだけだ。だが、その間にもあんたたちの名声は地に落ち続けるだろうがな。今まで蔑んでいた平民に敗北した貴族としてな。そんな奴がこの貴

族社会でどれだけ有意義に過ごせるか、是非とも見てみたいものだ」

「罪状などいくらでも変えられるわ！」

「つまりでつち上げるわけか。誇り高きヴァリエール公爵家が聞いて飽きれるな。『偽らず背を向けず』があんたたちの信条じゃなかったのか？」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

これが普通の貴族ならばなりふり構わなかったであろう。

しかし、ラ・ヴァリエール公爵、そしてヴァリエール公爵家は普通の貴族ではない。

王家と深い関係があり、そして貴族の手本とならなければならない存在なのだ。

それが平民にいいようにされたなどということが知られば、貴族そのものの権威が失墜しかねない。

とてもじゃないが表沙汰には出来なかった。

貴族としての矜持を何よりも重んじなければならぬラ・ヴァリエール公爵にとって、目の前のレイという存在はとても大きい。

「き、貴様という奴は！くっ……！」

ラ・ヴァリエール公爵は悔しさのあまり唇を千切れんばかりに噛みしめる。

そしてレイの顔を睨み付けるが、喉の奥から搾り出したような声を出すのが精一杯であった。

「……何が望みだ？」

「生憎だが、あんたに用事があるのは実は俺ではない。……ユイ出て来い」

レイが名前を呼ぶと、今まで隠れて様子を伺っていたユイが出て来た。

ユイの目はラ・ヴァリエール公爵へと向けられている。

ラ・ヴァリエール公爵はユイの顔を見た後、レイに訊ねた。

「……その娘は？」

「あんたが殺した母親の娘だよ」

「私が……殺した？」

「覚えていないか？一年前、あんたが呼び寄せた、元々は他人付きの水メイジのことを」

「……すまないが、呼び寄せた水メイジはここ一年でたくさんいてな……誰のことを言っているのか分からない」

「ブローリン……」

ユイがボソツと告げる。

その名前を聞いてラ・ヴァリエール公爵は目を見開いた。

「おお……。その名は覚えておる。カトレアが急な発作で生死の境をさまよっていた時に救ってくれた男だ。忘れよう筈もない」

「そのブローリンという男はこの子の母親付きの水メイジだった。」

そしてこの子の母親もまた急な発作で床に伏せていた。頼りの水メイジがいまままでな」

その言葉でラ・ヴァリエール公爵は悟った。

自分が娘可愛さに起こした行動が、目の前の少女に何をもたらしてしまったのかを。

「そう……か。そういうことだったのか」

「……………！！！」

ユイは知らず知らずの内に目から涙を流していた。

唇をきつく結び、嗚咽が出るのを防ぎながら公爵を睨み付ける。

ラ・ヴァリエール公爵は負い目もあり、目の前の小さな少女から思わず目を逸らしてしまった。

ユイはゆつくりとラ・ヴァリエール公爵の元へ近付いて行く。

そして目の前まで来ると、ラ・ヴァリエール公爵の顔を再び睨み付けた。

まるでこれからどうやって殺してやろうかと算段しているかのよう

に。

ラ・ヴァリエール公爵は観念したかのように目を閉じた。

「話は聞かせて頂きました」

その時、何処か弱々しくも凜とした声が聞こえて来た。

声のした方を振り向くと、そこにはカトレアが立っている。

「カトレア!!」

「お父様……」

ラ・ヴァリエール公爵が娘の名を呼ぶと、カトレアはそれに答える。

カトレアは何とも言えぬ沈痛な面持ちで言った。

「……私があの時死んでいれば。いいえ、もっと早くに死んでいれ

ば、こんな悲劇は起こらなかったのですね」

「何を言うのだカトレア!」

ラ・ヴァリエール公爵は愛娘の言葉にまるで悲鳴のような声を上げた。

それは親として当然の感情であった。

カトレアはラ・ヴァリエール公爵の言葉に目を閉じて首を振る。

そして、ユイの方へと顔を向けた。

「ユイ……と言いましたね？ 貴女が復讐すべき相手はお父様ではありません。……この私です」

「カトレア――！」

ラ・ヴァリエール公爵の言葉は最早カトレアの耳には届いていなかった。

ユイはこれでもかと言うほどカトレアをきつく睨み付ける。  
そして、真一文字に結んだ口を開いた。

「あなたさえ……あなたさえいなければ――！」

血を吐くように叫ぶユイの顔を見て、カトレアはただ頷いた。

「……そうです。私さえいなければ貴女のお母様は死ななくて良かったのです。……だから、貴女の手で私を殺して下さい」

そう言うと、カトレアは全てを投げ出すかのように手を広げた。  
まるで、母親が子供を抱き寄せるかのように。

「……うわああああ――！！！！」

ユイは獣のように叫び声を上げると、その小さな体でカトレアに飛び掛かった。

そして、その細い首を小さな手で力一杯絞め付ける。

「……………！！」

「うつ……………！！」

その様子を見て、ラ・ヴァリエール公爵は慌てて飛び出す。

「カトレア――！」

「……………！」

しかし、それよりも早くレイがラ・ヴァリエール公爵の首に剣をあてがい、動きを止めた。

ラ・ヴァリエール公爵は憎悪に満ちた目でレイを睨み付ける。

「貴様ああ！？その剣をどかせ！！どかせえ！！……………どかしてくれ、頼む――！！」

「……………」

レイは無言のまま何も答えなかった。

ラ・ヴァリエール公爵は全ての力を失ったかのようにその場に崩れ落ちた。

カトレアは一切抵抗せず、顔からは見る見る内に生氣の色が失われて行っている。

その儚い命は、今、ラ・ヴァリエール公爵の目の前で失われようとしている。

「……………ひくっ、ひくっ」

突如、泣き声が聞こえて来る。

見ると、ユイが大粒の涙をボロボロと零していた。

ユイはカトレアの首を絞めていた手の力を緩めていった。

カトレアの顔に赤みが差し込んでくる。

「ッ！エホッ！エホッ！」



カトレアは咳き込んだ。

そして、2度3度深呼吸をすると、ぼつりと言った。

「何故……殺してくれなかったのですか？」

そう言うと、カトレアの目から自然と涙が零れ落ちていた。

ユイは声も上げずに泣きじゃくる。

外では、相変わらず雨が降り続いていた。

まるで世界が泣いているかのように。

「死にたがってる奴を殺しても、それを復讐とは言わない。その女の自殺に、ユイが手を貸す必要は無い」

何時の間にかユイの側にレイが来ていた。

レイはユイの顔を見つめた。

ユイもまた見つめ返す。

レイはユイの頭をわしわしと撫でると、再び口を開いた。

「どうやら、あんたたちは殺す価値も無いそうだ」

レイがそう言うと、ユイはレイの腰へと抱きつき、そのまま顔を埋めた。

レイはユイの背中を優しく叩きながら、ラ・ヴァリエール公爵の方へと向き直った。

「……ラ・ヴァリエール公爵。あんたに頼みがある」

「……頼み？ハハ、頼みと来たか、この下郎が！」

床に手をついたままラ・ヴァリエール公爵は言った。

「ふざ、けるな!!こんな……こんな!!」

「あんたはこの子の為に何かをしてやる義務があるんじゃないか？」

「ぐっ……!!一体、何が望みだ？」

「ユイをこの女の侍女にでもしてやってくれ」

「何だと!？」

その申し出にラ・ヴァリエール公爵とカトレアは目を丸くする。

「ユイには家も何も無い。また路頭を彷徨っただけだ。こいつをこんな風にしたのはあんたたちだろ？」

「ぬ、ぬう……」

ラ・ヴァリエール公爵は押し黙ってしまった。

レイはカトレアの方へ向き直った。

「どうする?いつ自分を殺しに来るかも分からないような、そんな子をあんたのすぐ側に付ける気はあるか？」

「それが私の罪に対する罰ならば……」

カトレアは迷わずに即答した。

だが、レイは首を振った。

「罪?罰?……貴族という奴は相変わらず言葉を着飾るのが好きなことで。これはあんたたちが昔やったことに対する尻拭いだ。それ以上でもそれ以下でも無い」

レイはそう言うと、剣を鞘の中に仕舞う。

ふとユイの方を見ると、ようやくユイは泣き止んで袖で目を擦っている。

レイはユイの目をじっと見ながら訊ねる。

「…………お前はどうか？」

「……………」

「お前のことはお前が決める。俺はお前の決定を尊重する。自分の母親を奪った相手に世話になるのが嫌ならそれでもいい」

ユイはレイの目をじっと見つめていた。

そして、覚悟を決めたというように頷く。

「……………うん」

「それは肯定と受け取っていいか？」

「うん！」

「そうか…………」

レイはユイの頭を再び撫でた後にラ・ヴァリエール公爵へ向けて言った。

「当人同士は問題無いようだが、あんたの腹は決まったか？」

「ぐぬぬぬ…………」

ラ・ヴァリエール公爵は齒を食い縛りながら唸っていたが、やがて大きなため息を吐いた。

「致し方あるまい。カトレアがいいと言ったのだ。ならば私から言うことは何も無い。ただ…………」

ラ・ヴァリエール公爵はカトレアの方へ向き直った。

「やはり、そのユイとかいうのとお前を2人きりにはさせておけん。

すまんがカトレアにはそろそろヴァリエールの屋敷へ戻ってもらうことになるが……」

「……分かりましたお父様。この親不孝な娘カトレアはここ、ラ・フォンティーヌからヴァリエールの屋敷へと戻らせて頂きます」

そう言うと、カトレアは深々と頭を下げた。

レイはそれを見ると、こくりと頷いた。

そして、倒れている2人のメイジをチラツと見て、ラ・ヴァリエール公爵に言った。

「生憎と俺は殺人狂では無いんでね、こいつらと外にいた2人は殺していない。水メイジに診せればすぐに怪我也回復するだろうから、その代金くらいは持つてやるんだな」

ラ・ヴァリエール公爵はレイのその言葉に激昂した。

「言われなくとも!!」

「それは良かった。俺は無意味な殺生は好まないんでな」

感情を込めずにレイは言った。

ふと、外を見てみると雨足が弱くなっていた。

この分なら、すぐに雨も止むだろう。

そうすれば、濡れずにここを出ることが出来そうだと、レイは思った。

こうして、ラ・ヴァリエール公爵への復讐劇は幕を閉じたのであった。

ラ・フォンテーヌ領にて 3（後書き）

次回でラ・ヴァリエール公爵編の完結です。

ご都合主義全開の強引な展開ですみません（汗）

## 荷馬車の上で（前書き）

ラ・ヴァリエール公爵への復讐編、いよいよ完結です。

## 荷馬車の上で

「……旦那あ、旦那はどちらから来たんで？」

荷馬車を運転している野暮ったい男が何となく訊ねると、堆く積まれた藁から声が返って来る。

「……さあな。強いて言うならば風の吹く方から、かな？」

「へえ、旦那は見た目は凄腕の傭兵みたいなのに、随分とまあ詩人みたいなことを言っんですねえ」

そう言うと、男は欠伸をしながら荷馬車の運転へと戻った。

もそつと藁の上で何かが動く。

それは寝返りを打ったレイであった。

あの後、ユイと別れたレイは道を走る荷馬車に乗っけてもらっていたのであった。

レイは藁の上に寝転びながらラ・ヴァリエール公爵の元へ置いてきた幼い少女のことを思い出していた。

「レイ……」

その場から去ろうとするレイの背中へ向けてユイが言った。  
レイは振り返る。

「どうした？」

「……あのね、私、本当はレイと一緒に旅をしたかったの」

ユイは誰にも聞こえないように、レイにだけ伝えるように言った。

「レイと一緒に色々な国を廻って、色々な人と出逢って、色々なことを経験したかったの。でも……」

「でも？」

「でも、私はきつと途中でレイの足を引っ張っちゃう。私はレイの足手纏いにはなりたくない」

ユイは悲しそうな、でも少し悔しそうな、そんな何とも言えないような表情をしていた。

レイは肩をすくめる。

「そんな今生の別れみたいな顔をするな。お前ともまた逢えるさ。生きていればいつかは、な」

そう言うと、レイはユイの頭をわしゃわしゃと撫でた。

ユイは「うん！」と頷くと、精一杯の笑顔になって言った。

「さようならレイ！……私の好きな人！」

「旦那あ！もうすぐラ・フォンティーヌ領から出ますぜ！」

気が付くと、荷馬車は既にラ・フォンティーヌ領内から出ようとしていた。

レイは次の目的地を何処にしようかと思案していた。

「……次はゲルマニアにでも行って見るかな」



帝政ゲルマニア。

ここハルケギニアにおいて、一風変わった社会風習を持っている国で、例えば平民でも金さえあれば貴族の地位を手に入れられることが可能であるなど他国とは一線を画している。

レイはこの国が嫌いでは無かった。

この国には挑戦する自由がある。

生まれ、育ち、そんな下らない縛りから平民を解放してくれる。

「……いい風だ。さっきまで雨が降っていたとは思えないな」

レイは目を閉じて風を感じていた。

もう少し時間が経てば日が沈み、夜が訪れる。

それまでに何処か小さな村にでも着けばいい。

そう思いレイはそのまま寝入ってしまった。

まどろみの中、レイの頭の中にはユイが別れ際に見せた笑顔が浮かんでいた。

さて、その後のことを少しだけ語ろう。

ヴァリエール公爵家にて、カトレア付きの侍女となったユイは、その真面目な働きぶりからカリィヌ夫人に見込まれて色々と指導をさ

れているそうだ。

出会いの印象から最初は不穏な関係だったビーチエとも今は打ち解けて、2人でカトレアの世話をしている。

その世話っぷりは、カトレアを大事に思っている三女のルイズが自分よりもカトレアと一緒にいる時間の長いユイに軽い嫉妬心を覚えるくらいであった。

カトレア自身もあれだけのことをされたユイをぞんざいに扱うことはせず、ユイもまたカトレアを付きっ切りで面倒を見ていて、傍から見れば共に良好な関係を築いているように見えた。

こうして、ユイは晴れてヴァリエール公爵家の従者の一員として迎え入れられたのであった。

ただ1人、ラ・ヴァリエール公爵だけはあまりユイのことを好いてはいなかったが、カリィヌ夫人には色々と逆らえないらしく、それを表に出すことはなかった。

ユイは今もカトレアを、そしてラ・ヴァリエール公爵を憎んでいるのか。

殺してやりたいと思っているのか。  
それは当人にしか分らない。

1つだけ付け加えるならば、ここ最近のユイは笑顔を見せることが多くなったということであろう。

## 荷馬車の上で（後書き）

といった感じで序章終了といった感じです。

この先、色んな話を考えていますが、少しだけ注意事項を。  
それは時系列です。

今後、こういった感じで1エピソードずつ書いて行きますが、  
その時系列はバラバラにしていく予定です。

つまり、次に書く話がゲルマニア編とは限らないということです。

今、どのエピソードを書こうか思案中です。

どんな内容かは次回のお楽しみ。

ではまた ノシ

リュティスにて（前書き）

お待たせしました。  
新章です。

## リュティスにて

幸福はその訪れを誰も前もって知ることが出来ない。  
不幸もまた同じである。

そしてそれは人の出会いもまた同じ……。

「どうしてくれるんだ？ああ？」

ガリア王国の王都リュティスにある、とあるレストラン。  
貴族御用達のそこそこ高級な店である。

そこで豪華な装飾の服を着飾った、貴族と思わしき中年の男がレイ  
に向かってかなり立てていた。

恰幅が良い、というよりは肥満と言った方が正しいと思われる体型  
を揺らしている。

レイはただ無言で突っ立っていた。

「見てみるこれを！」

太った貴族の男が指差した部分には、ステーキ用のソースらしきも  
のが付着していた。

その部分をレイに見せつけると、嫌みたっぷりに言った。

「この服は貴様のような平民風情が一生掛かって働いても手に入ら  
ぬ特注品なのだぞ？さあ、どうしてくれる？」

レイはハアと軽くため息を吐くと、太った貴族の男に言った。

「百歩譲って俺が悪いとしよう。で、何が望みなんだ？」

「ああん？それが貴族様に対する口の聞き方か？」

太った貴族の男は近くにあった水の入ったコップを取ると、それをレイの頭上で傾けた。

零れた水がレイの頭から体へと滴っていく。

「いい格好だな？平民」

太った貴族の男は下品な笑い声を上げた。

一方、レイは特に動揺することもなく、冷めた目で目の前の男を見つめていた。

その態度に太った貴族の男は激昂する。

「貴様あ！何だその目は！」

そう言つて懷から杖を取り出した。

杖の先をレイに向けている。

「……生意気な平民め。今すぐに土下座して謝つて見せる。そして、奴隷としてその一生を私に捧げて見せる！そうすれば貴様の今までの行い、許してやらんことも無いぞ？ん？」

「…………断る」

「何イ？聞こえんなあ？」

「断る、と言つた」

「何だとオ！？」

「人に仕える気なんぞ無いし、仮に仕えるとしても相手くらい選ぶお前のような下衆な奴なぞこちらからお断りだ」

「貴様ア、平民如きがよくもまあそんな口を利けたものだ。……最早、弁解の余地も無いな。……なら、死ねえ!!」

太った貴族の男はそう言うなり詠唱を開始する。  
レイも素早く剣の柄に手を掛けた。

その時、パチパチと手の平を打つ音が聞こえた。  
2人は音の方へ振り向く。  
そこには、同じように貴族の格好をした垂れ目の男がニヤニヤと笑いながら拍手をしていた。

「何だ!? 何者だ貴様!？」

太った貴族の男は怒号混じりに声を上げた。  
すると拍手していた男が「ククク……」と低く笑う。

「平民如きにムキになるとは、伯爵殿も随分と焼きがお回りのよう  
で……」

「……! 貴様は……」

「我々貴族は、常に寛容な精神で愚かな平民を生温かく見守っていればいいのです。平民の言葉や態度をいちいち気にするのは、貴族としては些か度量が狭いのではないですか?」

「くっ!」

太った貴族の男は、杖を仕舞うとレイをひと睨みしてから店を出て行ってしまった。

レイはそれを見届けると、柄から手を離した。

そして、店員らしき男にいくらかの金を渡すと、すぐに店を出て行った。

すると、先程こちらに話しかけてきた男が後をついてきた。  
男は店を出るなり口を開いた。

「ククク……あのケツの穴の小さい能無しめ。奴は自分が命拾いしたことに気付いておらぬのだろうなあ」

「……………」

レイは男の言葉を見殺してどんどん歩く。

だが、男も話を中断することなく、レイの後を歩きながら喋っていた。

「全く、これだから名前だけの連中は……能無しのくせに態度だけは一人前を気取りやがる」

「……………」

「お前……あの能無しを殺そうとしていただろ？そして、奴は確実に殺られていた。奴が魔法を唱え終える前にお前の剣は確実に振られ、その首を地面に落としていたであろうからな。ククク……俺が割って入らなければな」

「……こんな白昼の街中でそんなことするわけが無いだろ。杖ぐらいは叩き斬ってやろうと思ったがな」

思わずレイは言葉を返してしまった。

男は大げさに驚いて見せた。

「いやいや、凄まじいな。お前、ただの傭兵では無いだろ？もしかして噂でしか聞いたことのないあの“メイジ殺し”って奴か？」

男はまるで立て板に水の如く喋りを止めない。

悪意はあっても、敵意は無いように思える。

レイは男に向かって一言だけ言った。



「よく喋るな」

男は再び「ククク……」と笑った。

「喋るのが好きなんだよ。お前の気に障ったとしても止めんよ?」  
「好きにすればいい。……ところでいつまでついて来るんだ?」

レイが訊ねると、男は首を振った。

「お喋りつてのは聞く相手がいて成り立つものでねえ。聞き手のいないお喋りはただの独り言だ。俺はお喋りがしたいんだがねえ?」  
「俺はしたくないわけだが」

「なら聞くだけでもいい。……貴族がここまで譲歩してやっているのだから平民としては断る理由は無いやなあ?」

「……あんたが何か言って来ても俺は何も返さんぞ?」  
「いいねえ!その平民とは思えぬ不遜な態度と物言い……。お前は俺が見込んだ通りの人間だ」

レイはやれやれと肩をすくめた。

「勝手に見込まれてもな」

「ククク……何も返さないのでは無かったのか?」

「皮肉の1つでも言わないと精神衛生上に良くないと気が付いたんでな」

「やはり面白いな、お前は。……お前の名は何だ?」

「貴族様に覚えていただくような名前などございませんが?」

レイはわざと丁寧に答えた。

男はニヤニヤと笑っている。

「構わぬ、答えよ平民。俺がそんな小さいことを気にするようない…さっきの能無しと同じ人間だと思うか？」

「ああ、確かにあんたとさっきの男は違うな。あんたの方が面倒臭い」

「なら分かるだろ？これ以上面倒臭くなりたいか？」

「……レイ」

レイは心底面倒臭そうに言った。

男は満足そうに含み笑う。

「そうか、レイか。ククク……」

「もういいか？」

「まあ、急くな。俺の名前も聞いていけ。貴族の口から直接名前を聞かせて貰うのだぞ？光栄だとは思わんか？」

「生憎と俺には貴族を敬うような殊勝な心掛けは無くてな」

「いかなあ。それではこの貴族社会であるハルケギニアで生きては行けんぞ？」

「何とか生きていけてますので。わざわざ貴族様に心配して頂くようなことはございませんが」

レイは慇懃無礼に答える。

しかし、男は全く気にする素振りを見せなかった。

「ククク……。俺の名はパーカーだ。本名はもつと長いが、それで呼ばれることはあまり好かん。パーカーでいいぞ」

「そうか」

「これはまた薄いリアクションだ。いいねえ！お前は俺の期待を裏切らない！実に素晴らしい」

「……勝手に期待するな」

「お前とはこんな道端なんかでは無く、じっくりと話し合いたい……。どうだ？ウチへ来ないか？」

「……おっと、断ろうとしているな？表情で分かるぞ。大方、その為の皮肉でも考えていたのだろう？残念だが、無理にでも来て貰うよ」

「……」  
「ん？俺を殺してでも誘いを断るつもりだったか？だが見る、俺はお前に杖を向けてはいない。丸腰だ。お前は攻撃の意思もない者を自分の都合だけで消すような、そんな男なのか？血に飢えた殺人狂なのか？」

「……俺は殺人狂では無いし、そもそもあんたを殺すつもりも無い。半殺しくらいならしてやってもいいかと一瞬頭の中をよぎったがな」

「そうかそうか。それは是非ともしてもらいたいものだ。その御礼はたつぷりとさせてもらうが」

「……」  
「なら、来るだろう？お前が俺の見込んだ通りの男なら来るよなあ？」

レイは観念した。

「……分かった。行く。行かせて貰う。だからこれ以上ベタベタするのは止める」

「そうかそうか。いや、やはりお前は俺の見込んだ通りの男だ！ちやんと物事の是非が判断出来る……。実に素晴らしい！」

「お前、友達いないだろ？」

「いるさ。たった今出来た。そう、目の前にな」

「……」

レイは男に聞こえないように舌打ちをした。

## リュティスにて（後書き）

新章はガリア王国編です。

時系列的には、前章の前です。

そして、新キャラのパーカー！。

貴族で変わり者、年齢的には30代後半といった感じのキャラです。  
凄く好き嫌いが分かれそうなキャラです。

この章にも原作キャラを出す予定ですので楽しみに。

## パーカーの別荘にて（前書き）

ガリアの情勢について、微妙に知識が足りません。  
原作読み直そうかなあ？

## パーカーの別荘にて

レイが連れて来られたのは、王都リュティスから少し離れたところにある屋敷であつた。

「ここは別荘でなあ。最近はこちらに居ることの方が多い」

パーカーはそう言つてレイを案内する。

屋敷の中に入ると、メイド服の少女が2人を出迎えた。

「お帰りなさいませ、パーカー伯爵」  
「ああ」

パーカーはそう言うなり、いきなり少女の胸を掴んだ。  
少女は突然の行為に「キャッ」と悲鳴を上げる。  
それを見てパーカーは舌打ちした。

「つまらん。そんな当たり前なりアクションされても俺は満足せんぞ」

「も、申し訳ございません！」

胸を掴まれ、更に叱責まで受けたが、少女は逆らうことなく頭を下げる。

パーカーはその様子を心底つまらなさそうに見ながら屋敷の中へ入つて行つた。

レイもその後続く。

パーカーは屋敷の中を進みながら振り返らずに言つた。

「好きでもない男に胸を掴まれたのだ。もっと抵抗しても良いと思

わんか？殴りかかってきても良い。ゴミ虫を見るような目で蔑むのも良い。でもあの平民のメイドは諦めおった。自分は意地汚い平民だから貴族に胸くらい触られても当たり前なんだとな。実につまらん！実に愚かな平民らしい負け犬根性だと思わんか？」

「……………」

「その点、お前は違う。お前は平民でありながら平民らしからぬ物言いと態度。それはその強さと自信がそうさせているのか？」

「……かもな」

「そう、それだ！その隠そうともしない、俺を心底面倒臭いという不遜な態度！いい！実にいいなあ！面白いぞ、お前は！」

「そう思うなら少しは黙っていて欲しいんだが」

「ところでお前、あの店で何があつたんだ？」

パーカーは突然話を変えてきた。

「あんな能無しでも一応伯爵なんていう、とても分不相応な位が与えられてる。何でそんな奴と言い合いなんかしたんだ？んん？」

「……別にあんたが考える程面白い話じゃない。たまたま臨時収入が入ったので、たまには奮発しようといイ匂いの店に入ったら、席に着く前にあの貴族殿と肩をぶつけてしまっただけだ。正確には向こうからぶつかって来たんだがな」

「ほほう……。それであんな命知らずな真似をしたのか……。ククク……普通の平民なら自殺ものだぞ？」

「生憎と自分で命を捨てる趣味は無いものでな」

「ククク……それはいい心掛けだ。と、言っている間に着いたな。ほら、ここが俺の私室だ」

パーカーは屋敷の中の一審奥の部屋の前で立ち止まると、扉を開けてレイを招いた。



「遠慮無く入れ！それとも、お前なら俺が言わずとも遠慮などしないか？」

「そもそも俺はあんたの家に行くつもりも無かったし、当然あんたの部屋にも入ることは無かったわけだが」

「いいなあ。お前は常に俺の1歩先に行く！それでこそ、だ」

パーカーが「ククク……」と笑いながら部屋の中に入ろうとすると、何かがパーカーの肩に飛び乗ってきた。

よく見ると、それは1匹のカメレオンであった。

「おお、よしよし」

パーカーはカメレオンの首元を指で撫でる。

すると、気持ち良さそうにカメレオンが身を震わせた。

パーカーは振り向くと、レイにそのカメレオンを見せる。

「ククク……こいつはアイヴアンと言ってなあ。俺の使い魔だ。こう見えても俺は風のトライアングルメイジだね」

「そうか。聞きもしないのにわざわざ答えてくれて有難う」

レイはわざとらしく頭を下げた。

パーカーはアイヴアンを肩に乗せたまま部屋の中に入って行く。

レイも渋々部屋の中へと入って行った。

部屋の中は貴族らしい豪華な造りであった。

それなりに高級そうな置物や絵などが飾られている。

その中に小さい積み木のようなものが幾重にも重ねられている置物があった。

それを横目で見ながらパーカーが口を開いた。

「お前は最近貴族で流行っているゲームを知っているか？」

「……逆に聞くと、平民の俺が貴族様の娯楽なんぞ知っていると思うか？」

「ククク……確かになあ」

そう言つてニヤつきながらパーカーはその置物を指差した。

「あれがそのゲームだよ。積み木を1本ずつ抜いていき、上に乗せる。実にシンプルなゲームだ。いかに崩さないように高く積み上げて行くかを競うのさ。これが実に面白くてなあ。その気になれば1日くらい簡単に潰せるぞ」

「そんなので時間を潰さなきゃならんとは、貴族も相当忙しいんだな」

「ククク……その通り、忙しくて忙しくてたまらんのだよ」

パーカーはレイの皮肉を軽く受け流した。

そして、重ねられた積み木から1本抜き取ると、それを積み木の上に乗せてみせた。

「……このゲームはな、こうして高く積み上げて行くのも楽しいが、更に楽しいのは何だか分かるか？」

「さあな。貴族の高尚なお遊びとやらは平民である俺には理解出来ないみたいだ」

「ククク……なら教えてやろう。高く積み上がったタワー。それを崩すのが実に楽しいのだよ。特に他人が積み上げてきたものなら尚更、な」

そう言つて、パーカーは重ねられた積み木を崩すと笑いながらグラスを2つ手に取った、

そして、近くに飾られていた高級そうな酒を持ち出して、部屋の中

にあるソファに腰掛ける。

「ほら、座れ。……お前は酒を飲むか？」

「まあ、嫌いではないな」

「そうかそうか」

レイがソファに腰掛けるのを確認すると、パーカーは高級そうな酒の蓋を開けた。

そして、それを躊躇なくグラス一杯に注ぐ。

琥珀色の液体がグラスの縁ギリギリに揺れた。

「素敵な出会いに乾杯」

「……………乾杯」

面倒臭そうにレイがそう言うのを聞くと、ニヤリと笑いながらパーカーは酒を一気に呷った。

レイもグラスに口を付ける。

芳醇な香りとコクが口の中に広がり、鼻に抜けていく。  
かなりアルコール度数が強いみたいだ。

「プハア！……やっぱり酒とはチビチビやるものでは無いな！どうだ？美味しいか？特注品でな、平民はおるか貴族ですら口にすることなんぞ不可能に近い酒だぞ？」

「……確かに美味しい。が、悪酔いしそうな酒だ。……俺には酒場の安酒の方が合っている」

「そうかそうか！」

パーカーはあれだけ一気に呷ったのに、顔色1つ変えずに言った。  
どうやらかなり酒に強いらしい。

レイは再びグラスに口を付ける。

レイも弱くは無いつもりだが、流石にこの酒を一気に呷る気にはなれない。

暫しの沈黙。

アイヴアンがパーカーの頭の上へ移動する。

このお喋りにも酒の余韻を楽しむくらい風の風情はあったのかとレイが思っていると、パーカーは再び口を開いた。

「……なあ、この世は実につまらんと思わんか？」

「……いきなり何だ？」

「何10年も無駄に生きてると、人生にはパターンがあることに気付く……。大概はそのパターンから外れることはない。この俺とてな」

「……………」

「それに気付いた後は最悪だ。お決まりの毎日の始まりだよ。寝て起きて、食って、また寝る。日々はずっとこれの繰り返しだ」

「……まあ、大抵の奴はそうだろうな」

「それは人との出会いも同じだ。人は誰1人同じ者などいない。それぞれ違う者である。なんて、どこぞの教団の連中が声高にほざいてたが、そんなのは嘘だ。会う人間、会う人間が皆同じような奴ばかりだった。平民も貴族も」

「……………」

「ただ1人、こいつだけは違うと思ったのは現国王、ジョゼフ1世だけだな。あの男はこの俺が認める数少ない人間の1人だ。ククク……、何故俺が王のことを知っているか不思議でたまらないって顔してるぞ？」

「別にしていない」

「ちよつとしたコネがあつてね……。ごくたまに謁見することがあるんだよ。滅多にあることじゃないがね」

「そうか。それは良かったな」

「世間ではあの男を無能王と呼んでいるそうだな？ガリアの国民で

さえ、そう思っている奴は少ない。ククク……つくづく救えんよ。物事の本質を捉えられる者の何と少ないことか！……とまあ、自国の王を持ち上げるのはここまでにしようか」

パーカーはグラスに再び酒を注ぐと、また一気に呷った。

「ジョゼフ1世はまさに積み木を高く高く積み上げているのさ。俺はなあ、それを崩してみたいんだよ。無能王よりも先に、な。その為にはお前がいるんだよ」

「話が見えんが？」

「ククク……すぐに分かる」

その時、扉をノックする音が聞こえて来た。

パーカーが「よい」とだけ告げると、扉が開いた。

そこには先程パーカーに胸を掴まれたメイドが立っていた。

「パーカー伯爵。そろそろお時間です」

メイドは無感情にそう言った。

心なしか、仕草が胸の部分を庇っているように見える。

パーカーは残念そうにレイの顔を見る。

「そうか……もうそんな時間か。いや、楽しい時間とはあつという間だなあ」

「……なら、俺はもう帰るぞ」

「ところがそうはいかんのだよ」

「……次は何だ？」

「おお？抵抗しないで諦めるのか？お前らしくも無い」

「どうせ抵抗したところでまた面倒臭くなるだけだ……それとも抵抗してやるつか？」

レイは剣の柄に手をやるフリをした。  
それを見て、パーカーはわざとらしく脅えてみせる。

「おお、風のトライアングルメイジである私だが、お前に敵う気が  
せぬぞ！中々酷なことを言ってくれるなあ、お前は」

「……ようやく酒でも回り始めたか」

「ハハハハ、私は酔わないタチでなあ。今まで酒に負けたことは一  
度たりとも無いのだよ」

「………用件を早く言え」

「ククク……喜べ、王に謁見出来るぞ」

レイは思わず自分の耳を疑った。

「………ハア？」

レイのその顔を見て、パーカーは満足そうに笑った。

「実はこれからガリア国王、ジョゼフ1世と謁見するんだよ。大し  
た用事では無いので面倒臭いと思っていたんだ……お前と出会っ  
てはな」

キラキラした瞳でパーカーはレイを見つめた。

レイはそんなパーカーに思わず引いてしまった。

「………何だ？俺に何を期待している？まさか俺に国王を殺せとでも  
言うのか？」

「おお！殺してくれるのか！？」

「………ふざけるな」

「ククク……何もそんな何かして欲しいわけじゃない。ただ、お前

とジョゼフ1世。この2人を会わせたらどうなるか。俺はそれが見たいんだよ」

パーカーはそう言うと、アイヴアンを頭の上から腕に乗せる。

「ククク……実に素晴らしいことか。俺はお前と出会えた今日というこの日を最高の幸福だと思うぞ」

「俺はあんたと出会ってしまった今日という日を最悪の不幸だと思うがね」

そう言った2人の顔はとても対照的であった。

## パーカーの別荘にて（後書き）

急展開に次ぐ急展開。

ということ、次回はジョゼフ王との謁見です。

ちなみに作中に出て来た積み木のゲームは要するにジェンガのことです。



## ガリア城にて 1（前書き）

今回、原作キャラが出ます。

## ガリア城にて 1

ガリア城前。

衛兵たちと何やら話しているパーカーをレイは非常に面倒臭いと思  
いながら見ていた。

（俺は何か悪い夢でも見ているんじゃないか？）

レイは思わず1人こちる。

しかし、現実として目の前にはハルケギニア最大の国家の象徴であ  
り中心でもあるガリア城とそこへ自分を連れて来た、いけ好かない  
貴族の男がいる。

レイはここへ来るまでの道中、何度吐いたか分からないため息を改  
めて吐いた。

パーカーの誘い自体は、無理にでも断ることも出来た。

それだけの力も意志もレイにはあり、それを抑えるだけの物理的な  
力をパーカーは持ち得ていなかったのだから。

だが、実際に断れば、あの粘着質な男が何をして来るか分からない。

少なくとも今以上に面倒臭くなることは間違い無い。

同じ面倒なことならば、1度従ってからスッキリ別れた方がいい。

そう思っただけで割り切ったのはいいが、流石にこれは事が大き過ぎる。

王への謁見。

それも相手はハルケギニア最大の国家、ガリア王国の王ジョゼフ1  
世である。

色々と脛に傷を持つレイとしては、王家の人間なんてのは一番関わ  
り合いたくない人間である。

最悪、その場で処刑されかねない。

それだけのことを過去にしてきたという自覚はレイにもある。

「……まったく、いつも思うが、ここの衛兵は要領が悪い。掛からないでいい時間を掛けてる時点で俺が王ならクビにしてやってるがな」

衛兵に文句を言いながらパーカーが戻って来た。

レイは相変わらず無言である。

ジョゼフ1世とレイが出会う瞬間を見たい。

そうパーカーに言われてから、レイは彼と一言も口を利いてはいなかった。

ちなみに、レイの素性としてはパーカーが雇った護衛の為の私兵ということになっている。

パーカーはニヤニヤと笑いながら言った。

「どうした？王への謁見がそんなに嬉しいか？何、緊張することはない。楽にしる」

「……………」

これが王に謁見出来て嬉しくて緊張しているように見えるか。

と、レイは目で訴えた。

パーカーはウンウンと頷く。

「そうかそうか。何、ジョゼフ1世……おっと、こんな王の御前では誰に聞かれている分からんな。……ジョゼフ王は気さくな男であらせられる故、そんなに構えんで大丈夫だ。お前が平民だろうが、ジョゼフ王は御自分が認められた者には誠意で話される。お前なら

問題なかるう」

「……………」

これ以上、この男に言葉や感情での解決を求めても無駄だと悟ったレイは何も言わずに目を閉じた。

暴力的な解決をしたところで、状況はより悪化するだけである。

殺せば殺したで後始末が面倒だし、そうしなければこの、貴族に対しての誇りも矜持も持たない変人は平気で自分の恥を世間に公表するだろう。

そうなればレイは全世界のお尋ね者である。

最悪それでも別にいいやと思っではいるが、自由を何よりも愛するレイはなるべくならばそうならないようにしたかった。

王への謁見は確かにしたくはないことではあるが、自身の自由を秤に掛けるようなことをしてまで避けるべきことではない。

「……………フウ」

仕方がないとレイは一応、腹を括った。

そうしてから改めてパーカーという男を見据えると、つくづくこの男の強かさに舌を巻く。

恐らく、ここまで計算してからあの時自分へと接触してきたのであるう。

わざとらしく拍手して、人の目を引いてから声を掛けてきた辺り、抜け目ない。

秘密裏に自分が消されないような仕掛けを随所に盛り込んで来ている。

飯にそれらが無かったとしても、レイはそんな野蛮な手を易々と選びはしなかっただろうが、それでも打てるべき手は全て打っておく。

目の前の男は一見飄々とした変人貴族であるが、その実見えない牙

を何本も隠し持つ狡猾な獣であった。

「ほれ、ついて来い。この城には何度か入ってるからな。僭越ながら、友人の家に行くみたいだ」

パーカーはそう言つて城の中へと歩き始めた。

レイは無言でその後について行く。

（友人の家……か。フン、どの口が言うのか）

レイは心の中で毒づいた。

（この男は友人がいないんじゃない。友人を作らないんだ）

自分以外は誰も信用しない。

それがパーカーという男の生き方なのだとレイは感じた。

広々とした城内をパーカーについて行きながら、レイは改めて王宮というものを感じていた。

城内は豪奢でありながら、貴族とはまた違った気品と風格を見るものに感じさせる造りであった。

それでいて、辺りに張り詰める緊張感は、やはりその他の貴族たちの屋敷とは一線を画している。

（……まあ、俺もそんなに貴族というものを知っているわけじゃないがな）

レイは誰にも気付かれないようにフツと笑った。

しかし、そんな城内を歩いていても、いわゆるロイヤリティやセレ

ブリティといったものは感じなかった。

どちらかと言えば、レイが慣れ親しむ戦場に近い空気を感じていた。

それは全ての城がそうなのだろうか。

それとも、このガリア城が特別なのか。

「……………」

やがて、謁見の間の前まで来ると、レイとパーカーは門の前にいる男たちからボディチェックを受けた。

レイは剣やナイフ、パーカーは杖をそれぞれ取り上げられる。

そして、何か他に武器になるようなものが無いことを確認すると、男たちは頷き合った。

「入れ！」

まるで家畜に言うかのように男たちが2人へ言うと、扉が重々しく開かれた。

開かれた扉の向こう、遙か遠くにその男は鎮座していた。

レイは唾をこくりと飲み込むと、思わず口を開いてしまった。

「あれがガリア国王……………」

「そう、ガリア国王ジョゼフ1世にあらせられる」

パーカーはさっきまでニヤニヤしていたのが嘘のように精悍な顔つきになると、瞬時に膝をつき、頭を下げてから厳かにそう言った。

その口振りから普段の軽口はなりを潜めている。

レイもその一連の所作を真似た。

ふと横目で隣のパーカーを見ると、固く目を閉じて胸に手まで当てている。

流石に国王の御前ともなれば、この男でも畏まるらしい。

（猫を被った、というよりは体の色を変えたって感じだな）

レイは心の中で、今のパーカーを彼の使い魔アルヴァンになぞらえて評した。

「良い」

一言。

ジョゼフ1世はそれだけ言った。

それ程大きな声では無かったが、その声は威厳に満ち満ちていて、耳にスツと入って来る。

これが王というものかと、レイは感心した。

パーカーは「ハッ！」と受け答えると、すくつと立ち上がった。

レイも立ち上がる。

「来い」

再びジョゼフ1世はただ一言、そう発した。

短い、故に断ることを許さない威圧感がある。

これに逆らえるのは、よっぽどの大物かただの大馬鹿者だけである。

パーカーは無言で王の元へ歩き出す。

レイもそれに続いた。

やがて王の顔が確認出来る距離までやって来ると、レイは初めてジョゼフ1世の顔を目の当たりにした。

ガリア王家独特の目の覚めるような青い髪と髭。

何処か虚ろ気ながらも力強さを感じさせる瞳。

若ささえ感じさせる整った顔立ち。

よく鍛えられた逞しい肉体。

そして全身から漂う威圧感。

王の器という言葉がここまで相応しい人間も他にないだろうとレイは感じた。

レイは相手がどういう人物かを一目見ただけである程度判断出来る。目の前の男は良し悪しは別としても、間違いなく大物である。

レイでも思わず畏縮してしまいそうなオーラを今でもひしひしと感じている。

こうして実物を見ると、彼が世間からは無能王と揶揄されているのが全く信じられない。

確かジョゼフ1世がそう呼ばれる最大の要因は、彼が系統魔法を使うことが出来ないことに起因するとパーカーから聞いた。

魔法が使えるか否か。

それだけで、これだけの男を無能扱いとは。

レイはこの世界の構造を改めて下らないと思った。

視線を僅かにずらすと、王の近くに長い髪の男が立っているのが視界に入った。

物憂げな顔をしながらこちらを見つめている。

旅の詩人のような風貌からすると、王宮の関係者とは思えない。

ましてや、あんな国王のすぐ側に置くような人物には到底見えなかった。

そして、何よりも一番目を引くのはその特徴的な長い耳であった。

(……エルフ、か)



エルフとは東方の砂漠に住む、人よりも長い耳を特徴とする種族である。

その姿は男女共にとても美しく、またスタイルも良い為、ハルケギニアの容姿を持つ種族とされている。

また彼らは見た目が良いだけでなく、先住魔法の1番の使い手でもある。

先住魔法とは、精霊の力を借りることで杖を使用せずに唱えることを可能とする魔法のことであり、杖無しでは系統魔法を使用することが出来ないハルケギニアのメイジにとってはまさに天敵であった。かつて、エルフと人間は聖地を巡り幾度も抗争を行っており、人間側はそんなエルフたちに大きく負け越している。

時には、10倍近くもの人数の差がものの見事にひっくり返された、などということさえあったという。

そうしたこともあり、ハルケギニアの人間にとってエルフは恐怖の象徴として認知されている。

そんなエルフを身近に置いている時点で、やはりこのジョゼフ1世という男は只者ではない。

レイは何となく気を引き締めていた。

2人が王の側までやって来ると、「止まれ」とジョゼフ1世が言った。

2人とジョゼフ1世との間の距離は長身の剣を振っても届かないくらい距離であった。

ジョゼフ1世はまるで彫刻のように表情を読み取ることの出来ない顔で2人を見ていた。

「……そんなに固くならなくて良いぞ、伯爵。それに護衛の者も、だ」

「……ハッ！」

「……………」

パーカーは了解の意味を込めた言葉を発し、レイは無言のまま頭を下げた。

貴族で伯爵という爵位を持つパーカーはともかく、ずぶの平民であるレイが国王の目前で勝手に言葉を発するのは失礼にあたる。そのくらいの礼儀はレイも弁えていた。

ジョゼフ1世は口元を僅かに歪ませてレイを見た。

「……良いぞ、言葉を発しても。貴様の声を聞いてみたい」  
「……………こんな平民の声で良ければ」

レイの言葉を聞くと、ジョゼフ1世は更に口元を歪ませた。

「良いなあ、良いぞ伯爵。先程、急に連れて行きたいと言った男。是非とも俺に会わせたいと言っていたのがその男なのであるう？」  
「なかなか面白そうだ」

「それは良うございました。私めといたしましても、王に喜んで頂けるならば感謝の極み」

まるで別人のような口調で話すパーカーを見て、レイは少し苛立ちを覚えた。

ジョゼフ1世は再びレイに話し掛けた。

「貴様、名は何だ？」

「……………こんな平民の名を聞いても仕方ないでしょう？」

「王の前でその態度……………。確かに面白いな」

ジョゼフ1世は声を上げずに笑った。

「他の誰でも無く俺が聞きたいのだ。……お前の名は？」

「……………レイ」

「レイ、か。レイ。レイ……フム、なるほどなるほど」

ジョゼフ1世はレイの名を咀嚼するかのように何度も呼ぶ。  
そして、納得したように頷く。

「……それでレイよ、1つ聞きたいことがあるので答えよ」

「……………自分に答えられることでしたら」

「いいな、その平民とは思えぬ物言い。なるほど、伯爵が俺に会わせなくなるわけだ。……では聞くが、レイよ。お前はこのビダーシヤルを見てどう思った？」

側に立つエルフの男を横目で見ながらジョゼフ1世は訊ねた。

レイもエルフの男をチラツと見る。

「どう……と言われましても？」

「平民なら……いや、平民に限らずハルケギニアに暮らす者であればエルフを見て恐怖を抱く。だが、お前は違った、この男……ビダーシヤルを見ても何も感じていないようであった。それは何故だ？」  
「買ひ被りという奴ですよ。自分はそんな大した人間じゃありません」

「はぐらかすな。俺は聞いている。『何故だ？』と」

ジョゼフ1世の目が鋭くなる。

その目は他の解答を決して許さないと訴えかけていた。  
レイは仕方ないと首を軽く振った。

「……エルフに知り合いがいてね、それで今更エルフに脅えることがない。それだけですよ」

レイのその言葉にジョゼフ1世は「おおっ！」と反応する。

「エルフに知り合い？平民の癖にエルフと知り合いだと！？これは久々に驚いた！！」

心なしか声のボリュームも上がっている。

エルフの男      ビダーシャルもレイの言葉に少し驚いた様子であった。

エルフの多くは人間を蛮族と蔑視している。

ビダーシャルもその1人であったので、そんな人間に同胞の知り合いがいるということが信じられなかった。

ジョゼフ1世は改めてレイを真正面から見据えた。

「……面白い。お前は実に面白いな！」

声に幾分か明るさみたいなのが混じっていた。

どうやら本当に面白いと思っているようだ。

レイは何も言わずにただ頷いた。

レイとしては早くこの面倒な謁見を終わらして、パーカーともおさらばしたかったのだ。

どんな用件でこの王とパーカーが会っているのか知らないが、それもそんなに長く時間を取るようなことではないだろう。

王とは、王宮とはそんなに暇では無い筈だ。

一貴族に長々と時間を取ることは無い。

ましてや、それが平民なら尚更だ。

ジョゼフ1世が何やら、ビダーシャルとは別の側近の男に耳打ちした。

男は急いで謁見の間から出て行くと、すぐにレイの剣を持ってやっ

て来た。

それをレイに渡す。

「……………？これは何です？」

王が目の前にいる男に剣を渡す。

もしもレイが暗殺者なら、王を殺す絶好の機会である。

何でそんな自殺紛いのことをするのか、レイは理解に苦しんだ。

「俺は噂だが聞いたことがある。このハルケギニアには、どんなメイジでも敵わないという最強のメイジ殺しがいる。」と

「……………」

「貴様を一目見て、俺は分かった。レイ、貴様がその最強のメイジ殺しなのだろ？」

「……………」

肯定も否定もせずにレイは無言のままジョゼフ1世の顔を見ていた。ジョゼフ1世は「ウム」と何かを確信したように頷く。

「ならばその強さ、どれ程のものか俺に見せてくれ。相手はこのビダーシャルだ！」

「王！？」

突然の指名にビダーシャルが思わずジョゼフ1世の方を振り向いた。ジョゼフ1世は薄く笑いながらビダーシャルを見た。

ビダーシャルは何かを言おうとして、しかし何を言えばいいのか分からず、言葉に詰まっている。

そしてその様子をまるで他人事のようにレイは見ていた。

その肩をパーカーがポンと叩いた。

「ククク……どうする？ エルフと果し合いだぞ？ もしかしたら殺し合いになるのかな？ ククク……」

「……………もう、どうにでもなれ。という奴だな」

レイはそう言つと、今日1番の深いため息を吐いた。

## ガリア城にて 1（後書き）

というわけでジョゼフとビダーシャルの登場です。

パーカーのキャラがジョゼフとちよつと被ってたので、キャラを分けるのに苦労しました。（汗）

ガリア編はそろそろ終わりかな？

## ガリア城にて 2（前書き）

この話で今回のガリア国編は終了です。



## ガリア城にて 2

レイはガリア国王ジョゼフ1世の突然の提案により、ビダーシャルというエルフと一騎打ちをする羽目になってしまっていた。

（断ることは……出来ないのだろうか）

ビダーシャルの必死の抗議を右から左へと受け流しているジョゼフ1世を見ながらレイは思った。

ジョゼフ1世という男は、やると決めたことは何があってもやる男だ。

出会ってまだそんなに時間も経っておらず、二三言葉を交わしただけだが、それでも充分王の人となりは分かった。

恐らくあのビダーシャルというエルフの抗議を聞き入れることは無いだろう。

レイはジョゼフ1世の顔を見てそれを確信した。

王は実に楽しそうな顔をしていた。

レイはビダーシャルに向かって声を掛けた。

「おい、あんた……。ビダーシャル、と言ったか？」

「……私に話し掛けるな壠族めが」

ビダーシャルはレイの方へチラリと顔を向けると、見下すような目で見た。

「貴様のような下等な輩と相まみえところで、死体が1つ転がり、この場が穢らわしい血にまみれてしまっただけだ。私は無駄な殺生は好まない。だから王に考え直して貰うように進言しているのだ。断じて貴様の為では無いぞ」

「……そうか」

こちらはこちらで随分と高尚な考えを持っているらしい。  
無駄な殺生は好まない、といった点くらいは共通した考えのようだが、その根源はまったく異なっている。

レイは少なくとも相手の血に汚れることを穢らわしいと思ったことは1度もない。

相手が流した血、自らが奪ってしまったであろうそれは相手の生きていた証であり誇りなのだから。

ジョゼフ1世はビダーシャルの言葉を受け流しながら、何か思い付いたような顔をする。

「そうだ、レイよ。何か褒美でもあれば貴様もやる気になるのではないか？……そうだな、貴様がこのビダーシャルに勝利した暁には、貴様の望みを何でも叶えてやろう！」

「王！」

ビダーシャルの声を無視し、ジョゼフ1世は続ける。

「ビダーシャルは強いぞ？何せエルフだからな。最強のメイジ殺しは果たしてエルフを倒せるのか……実に興味深い。なあ、伯爵？」

「ええ。僭越ながら私めも、勝敗が気になって気になって夜も眠れなくなりそうです」

「……………」

レイは目の前の現状に思わず頭を抱えそうになる。

そして、自分がまるで玩具のように扱われていることに不愉快さえ感じていた。

「……望み」

「んん!？」

レイが口を開くと、ビダーシャルは再びチラリとだけこつちを見、ジョゼフ1世は少しだけ身を乗り出した。

レイは改めて、ジョゼフ1世とだけ目を合わせ、僅かに歩を進める。

「何でも叶える……と仰られましたね？」

「おおっ！乗ってきたか！そう来なくてはな！」

ジョゼフ1世は年甲斐も無く、少年のように目を輝かしている。

レイは歩みを止めると、軽く息を吐いた。

「……では、叶えて貰います」

次の瞬間、ジョゼフ1世の目の前で旋風が巻き起こった。

レイはいつの間にか鞘に入ったままの剣を地面へと振り下ろしている。

レイは軽く剣先で地面を叩いた。

すると、それと同時にレイに背を向けていたビダーシャルがバタリと倒れた。

突然の出来事にジョゼフ1世とパーカーは状況を理解出来なかった。

数秒経って、ようやくジョゼフ1世が口を開いた。

「レイ。貴様、一体ビダーシャルに何をしたというのだ？」

レイは鞘に入っただままの剣を背負い直すと、何食わぬ顔で言った。

「戦えと仰られたので戦いました」

「俺はそういうことを聞いているのではない。ビダーシャルに何をしたかを聞いている！」

ジョゼフ1世が問い質すと、レイは倒れたビダーシャルを1度見下ろし、それからまたジョゼフ1世の目を見た。

「簡単なことです。自分はあなたと話しながら僅かずつ距離を詰め、そのビダーシャルというエルフに近付いて行き、彼が気付かぬ内に射程圏内に入るのを確認したら素早く彼の後頭部へとこの剣を叩き付けた次第でございます。言わば、不意打ちです」

「何と……！」

「陛下は一騎打ちをしろ、と。戦えと仰られました。しかし、ルールは提示されなかった。それならばここは戦場と同じです。戦場で愚かにも彼は自分に背を向けました。よって、戦場のルールを用いさせて頂きました。……まさか卑怯だ。とても仰られますか？」

「……いや」

レイが無表情でそう語ると、ジョゼフ1世は小さく首を振った。

「貴様の言うとおりだ。確かに一騎打ちとは言ったが、ルールまでは提示していなかった。故に貴様の言い分は正しい。だから不意打ちだろうが何だろうが相手を倒した以上は貴様の勝ち。それは認めようぞ」

ジョゼフ1世はそう言った後に、倒れたビダーシャルを横目で見ながら「ううむ」と唸った。

「……だが、ビダーシャルとてそこの凡夫では無い。不意打ちしたところで素直にやられる程弱くも無い。少しでも殺気があれば反

応は出来た筈だ。さすれば奴の先住魔法で倒されたのは貴様の筈だ」

「簡単です陛下」

そう言うと、レイは不敵に笑う。

「彼が殺気を感じるよりも、自分が剣を振る方が早かった。それだけのことです」

「何と!!」

ジョゼフは今日1番の驚きの声を上げた。

パーカーも驚いていたが、すぐにいつものニヤリ顔に戻ると、出会った時と同じように拍手した。

「やはり素晴らしい!素晴らしいなあお前は!」

「……で、陛下。例の約束ですが」

レイはパーカーを無視してジョゼフ王へ話し掛ける。

「おお!そうであつたな!何が望みだ?金か?土地か?女か?それともシュヴァリエでもやろうか?」

「では……」

レイは一呼吸置いてから答えた。

「陛下の自分に対する永久的な干渉と無関心をお願いします」  
「何と!!」

ジョゼフ1世はまるで悲鳴のような声を上げた。

「貴様みたいな面白い男に2度と関わってはならぬと、貴様はそんな残酷なことを俺に言うのか!？」

「まさか、陛下ともあるう方が自分から申し出たことを反故なさるなど……」

「見くびるな！俺は自分の言葉を偽る真似などせぬ」

ジョゼフ1世は目つきを鋭くして言った。

しかし、すぐに寂しそうな表情になる。

「……勿体無い。本当に勿体無いぞ。お前みたいなのが側にいれば決して退屈などせぬというのに」

「陛下、お言葉ではございますが、自分は陛下の玩具では無いのです」

レイはそれだけ言うと、無言で頭を下げてから、ジョゼフ1世に背を向けた。

ジョゼフ1世は去って行くレイに声を掛ける。

「……最後に聞かせてくれ。お前は一体何だ？」

漠然とした問いを投げ掛けられる。

レイは少し考えてから、ジョゼフ1世に背を向けたまま口を開いた。

「ただの平民です。それ以外は陛下の見たまま、感じたままで結構です」

レイはそう言うと、謁見の間から出て行った。

レイが出て行った後、ジョゼフ1世は側近の男に気絶しているビダールを運ぶように命じた。

側近の男はレビテーションの魔法を使い、ビダーシャルを謁見の間から医務室へと運ぶ。

やがて、謁見の間はジョゼフ一世とパーカーしかいなかった。

「ふうむ、俺の見たまま、感じたまま……か」

ジョゼフ一世は先程レイに言われたことをふと思い出していた。

「この俺の空虚な心でも、あやつからは何かを感じることが出来た。その何かは分からぬ……がな。だが……久々に興奮したな！」

ジョゼフ一世はレイと向かい合った時間を回想し、いつの間にか笑顔になっていた。

そして、パーカーの方へ向き直る。

「伯爵。今日は俺にとって、久々に良き日であった。その機会を作ってくれて有り難く思うぞ！」

「勿体無きお言葉」

パーカーは再び膝をつき、胸に手を当てながら頭を下げた。

「だからこそ、勿体無い。俺はもうあやつに関わることが出来ないのだなあ。自分が言い出したこととはいえ、実に勿体無い」

「差し出がましいことを申し上げるようで誠に恐縮なのですが、何故そんなにあの平民と交わした口約束をお守りになられるのですしょうか？所詮は口約束ですよ？」

「先程はああ言ったが、確かに俺にはあやつとの口約束を守ってやる義理は無い。あんなもの、俺の意志一つで簡単に破棄出来る。……だが俺とて、そう出来る相手とそれをしたくない相手との区別はつく。あやつとの約束は例えば口約束でも破りたくないのだ。俺の空

虚な心がそれを望まない。言葉は偽れても、俺の心までは偽れないからな」

「それ程までにあの平民のことを……」

「あやつは平民では留まれぬ存在よ。それは伯爵。お前も感じていることだろう?」

「さあ、どうでしょう?」

「お前もなかなか食えぬ男だ。……しかし、あやつは惜しい男だ。もしもあやつが他国の王であれば、俺は嬉々としてあやつの治める国を欲しいと思っただろうな」

ジョゼフ1世は遠くを見つめながらそう言うと、その後にはまた彫刻のような表情を読み取ることの出来ない顔へと戻っていた。

パーカーはそれを見とめると、無言でジョゼフ1世に頭を下げ、そのまま謁見の間から出て行った。

ジョゼフ1世は暫くの間、誰もいない謁見の間に鎮座し、虚ろ気な目で視線を宙に彷徨わせていた。

レイはガリア城から出ると、軽く深呼吸とストレッチをした。慣れない敬語や礼儀作法に、今更ながらどつと疲れを感じる。

首をパキパキと鳴らしながら先程までの夢のような 勿論、いい意味ではない 時間を思い返していた。

その中でも取り分け、ジョゼフ1世のことが強烈に頭の中に焼き付いている。

「あの王……」

レイがビダーシャルに不意打ちを仕掛けて叩き伏せた時のこと。

レイはジョゼフ1世の真正面に立っていたが、その時奇妙なものを



目にしていた。

それは、レイの一挙一動を目で追っているジョゼフ1世であった。まるで、スローモーションでも見るかのようにじっくりと。

相手がエルフ故、殺すつもりは無かったものの、レイはそれ程手加減をしていなかった。

そのレイの動きを目で追うのは、並みの戦士では不可能である。ということとは、ジョゼフ1世自身も並みの戦士ではないということか。

あの場ではレイが何をしたか分からぬフリをしていたが、あれはそれを隠そうとしていたのだろうか。

「……いずれにせよ、やはりあの王はただ者では無い、ということか」

レイは改めてジョゼフ1世という男の底知れぬ何かを感じた。

「……あの望みもいつまで叶えてくれるか分からんな」

誰に言うでも無く1人こちる。

あの王が本気で自分の欲に忠実になってレイを追いかけ回し始めたら、きつとパーカー以上に面倒なことになるに違いない。

誰も自分の後をつけていないことを確認すると、どうやらレイの望みは叶えて貰っているようであった。

そのままリュティスを出ようとした時、会いたくない男がそこに立っていた。

「ククク……俺に挨拶無しとはちょっと冷たいんじゃないかな？」

パーカーが今すぐ殴り飛ばしてやりたくないようなニヤつき顔でレ

イを見ていた。

「……干渉と無関心はどうした？」

「あれはお前とジョゼフ1世の取り決めだろ？俺には適用されん」

「……そうか、それはしくじったな」

レイは本気でそう思っていた。

「……ところで、どうやって先回りした？お前より先に出て来たと記憶しているが」

「ククク……忘れちゃいないか？俺はこれでもトライアングルのメイジだぞ？フライくらいお手の物さ」

「そう言えば、そんなことを言っていたな」

「ククク……実は聞きたいことがあってなあ」

「……何だ？」

「おお！いいなあ、その面倒臭そうな顔！ジョゼフ1世の前では猫でも被っていたのか？」

「あんたに言われたくは無いがな」

「ククク……聞きたいことと言うのはあのエルフのことだ」

レイは自分が倒したエルフの顔をぼんやりと思い出した。

「奴がどうかしたのか？」

「お前は不意打ちという実に卑劣極まりない行いでエルフを倒した。実に汚い！」

「……下らないことを言いに来たならとつとそこをどけ」

「ククク……人の話は最後まで聞け。もしも、不意打ちを使わずに挑んでいたらお前はあいつに勝てたと思うか？」

「何かと思えばそんなことが」

レイは肩をすくめてみせる。

「……あのエルフがどんな先住魔法使うか知らんからな。だから、やってみないと分からん。正面から戦うなら戦うで、その時によって戦術などいくらでも変わるしな」

「戦術次第では勝てる、と？」

「少し違うな。俺は勝てる戦術しか取らない。つまり、戦う以上は勝つ。勝たねば死ぬ。それが俺の生きて来た世界だったからな。俺は生きる為なら何でもするし、それで今まで生き残って来た。中には卑劣なやり方も勿論あったろうし、俺はそれを否定はしない。俺は magari 間違っても聖人君子などでは無いからな」

「なるほどなるほど……」

パーカーは納得したように頷いた。

「そう言えばお前、エルフに知り合いがいる。とか言ってたな？」

「……まあ、な」

「じゃあ聞くが、そのエルフとあのエルフ、どっちが強いのか？」

「何でそんなこと聞くんだ？」

「興味というものは尽きないんだよ」

「……さあな。そのエルフだって敵対していたわけじゃない。そいつが使う先住魔法を見たことあるが、あのエルフは先住魔法を見る前に倒した。そんな情報量でどっちが上かなど、俺には判断出来ん」

「そうかそうか。いずれお前の知り合いのエルフに会ってみたいなあ。紹介とかはしてくれないのか？友人として」

レイは心底面倒臭そうな顔でパーカーを睨み付けた。

パーカーはやれやれという表情をする。

「ククク……まあ、そう邪険にするな。それに、こう見えて俺も少

しは悪いと思っっている。無理に付き合わせてしまっとな」

パーカーは相変わらず人を馬鹿にしたような表情でそう言っただけだと、懷から何かを取り出す。

それは、手紙のようなものであつた。

「……だから餞別代りにこれをくれてやろうと思つてな」

「？これは何だ？」

「ククク……お前は自分を平民と言っているが、時々自分が平民だということを忘れていることが多いんじゃないか？」

レイは再び肩をすくめて見せる。

パーカーは続けた。

「知らないかも知れんがこの世界は平民にとつてはとても住み辛い。時には平民が故にお前がしたくとも出来ないということなんぞいくらでも起こり得る。ここガリアでそんなことが起きた時はそれを使え。俺の名前がそこに入っている。仮にも伯爵などという爵位を貰っているんだ。効果が無いわけがない」

「あんたにしちゃ気の利く餞別だな。明日大雪でも降るんじゃないか？……まあ、くれるというなら有難く頂いて行こう」

皮肉混じりにそう言いながら、レイはそれを懷に仕舞った。

パーカーはうんうんと頷くと、レイに背を向けた。

「ククク……また会おうぞ」

パーカーはそれだけ言つと、フライの魔法で別荘の方へと飛んで行った。

それを特に目で追うことも無く、レイはリュティスを出た。

気が付くと、日は沈みかけ、外をそろそろ夕闇が支配し始めていた。何処か適当な宿で1泊してからリュティスを出るという道もあったが、野宿は別に苦ではないし、それに今はあの国に1秒でも長く滞在していたくは無かった。

いずれ再び訪れることもあるだろうが、少なくとも今はこの国から別の国へ行きたくてたまらない。

「……さて、次は何処へ行こうか」

行く当ての無い旅というのは、何にも縛られなくてレイは好きだった。

行き先に迷うということは、行き先を好きに選べるということでもある。

そこにはレイが何よりも愛する自由がある。

「……そう言えば、腹が減ったな」

そう言えば、今日1日殆ど何も腹に入れていないことに気が付く。レストランで貴族に因縁をつけられてから、何かを口にする機会が殆ど無かったので仕方ない。

「まあ、野ウサギでも狩って、焼いて食べばいいだろ」

そう言うと、別の国へと繋がる街道を歩き始める。

野宿は苦ではないが、食べ物が大味になってしまるのが残念である。レイは料理が出来ないわけではないが、野外では作れる料理などたかが知れているし、調味料の類も持ってなどいない。

結果として、肉か魚の丸焼きか野菜の煮汁くらいしか口に入れることが出来ない。

早く街か村へ行つて、何か人の手が加えられたものを口にしたいと  
レイは今から思っていた。

だが、張る必要の無い見栄を張って高級なレストランへ入るのは今  
後は止めようと心に誓った。

## ガリア城にて 2（後書き）

ビダーシャル戦の決着の仕方は賛否両論出そうですね（汗）

これでガリア国編は一旦終了です。

今回は短編みたいな感じで書きました。

レイとジョゼフの邂逅、そしてパーカーというキャラを出したかったという意図もあります。

ガリアにはまだまだエピソードを予定しているので、今後もお楽しみ下さい。

次回も原作キャラと絡ませる予定です。

## ラ・ロシエールにて 1（前書き）

お久し振りでず。

今度は再びトリステイン王国が舞台です。  
そして、原作キャラも早速登場します。



## ラ・ロシェールにて 1

薄暗い森の中をレイは走っていた。  
道なき道をひたすら突き進んで行く。

レイは背後をちらと見る。

すると、黒いロープを纏った男が猛然と追いついて来るのが見えた。  
よく見ると、男は地面から僅かに浮いている。

### フライの魔法。

相手の体力切れを待つことは無意味だと悟る。

そして、相手の飛んで来る速さも自分の足と同等、もしくは僅かに速いようであった。

このまま撒くのは無理。

そう判断したレイはその場に立ち止まった。

そして、後ろを振り向いて黒いロープの男と向き合う。

男もその場に立ち止まった。

レイは男に訊ねた。

「……お前は誰だ？」

「……………」

男は何も答えなかった。

お互い、無言で睨み合う形となる。

男は不意に被っていたフードを取った。

すると、その下から禿げた頭と爬虫類っぽい顔が現れる。  
右目の下の方に蛇を模したような入れ墨が彫られていた。  
それを見て、レイは男の正体を察した。

（また教団からの暗殺者が……）

レイは無言でその男を睨み付けながら、右手をゆっくりと剣の柄へと持っていく。

それよりも早く男は杖をレイへと向けた。

「……カッター・トルネード！」

頭の禿げた男は素早く詠唱を終え、淡々と魔法の名を告げ、杖を振り下ろした。

すると、レイの周囲に巨大な竜巻が現れ、周りの木々をなぎ倒しながらレイへと向かって行く。

レイは迷わず竜巻の中を突っ切って、そのまま男の方へと向かって走った。

体が切り刻まれ、赤い鮮血を周囲に飛び散らせてもレイの勢いは衰えず、寧ろ増すばかりであった。

やがて、レイは男のすぐ目の前まで距離を詰めた。

剣の柄をしかと握る。

それまで無表情だった男の顔に初めて怯えの色が浮かぶ。

「……くっ！？」

「……………死ね」

一閃。

目に見えぬ速度で長身の剣を横に払った。

次の瞬間、男の体は上と下に分かれ、地面を転がる。

そして、すぐに地面が血の海と化した。

レイは剣を振って、刀身についた血を払うとそのまま背中の中

に仕舞う。

そして、物言わぬ軀となったそれを一瞥する。

「……しつこい連中だ。殺しても殺してもまた次から次へと湧いて来る」

そう呟くと、そのまま何もなかったかのようにその場を立ち去って行った。

「アーーーーー!!」

その時、1羽のカラスが鳴いた。

そのオニキスのように美しい瞳がじつと去って行くレイを見ている。やがてその姿が見えなくなると、カラスは翼を広げてその場から飛び去って行った。

ラ・ロシエール。

トリステイン王国の南部に位置する都市である。

浮遊大陸アルビオンへの航路を有しており、夜になっても街は賑わっている。

また、スクウェアクラスのメイジが岩から切り出して作ったとされる建物群が特徴的であった。

その街のとある酒場でレイは1人で酒を飲んでいた。

体のあちこちに包帯を巻きながら、殻の固い木の実を左手で弄んでいる。

レイの纏う独特の雰囲気、他の客は彼に関わり合うのを自然と避けていた。

興味本位で遠巻きに見る者も何人かはいたが、レイと目が合いそうになると慌てて目をそらす。

レイは周囲の目は一切気にせず、酒の味を楽しんでいた。

そんな時、1人の女が店に入ってきた。

女は傭兵のような格好をしている。

彼女はレイの目の前までやって来ると、彼の目を真正面から見ながら言った。

「相席、構わないか？」

他にも空いている席はあったが、彼女は敢えてレイとの相席を望んでいるようであった。

「ああ……」

レイは特に断る理由も無かった為、素っ気なく答える。

「そうか。では遠慮なく座らせてもらう」

そう言うと、彼女はレイの真正面に立ち、椅子を引いてそこへ腰掛けた。

レイは彼女へ訊ねる。

「俺に何か用か？」

「別にそんなんじゃない。席が空いていたから座っただけだ」

「……席なら他にも空いていると思うが？」

「そうか？気付かなかったよ」

彼女はそう言うのと豪快に笑った。

嫌味の無い、気持ちのいい笑い方である。

レイは彼女に少しだけ好感を持った。

彼女はウエイトレスの女性を呼び止め、レイと同じ酒を注文した。注文を終えると、彼女は一息つく。

レイは再び彼女に訊ねた。

「……見たところ、傭兵か？」

「そんなようなものだ。……あんたもそうだろ？」

「……まあ、似たようなものだ」

レイはフツと笑った。

すると、先程のウエイトレスが酒の入った木製ジョッキを持って来た。

レイたちのテーブルの上にそれを置くが、その手は震えていた。

「じ、じゅっくりどうぞ！」

そう言って頭を下げると、そそくさとその場を去って行った。

どうやらレイの雰囲気には怯えていたらしい。

それを見て、彼女は「ハハハ」と笑った。

レイは首を傾げる。

「何だ急に？」

「何だって……そりゃ、そんな顔してたらウエイトレスも怯えてしまっな」

「顔？」

「お前もそんな仏頂面していないで、少しは笑顔でも見せてみたらどうだ？ただでさえ人当たりがあまりいいとは言えないのに、今の

「お前はまるで悪鬼のようだ」

「俺は今、そんな顔しているのか？」

レイは自分の顔に触れてみた。

指先で感じるたくさんの傷跡。

確かにこれで悪鬼のように佇んでいたら、怯えられてしまうのも無理は無い。

レイは自嘲気味に笑う。

「……まあ、努力はしてみるよ」

そう言うレイを見て、彼女は再び笑った。

一頻り笑った後、彼女は何かを思い出したかのように口を開いた。

「……そう言えば、お互い自己紹介もまだだったな。これは失礼した」

彼女はそう言うと、木製のジョッキを手取る

「私の名はアニエスだ。是非とも、お前の名前も聞かせて貰いたい」

「……………レイ」

「レイ……か。じゃあ、レイ、済まないが乾杯をしてくれるか？ 1人で飲むのはやはり味気ないからな」

「そのぐらいならお安い御用だ」

レイは自分の木製ジョッキを手にとると、それをアニエスの方へと向けた。

アニエスは自分のジョッキを突き出し、それに軽く当てる。

その後、2人で同時に中の酒をくいと飲んだ。

その時、店の中でピアノが流れた。  
夜はまだこれから……とでも告げるかのように  
それはとても落ち着いた、耳心地の良い曲であった。

## ラ・ロシエールにて 1（後書き）

というわけでアニエスさんの登場です。

時系列的にはアンリエッタに仕える前ですね。

彼女は活躍させる予定なのでお楽しみを。



## ラ・ロシエールにて 2

「……フーッ。なかなか美味しいな。やはり酒は1人で飲むよりも誰かと一緒に飲んだ方がより一層美味しい」

「それは同感だな」

アニエスの言葉にレイも同調した。

レイは1人でいることが多いものの、決して孤独を愛しているというわけではない。

時には人並みに寂しいと感ずることもある。

よく酒場に立ち寄るのは、酒が飲みたいという理由以外にも、そういった寂しさを紛らわせたいという気持ちがあるからかも知れない。

しかし、現実としてレイはそのあまりに異質な雰囲気から他人に避けられることが多い。

そんなレイに近寄って来るのは、何か他に思惑があるのか、それともよっぽど変わった人間かのどちらかであった。

彼女もまた、そのどちらかなのだろう。

だが、それでもレイは人と接しているこの時を嫌いにはなれなかった。

例えば最後に冷めた別れが訪れるのだとしても、それまでは楽しみたい。

それが偽らざるレイの本心であった。

2人は暫く他愛の無い談笑を楽しんでいた。  
ふとアニエスがじつとレイの顔を見つめ出す。

「……………」

その探るような視線に、レイは少しだけ眉を顰める。

「……俺の顔に何かついてているのか？」

「……深そうだな、傷」

そう言うと、アニエスは自分の左目を指差し、上下に指を動かした。

「そっちの目はちゃんと見えているのか？」

「……ああ、御陰様でな」

レイはそう言うと、木製ジョッキに口を付けた。

そして、今度は自分がアニエスを目で探ってみる。

首までの長さに切り揃えられた金色の髪。

パツン前髪が何処か幼さを感じさせる。

顔つきは飛び抜けた美人という程では無いものの、傭兵などという稼業をやっている割にはそれなりの容姿を持っていた。

化粧をして綺麗に着飾れば、男たちが放っては置かないであろうことが容易に想像出来る。

体格も細身ではあるが、しっかりと筋肉がついていて、実に均整が取れていると言えた。

また、こうして一緒に酒を飲みながらも相手に隙を見せないのは、彼女の戦士としての資質の高さを窺わせる。

レイの視線に、アニエスは少し顔を赤らめた。

「……そんなにじろじろと見るな。女性をそんな風に見るのは失礼だぞ」

「男をじろじろ見るのは失礼に当たらないのか？」

「……とと、これは済まないな」

アニエスは慌ててレイから視線を逸らす。  
その仕草にレイはつい笑ってしまった。

アニエスが少し不機嫌な顔になる。

「何がそんなに可笑しいと言った？」

「すまん、そんな乙女みたいな一面もあるんだな、と思ってな」

「……あまり、人をからかわないで欲しいな！まったく！」

アニエスは顔を真っ赤にしながらそう言うと、木製ジョッキに口を付けた。

レイは再び笑った。

「……それにしても、女1人で傭兵生活は色々大変じゃないのか？」

「まあな。何、女だから出来るということもある。例えば……色仕掛け、とかな」

「ほお？それは意外だな。そういうことをするようなタイプには見えなかったが」

「それはそうだ、そんなこと1度もやったことないからな」

アニエスは「ハッハッハ」と笑った。

そして、そのすぐ後。

「……だが、必要があれば色仕掛けだろうとやってやるかな」

ボソッと呟くようにアニエスが言うのをレイは聞き逃さなかった。

「……何か成さねばならないこともあるのか？」

レイが聞くと、アニエスは驚いたような顔をした後、少し躊躇いがちに答えた。

「……聞かれたか。まあ、いい。……実は復讐したい奴らがいるのさ」

「復讐？」

「……お前になら話してもいいかな」

アニエスはレイの目を見てから頷くと、木製ジョッキをテーブルの上へ静かに置くと話し始めた。

「あれは今から10数年前だったか……トリスティンの北部にダングルテールという小さな村があつてな。そこはとも田舎で本当に何も無くて、その日捕れた魚の艶がいいだの、隣の爺さんが腰を痛めたら村中が騒ぎになったりだの、そんなことが全てな、そんな村だったよ。でも、とても平和だった。村の人皆明るくて楽しくて優しくてな」

アニエスは懐かしむような顔になって話していた。

「……そう、あの日が来るまでは」

そこまで言うと、アニエスは突然拳をぎりりと強く握り、齒を食い縛った。

「ある日のことだった。村に集団で男たちがやって来た。連中は我々にこう言った。『新教徒どもは弾圧する』とな。……そう、確かに村の皆は新教徒だった。だが、我々が何をした？ただその日その日を精一杯生きていただけじゃないか！なのに奴らは村に火を放ち、

村の皆を次々と殺していった！私の目の前でな！！」

アニエスはたまらなくなつてテーブルを思い切りドンと叩いた。  
木製ジョッキの中に残った酒が大きく揺れる。

何事かと周りの客がこちらを奇異の目で見て来るが、レイがひと睨みすると、皆そそくさと目を逸らして他人のフリをした。

「隣の爺さんも！よく遊んだ友達も！！母さんも父さんも！！皆殺された！！奴らの手で！！！！」

まるで火を吐くかのようにそう言ったアニエスの目は、まるで今すぐにも人を殺してしまいそうなほど憎悪に満ち満ちていた。

レイは黙って彼女の話の話を聞いている。

今のアニエスの姿は、彼女が先程冗談めかしてレイに言つた悪鬼のようであつた。

暫くの間、沈黙が流れた。

アニエスは静かに口を開いた。

「……私はあの中で運良く生き残ることが出来た。生き残つたのは恐らく私だけだ。何故私だけが生き残れた？……それはきつと奴らに復讐する為だ。村を焼いた奴、皆を……母さんや父さんを殺した奴、そしてそれを指示した奴！！」

アニエスは自嘲気味に微笑んだ。

「……フフ、よくある話だろう？」

「……確かにな」

レイはそれだけ言うと、木製ジョッキを手に取つて、アニエスへと向けた。

アニエスも無言で木製ジョッキを手に取り、レイのそれへとぶつけて、一気に中の酒を飲み干した。

木製ジョッキをテーブルの上へ置くと、少し申し訳なさそうに口を開いた。

「……実を言うと、お前に話し掛けたのも、その復讐が関わっているんだ。気を悪くしたなら済まないが」

「別に気にしてはいない。人が人に接触する時は何かしら含むところがあるのは当然だ。無償の善意という得体の知れないもので人と関わるような奴と比べれば理解出来るだけ大分マシというものだ」

「そうか。そう言ってくれると私も楽だ」

レイの言葉にアニエスはホッと胸を撫で下ろした様子であった。

その後、身を少し乗り出し、声を潜めた。

「……実は、この近く奴らの仲間の1人が潜んでいるという話を聞いた。ブルギツシュと言って、何でもこの辺の領主に納まってるのか」

「その情報は確かなのか？」

「ああ、間違いない。信頼出来る情報筋からの情報だからな。だが、そいつはたくさんさんの護衛に守られている」

忌々しそうにアニエスは言い捨てる。

「1対1なら、相手がメイジだろうが何だろうが、私は何とか出来る」

「ほお、なかなか言うな」

「……だが、対複数となれば違う。1人だけでは絶対に無理だ。そのくらいの判断が出来るくらいには私も復讐に狂い過ぎてはいない」  
「そうか。それで俺は何をすればいいんだ？」

「察しがいいな。流石私が見込んだ男だ」

アニエスは久々にニツと笑ってみせる。

「……お前には護衛の陽動をお願いしたい。ブルギツシュ自身は私の手で殺す！その為にお前を罠に使いたいのだ」

「別に構わん」

「え？いいのか？罠だぞ？私に利用されるだけなんだぞ？こう言うのも何だが、お前に引き受ける義理なんて何も無いんだぞ？」

「お前を気に入った。その理由だけじゃ不十分か？」

「なっ！？」

アニエスは思わず顔を真っ赤にした。

その様子を見て、レイは声を出して笑った。

アニエスはレイを睨み付ける。

「……あまりからかうなと言ってる！」

「ハハハ、済まん。だが、お前を気に入ったのは本当だ。それに

……」

「それに？」

「復讐は成し遂げられなければならない」

レイはすぐに真面目な顔へ戻って言った。

「『復讐しなかった後悔は、してしまった後悔よりも深い』。かつて俺にそう言った奴がいた。そしてそいつはこつも言った。『復讐はしてもしなくても、どっちみち後悔する』と」

「……そいつの言うこと、私には分かる気がするな。初めて人を殺した時、確かに私は後悔のようなものを感じた。私に僅かに残った良心の呵責だったのだろう。だが、やらなければ私はいつか、

憎しみの末に自分自身を殺していたかも知れん」

「どうせする後悔ならば、自分の心が望むままにすればいい。ア二エス。お前はそいつらを殺したいと本気で思ってたんだろ？なら、それは完遂すべきだ。と俺は思う。……すまん、部外者の人間が勝手なこと言つて」

「いや、いい。寧ろ、私に善意で『復讐しろ』と薦めた人間はお前が初めてだ。レイ」

「善意かどうかは分かんがな」

そう言つてレイはフツと笑った。

ア二エスもフツと笑う。

「まあ、引き受けてくれるのであれば何でもいいさ。……そう言えば、お前はどんな獲物を使っているんだ？」

「剣だ。ここに置いてあるだろ？」

「他には無いのか？」

「無い。強いて言えばこの肉体くらいだ」

レイはそう言つて、拳を握る。

ア二エスはレイの腕と置いてある剣を見比べた。

「……そんな細い腕でよくそんな剣を振り回せるな」

「太いと逆に動かし辛くなる。筋肉が邪魔してスピードを殺すからな」

「そういうものなのか？」

「ああ、強くなりたい奴はすぐに無駄に筋肉をつけたがる。だが、大事なものはバランスだ。そして、それを維持出来て初めて強くなる。後は実戦を積み、経験と勘を養っていけばいい」

「なるほど、そういう考え方もあるのか。勉強になるな」

「ところでお前は何を使っているんだ？」



「私か？私は……」

アニエスは腰のホルスターから銃を抜いてレイへと見せた。

「これは……銃か？」

「……それは、私が初めて貯めた金で買ったものだ。奴らへ復讐する為にな。まあ、子供には過ぎた玩具だったがな。だが、奴らの仲間を殺すのに役立つてはくれた」

「……そうか。少し触ってもいいか？」

「ああ、お前なら別に構わん」

アニエスに手渡されると、レイはそれをよく見てみた。  
大分古い型でところどころに傷がある。

「なるほどな。だが、これだともうすぐ使えなくなりそうだぞ？」

「そうなる前に復讐を終えたいところだ」

「フツ、そうか」

レイはアニエスへ銃を返した。

アニエスは銃を腰のホルスターに仕舞うと、次に鞘に入ったままの剣を見せた。

「後はこれだ」

「なるほどな。大体分かった」

レイは左手の木の実を握り潰すと、皿の上に中身を落として、それを一つまみ口に入れた。

「……で、何時決行する予定なんだ？」

「すぐにでも、といきたいところだが、何も準備しないわけにもい

かないからな。取り敢えず、奴の屋敷に行こうかとは思う。下見の意味も込めてな」

「分かった」

すると、レイはウエイトレスを呼び止め、酒のお代わりを頼んだ。アニエスもお代わりを頼む。

ウエイトレスはすぐにやって来ると、先程と同じ様に忙しくテーブルの上に木製ジョッキ2つを置いてから、そそくさとその場を去った。

2人は新しい木製ジョッキを手を取った。

「では、改めて乾杯といくか」

「ああ、2人の出会いに……」

「乾杯」

「……ひ、ひいいい!!」

中年の男が情けない声を上げて後ずさった。

頼りにしていた護衛は、男にあっさりと斬り伏せられて死体と化して地面へ倒れている。

杖を持つにも、自分の腕だったものはその辺に転がっていた。

「た、助け……」

「……………」

命乞いをする間も無く、中年の男の首が刎ねられた。

それはまるでゴムマリののように部屋の壁に跳ね返り、地面へバウンドする。

と、次の瞬間、部屋中が血で真っ赤に染まった。

返り血を浴びながら、部屋の中にぽつんと立っている男がいた。

顔や全身を赤い包帯でぐるぐる巻きにし、唯一露出している目と口は焼けただれ、機能していること自体が奇跡的であった。

男のその目は赤い部屋を凝視していた。

荒く呼吸を繰り返しながら、男は喉から搾り出したような掠れに掠れた声で呟いた。

「許”さ”ん”そ”……村”を”焼”い”た”連”中”……！！」

男は振り返ると、ふらつきながらのろのろとその場を去って行った。

## ラ・ロシエールにて 2（後書き）

というわけで、今回もオリキャラが出ます。  
詳細は追々ということぞ。

## ブルギツシュの屋敷にて

ラ・ロシエールから少し離れた場所に、とある領がある。

そこは国からも既に忘れ去られたような場所であった。

以前ここを治めていた領主がとてつもなく無能な人間で、内政の才能もまるで無く、遂には住む平民もいなくなってしまう、その領主が孤独の中で病死した後、そこは領とは名ばかりのただの荒地と化していた。

領主の死から暫く経ったある日、その領を貰い受けた者がいた。

その者はブルギツシュと言い、トリステイン王国の魔法研究所実験小隊の一員だった男であった。

元は下級貴族であったその男はそこを何年もかけて建て直し、遂には人がまともに住める程にまで復興していた。

次々と離れて行った領民たちはその地に戻って来て、そこは以前よりも栄えるようになっていた。

ブルギツシュはひたすら領の建て直しに心血を注いでいた。

やがて彼は領民からも愛される、立派な領主となっていたのだった。

「……それだけ聞けばなかなか出来た男に聞こえるがな」

下見に来たブルギツシュの屋敷の前をうろつきながらレイは言った。共に歩いているアニエスは忌々しそうに屋敷を睨み付ける。

「だからと言って、村を滅ぼしたことが許されるわけじゃない……！」

「確かに。誰も罪を償うことなんて出来やしない。それが出来ると思うこと自体が傲慢だ。罪は背負うしか無い」

「そして、それはいずれ裁かれなければならない」

アニエスは険しい顔で言った。

レイはただ無言で頷く。

こうして、屋敷の周りをうろつくこと約1時間。

明らかに不審者であったが、2人は気配を完全に消すことで他人に気付かれないようにしていた。

入り口の方まで来ると、通り過ぎる際に2人はそこから屋敷の中を覗き込んだ。

「……それにしてもおかしい。静か過ぎはしないか？」

アニエスは不思議に思っ、レイへと訊ねた。

領主の屋敷なのに、護衛の姿が見えないのだ。

これは事前に貰った情報とも食い違う。

「確かに、人の気配が全く無い」

レイも神経を研ぎ澄まし、中にいる人間の数を探ろうとしたが、それを全く感じる事が出来なかった。

この場合、考えられるのはレイに気配を探られないようなレベルの人間がいる可能性だが、いたとしてもそんなに数は多く無いであろうし、それ以外の人間の気配を感じられないのはやはりおかしい。

レイは屋敷の門を押してみた。

すると、呆気なく重そうな門が開いてしまった。

「……何をやってるんだ!？」

アニエスが慌てて言うと、レイは何も言わずに屋敷の中へ入って行った。

仕方なしにアニエスもレイの後に続く。  
アニエスは確認するようにレイの背中へ向けて言った。

「今日はまだ下見だけだぞ？」

「……もしかしたら下見しなくても良くなってるかも知れない」  
「? ということだ？」

「!! アニエス、あれを見る」

レイが指差した方を見ると、そこには噴水があった。  
噴水の水はまるで上等なワインのように赤く染められている。  
そして、その水面にはうつ伏せになった男が浮かんでいた。

「! ? こ、これは! ?」

「……………」

レイはすぐに噴水まで近寄り、男を調べた。

男は肩から脇にかけてバツサリと斬られている。

仰向けにすると、男は苦悶の表情を浮かべていた。

「……………お粗末なことだな」

レイは思わずそう呟いた。

レイが相手を殺す時は、余程実力が拮抗していない限りは、大体が一瞬で決まってしまう。

一瞬で決まるが故に、相手も苦しみもなく死ぬのである。

死体の表情から察するに、これだけ苦しみなから死んだということ  
は、一瞬で相手の命を断てなかったことを意味する。

わざとそうしたのか、これをやった人物の技量の問題かはこの時点  
では分からないが、少なくともこれを行った者の実力がそれ程高い  
ものではないということをレイは感じた。

相手が完全に死んだことを確認しないのは、自らの命取りになるからである。

相手がメイジならば、死ぬ最後の瞬間になにか魔法を使われるかも知れない。

そうなれば、最悪相打ちになってしまう可能性だってある。

実力がある者であれば、こんな殺し方はまずしない。

また、斬り口がざんばらなのを見るに、その者の使用している刃物は斬れ味があまりよくないのであるということが推測された。

錆びているか、もしくは剣ではなく斧などの類なのかも知れない。

「屋敷の中へ行くぞ」

「……………」

アニエスは無言で頷くと、レイの後へ続いて屋敷の中へと入った。

屋敷の中は外よりも酷い惨状であった。

使用人らしき女性や少年、護衛らしき若い男たち、全員が無残に殺されていた。

至る所が血に塗れ、咽返りそうになるような臭気が辺りに満ちている。

血には慣れている筈のアニエスも流石に口元を押さえていた。

「皆殺し……………か。惨たらしいな。流石にここまでやってのけたのは見たことが無い」

「大丈夫か？」

「……………ああ、大丈夫だ」

アニエスはレイに目配せする。

2人は屋敷の奥へとどんどん進んで行った。

やがて、不自然に扉が開いている部屋を発見し、すぐに中へ入った。



「！！」

中も相変わらず血に塗れていたが、それより目を引いたのは部屋の中央で倒れていた人物であった。

「ブル……ギッシュ……！！」

アニエスは忌々しそうにその名前を呟く。

ブルギッシュだったその死体はだらしなく前のめりに倒れ込んでおり、首から上が無かった。

それに近寄ろうとするレイの足に何かが当たった。

それは、死体の首から上の部分であった。

レイはそれを躊躇無く持ち上げる。

「……先を越されたな」

「……私のこの手で奴を殺れなかったは残念だが、致し方あるまい」

「問題は誰がこれをやったか……だな」

「ああ、一体何者なのだろうか？」

屋敷内の様子から察するに、この惨劇を引き起こした人物はブルギッシュに対して何かただならぬ思いを抱えていたことは想像に難くない。

それならば怨恨の線が疑われるが、ここ最近のブルギッシュは荒地同然のこの土地を建て直した領主ということで一目を置かれていた。領内に住む者たちからの評判も悪くは無い。

表層的な面では彼に恨みを抱くような人物はいなかったであろう。勿論、ここにいるアニエスみたいに過去の行いから恨まれていたとかそういう可能性が全く無いとは言わないし、彼に嫉妬した人間が引き起こした事件かも知れないので一概には言えないが。

「……足跡？」

レイは地面に血で作られた足跡があるのを発見した。これだけ夥しく血が流されているのだから、当然と言えば当然ではある。

レイはその足跡を追うことにした。

アニエスも無言でそれを追い掛ける。

足跡は屋敷の外へと続いていった。

「間抜けな奴だ。足跡を残すなんて、まるでついて来いと言っているようなものじゃないか」

アニエスは何時でも剣を抜けるように、柄に手を置きながら言った。レイはチラッとアニエスの方を見た。

「……もしくはそう言ってるのかもな。ついて来い、と」

「何の為に？」

「さあ、な」

それだけ言うと、再び無言で足跡を追いつづけた。

やがて、2人は薄暗い森の中へと入った。

足跡の血は土に吸収され、目に見えにくくなりながらも、その鼻をつく鉄の臭いがこの先にまだあの足跡が続いているということを証明していた。

目と鼻を頼りに足跡を追うこと数分、遂に足跡がそこで途切れてしまった。

「……ここで靴を脱いだか、あるいは」

「この辺にいるか、ということか」

2人は周囲を警戒する。

お互いの背を合わせ、共に剣の柄へと手を置き、すぐに抜ける体勢へと変わった。

「……………」

「……………」

2人とも一言も発さず、ただ1、2回だけ目を合わせる。

そして、神経を集中し、全ての音に耳を傾けた。

時折、獣の唸り声のような音も耳に入ってくる。

突如、奇妙な鳥の鳴き声が辺りに響いた。

次の瞬間、すぐ側の木から何かが落ちて来た。

「……！」

それが人だと気が付いた瞬間、レイとアニエスは剣を抜いて構えた。両者共に実に素早く、無駄の無い動きであった。

そいつは地面へ着地するなり、そのままこちらを睨み付けるように顔を上げ唸った。

顔や全身を包帯でぐるぐるに巻いており、その包帯も返り血を浴びたせいか真っ赤に染まっている。

その上にボロボロの布切れをかけてあるだけの格好は、まるでグールを連想させた。

「ク”ウル”ル”ル”ル”ル”ル”……………」

そいつはこちらを睨み付けながら、左手に持った剣を2人へ向けた。剣はえらく錆び付いており、折れていないのが不思議なくらいである。

アニエスの汗が一筋、地面へ伝え落ちる。  
すると、それを合図にするかのようにそいつはアニエスへと襲い掛かった。

「ぐっ!？」

アニエスは素早く剣を構え、そいつの斬撃を受け止めると、そのまま弾いて空いた胴体部を狙って剣を払った。  
しかし、そいつはまるで獣のようにそれを後ろへ飛んで交わすと、不恰好なまま着地し、そのままこちらを睨み付ける。  
アニエスは眉を顰めて言った。

「……何だこいつは!？」

「……どうやら、こいつがお前の獲物を横取りした奴みたいだな」  
「こいつが……?」

レイに言われてアニエスは改めてそいつを見た。  
まるで獣のようなその立ち居振舞いは人とはとても思えない。  
意思の疎通が出来るかさえ怪しかった。

「おい、貴様!!」

だがしかし、アニエスは問い掛けた。

「答えろ!何であの男を殺した!!」

「ウ”ウ”ウ”ウ”ウ”ウ”ウ”……」

そいつはアニエスの問いにも、ただ唸るだけであった。  
アニエスは再び声を上げた。

「私はアニエス・ド・ミラン！今は亡きダンゲルテール村の唯一の生き残りだ！！あのブルギッシュという男は私の村を家族を全て焼き払った者たちの仲間で、皆の敵だ！！貴様は何故奴を殺した！？」

「！？」

アニエスがそう言うと、そいつは突然驚いたようにアニエスの顔を凝視する。

暫くそうしていると、そいつは初めて声らしき声を出した。

「ア”ニ”エ”ス”……ア”ニ”ー”か”？」

「何だと！？」

そいつの言葉にアニエスは愕然とした様子であった。

アニエスをじっと見ていたそいつは、突然身を翻してその場から走り去ろうとした。

アニエスが手を伸ばし、それを制止しようとする。

「待て！！」

「……………！！」

そいつは地面の土を一頻り掴むと、それを2人に向けて投げつけた。アニエスは思わず顔を背ける。

レイは剣を振ってその土を払うと、その勢いのままそいつを追い掛けようと足を踏み出した。

その時、アニエスがレイを呼び止める。

「待ってくれ、レイ！！」

「……………」

レイは素直に動きを止めた。

その隙にそいつはその場から去って行つて見えなくなってしまった。レイはそれを見て取ると、素早く剣を仕舞い、アニエスへ向き直った。

アニエスは目を見開き、口を開けたまま立ち尽くしていた。

「……何故止めた？」

「そんな……馬鹿な。有り得るわけがない。あいつは……あいつは……」

アニエスはレイの言葉が耳に入らず、ただうわ言のように繰り返した。

「あいつは……」

## ラ・ロシエール周辺の森にて 1

「アニー！アニー！」

純朴そうな青年がこちらへ走って来ながら、少女へと声を掛けた。右目に特徴的なホクロがあるのが印象的である。

「なあに、ドワイト？そんなにあわてて、どうしたの？」

少女が訊ねると、ドワイトと呼ばれた青年は息を切らしながら答える。

「ハア、ハア……聞いたか？ウォンキー爺さんがまた腰痛めて寝込んでらしいぞ！」

「ええ！？おじいちゃんが！？」

ウォンキー爺さんは少女の家の隣に住む、少し気難しい老人であった。

だが、実は不器用なだけでとても優しく、少女に内緒でお小遣いをくれたりと、まるで本当の祖父のように少女を可愛がってくれたのであった。

少女が少し心配そうな顔を見ると、ドワイトと呼ばれた青年は少女の手を引いて走り出した。

「ド、ドワイト！？」

「アニー、ウォンキー爺さんのところへ見舞いに行くぞ！」

「ちょ、ちょっと待ってよドワイト！」

そう言いながらも少女は嬉しそうに、彼に手を引かれながら走って

いた。

「ドワイト……」

「アニエス！」

「……」

レイの呼び掛けに、ようやく気が付いたアニエスは慌ててレイの方を振り返る。

「レイ……？」

「どうしたんだアニエス？先程からボーッとして」

「ボーッと……していたのか私は？」

「ああ、もし戻らなかったら頬の1つでも叩こうと思ったくらいだ」

「……手厳しいな。それでも私は女だぞ？」

アニエスは憂いを帯びた顔で言うと、先程襲ってきた人物が走り去って行った方を見つめていた。

「……」

「……奴はお前の知り合いなのか？」

「……何故そう思う？」

「俺の耳が確かならお前は先程『ドワイト』と呟いていたが？」

「そうか……。私はそう呟いていたのか……」

アニエスは信じたくないといった表情で首を振った。



「……私を『アニー』と呼ぶのは、両親以外ではただ1人しかいない。だが、その人が……ドワイトが生きている筈が無いんだ」  
「生きている筈が無い……とは？」  
「ドワイトは私の目の前で……」

アニエスの目の前がフラッシュバックする。

燃え盛る村、木材や人の焼け焦げた臭い。

耳に聞こえてくるのは人々の悲鳴と男たちの怒号。

肌で感じる熱に幼いアニエスは気絶してしまいそうであった。

「アニー！早く！」

「ドワイト！」

そんなアニエスの手を引き、一生懸命走っているのは純朴そうな青年であった。

「ドワイト！おとうさんとおかあさんが！」

「アニー！2人はもうダメだ！……せめて君だけでも！」

「ドワイト！」

必死で走る2人の前に何者かが立ちはだかった。

「待て！」

「ぐっ！？」

男は2人の行く手を遮ると、まるで独り言のようにブツブツと何かを言い始めた。

「……我が名はブルギツシュ・デ・アブラー。二つ名は『種火のブルギツシュ』だ。急に名乗り上げたことを許して欲しい。これでも貴族なのでね。そしてこれも命令でね。恨んでくれるなよ」

男は言い終えると同時に杖を取り出す。

それを見て取ると、ドワイトは急に叫び出した。

「うわああああああー!!」

ドワイトはアニエスを突き飛ばすと、そのまま男に向かって突進した。

そして、ちらと後ろを振り返り声を飛ばした。

「アニー！君だけでも逃げろ!!」

「ドワイト!!」

「……ファイヤーボール!!」

男の杖の先から火の玉が放たれ、ドワイトの体を包んだ。

「ぐああああああああー!!」

ドワイトは耳をつんざくような悲鳴を上げると、その場に崩れ落ちた。

彼を包む火は、勢いそのままにどんどん燃え上がって行く。

ドワイトは最後の力を振り絞り、今にも消えてしまいそうな声でアニエスの名前を呼んだ。

「ア……二ー……………」  
「イヤアアアアアー!!」

「……ドワイトは私の目の前で死んだ。焼け死んだ!あの男……ブルギツシュの手によって!!……だから生きてる筈がないんだ」

アニエスはまるで自分に言い聞かせるように声を張り上げた。  
レイは落ち着かせるようにアニエスの肩を軽く叩いた。

「……取り敢えず落ち着け。冷静にならねば見えるものだって見えなくなる」

「……すまん、取り乱して」

アニエスはフフッと自嘲気味に笑った。

「情け無いな……。奴が知り合いかも知れないと思っただけでこの有様とは……。自分はこんなにも弱かったのかと改めて思い知ったよ。本当に嫌になる……」

「そう自分を卑下するな、アニエス」

「……分かってる。分かってるさ」

アニエスは呟くようにそう言うと、目を閉じて首を振った。

「だが、今は……少しそっとしておいてくれないか?ほんの少しでいいんだ。ほんの少しで……」

「ああ、分かった」

レイがそう答えると、アニエスはレイに背を向けた。  
暫くそうした後、アニエスは再びきりりとした表情で振り返った。

「……世話を掛けたな、レイ」

「大丈夫か？」

「何、問題無い。いつもの私だ」

そう言つてアニエスは胸を張つてみせる。

その様子は何処が無理しているようにも見えたが、レイは特に何も言及しなかった。

彼女に会つてまだ数刻しか経っていないが、それでも交わした会話やそこから時折垣間見える彼女の本質を知ること、レイはアニエスをそこまで弱い人間では無いと信じていた。

それならば、わざわざ自分から何かを言うことも無いだろうとレイは思った。

すると、突然アニエスは大きな声を出した。

「奴を追うぞ！」

声高らかにそう宣言する。

「……奴の正体を見極める！奴は側に来た我々を突然攻撃した！そこから推測するに、奴は自分に近付く者を見境なしに襲う可能性が高い！最悪、罪もない者たちが奴に襲われ、その命を落とすかも知れない。奴は躊躇うことをしない。それは屋敷の中にいた他の連中の惨状を見れば明らかだ。私の目的は確かに復讐だ。だが、復讐とは無関係な者まで無慈悲に殺すことは絶対にしない！奴の目的が私と同じかどうかは分かんが、奴は許されざることをした！私はそ

れを許すことは出来ん！だから奴を追う！」

アニエスの言葉を聞き、レイはフツと笑った。

「まるで王国の騎士みたいな台詞だな」

レイがそう言うと、アニエスはまるでいたずらっ子のように笑ってみせた。

「昔好きだったんだよ。騎士ごっこがな！」

そう言つてのけるアニエスのその屈託の無い笑顔はレイにとって、とても魅力的に映った。

レイは再びフツと笑った。

「それは随分とお転婆なことで」

「フン、私らしいだろ？」

「……では、可憐なる騎士殿。先へ進みましょうか？」

「ああ、私について来い！レイ！」

そうして、2人はドワイトらしき人物が走り去って行った方角へと足を進めた。

森の奥の方は、今までよりも薄暗く、まるでそこだけ夜の闇に落ちたみたいであった。

日の光さえ遮る木々の群れが人々の進入を拒む。

まるで森全体が生きているとさえ錯覚しそうであった。

そんな森の中を2人は突き進んだ。

地面には奴の足跡が薄っすらと残っている。

それを辿っていくと、確かに人が通った形跡が残っていた。

邪魔をする木々は薙ぎ払われ、まるで獣道の如く道が出来ていた。

「足跡が新しくなって来たな。ということは奴に大分近付いて来たということか」

ア二エスがそう言うのと、レイは無言で頷いた。

2人して、何時でも剣を抜けるように構える。

先程の奇襲から考えるに、ドワイトらしき人物の戦い方は獣に近い。剣術や戦術などでは無く、ただ力のままに持った武器を振るう。

実にシンプルで、実に厄介な戦法である。

型にはまらない戦い方は、それなりの実力者にやられればかなりの脅威となる。

純粹な技量ではレイは勿論、ア二エスよりも劣るであろうが、下手ををすると思わぬ一撃を受ける可能性がある。

それが致命傷になってしまえば、元も子もない。

達人が素人のまぐれで殺される。

それは決して珍しいことでは無い。

寧ろ、真に実力のある人間にとって、読めない攻撃ほど恐ろしいものは無いのである。

2人は共に神経を研ぎ澄ませ、慎重に前へと進んだ。

少し先へ進んだ時点で、血の臭いを感じ取った。

奴は確実に近くにいる。

先手を取られれば、奴のペースに持ち込まれてしまう。

それだけは避けなければならない。

緊張が辺りを支配する。

「ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
!!  
」

まるで洞穴の向こうから聞こえるような声が辺りに響く。

すると、そいつはまるでグールのように地面の中から現れた。そして、レイ目掛けて持っていた剣を力任せに振り下ろす。

「レイ！」

.....!!

レイは予期していたかのように、素早く剣を抜き、その斬撃を受け止めた。

そして、刃同士を擦り合わせたまま力で強引に剣を押し返すと、一気に間合いを詰めてそいつの持つている劔目掛けて素早く劔を振り下ろす。

錆び付いた剣はレイの斬撃で呆気なく真つ二つにへし折れた。

「ク  
”  
ウ  
”  
!  
?  
」

そいつは折れた剣を捨てると、後ろへ飛びながら懷から錆びたナイフを取り出し、レイへと投げつけた。

レイは紙一重でそれを交わし、再びそいつとの間合いを詰め、肩からそいつへ突進した。

そして、そのまま地面へ押さえ付ける。

「ク  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
！  
！  
カ  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
ア  
”  
！  
！  
」

そいつは激しく暴れて抵抗した。

レイはそいつの首に自らの左腕を当てると、そのまま地面へ向けく

つと力を入れた。

「……………!!」

すると、すぐにそいつは大人しくなり、手足を地面へ投げ出す。そして、そのまま動かなくなった。

それを確認すると、レイは慎重に立ち上がりそいつから離れていった。

アニエスがレイへ訊ねる。

「……………殺したのか？」

「いや、失神させたただけだ。しかし、地面の中に隠れていたとは……まるでグールだな」

「ドワイト……………」

アニエスは失神したそいつの近くに寄ると、顔をまじまじと見つめる。

そして確信した。

「……………やはり、こいつはドワイトだ。間違いない」

「そうなのか？」

「右目のホクロ……………焼けただれていても分かる」

そう言うと、アニエスはそいつの顔を手で撫でる。

「ドワイト……………何故こんな……………」

目の前のドワイトは、全身を包帯で包み、僅かに露出した目と口さえ焼けただれ、生きていることさえ奇跡的に見えた。

唸るような声しか出せないのは、喉も舌も焼かれてしまったからな



のだろう。

あの後、どうやって助かったのか。

そして、どうして今こうして剣を持っているのか。

謎は深まるばかりであった。

アニエスはレイへと向き直った。

「すまないな」

「ん？」

「こいつを……ドワイトを殺さないでくれて」

「……あの時はああするしか無かった。……気にするな」

「嘘が下手だな、お前は」

アニエスはそう言つと、少しだけ安堵したように笑つてみせた。

レイも口角を僅かに緩める。

「アーーーーー!!」

その時、突如辺りに鳥の鳴き声が響いた。

思わず驚いたアニエスが周囲を見回すと、木の上に1羽のカラスが止まっていた。

「……何だ、カラスか。驚かせるな、全く」

「……………」

レイはカラスと睨み合うと、すぐに懷に手を入れた。

すると、カラスは翼を広げ、その場から飛び去ってしまった。

レイはチツと舌打ちすると、カラスの飛んで行った方を目で追い掛

ける。

（あのカラス……間違いない。教団の奴か！）

レイは投げナイフから手を離し、チラリとドワイトの方へ目をやった。

（このドワイトという男……無関係とは思えないな）

レイは再びカラスの飛んで行った方を見つめると、忌々しそくに空を睨み付けた。

## ラ・ロシェール周辺の森にて 1（後書き）

ドワイトはオリジナルキャラです。

村の生き残りがアニメスだけじゃなかったら…と妄想して出来ました。

ちなみにレイが彼を失神させたのはギロチンチョークみたいなのを想像して下さい。

そして、教団。

これは後々出て来る（というか時系列的には初期の方）話全体の根幹に関わらせようかなあ  
とか思ってるオリジナル設定です。

## ラ・ロシエール周辺の森にて 2

先刻の闘争から、どのくらいの時を経たのか。  
空も見えぬ、光も射さぬこの場所では、それを正確に知る術は無かった。

相も変わらず、周囲は闇夜のように暗い。

レイとアニエスは気を失ったドワイトを近くの木に縛りつけると、ただじっとその場で彼が目覚ますのを待っていた。

その間、2人は何も言葉を交わさなかった。

アニエスは自分以外の村の生き残りの存在に思うところがあったのか、終始穏やかではない表情でドワイトを見つめ、レイは先程の力ラスを見てから、険しい表情をしたまま無言で宙を見つめている。事情を知る者ならば、1秒たりともその場にいたなくなる程のただならぬ空気が辺りに蔓延していた。

.....ピクッ

その時、重苦しい雰囲気断ち切るかのようにドワイトの肩が僅かに痙攣する。

それは覚醒の合図であった。

レイとアニエスは共に視線を同じ方向へ定め、ドワイトの動向に注目する。

彼の閉じられていた目がゆっくりと開いて行く。

「.....ン”ン”？」

ドワイトの口から声が漏れる。

目を覚ましてからの第一声には人間らしい戸惑いが混じっているよ

うに感じられた。

彼はすぐに自分が置かれている状況に気が付き、縛られているのも構わず暴れだした。

「カ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！カ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！！」

獰猛な獣のように歯を剥き出しにし、辺り構わず喚き散らす。

しかし、きつく結んだ縄はそう簡単に外せるものではなく、ドワイ

トを拘束し続ける。

暫くそのままにしていると、叫び疲れたのか荒く息を吐きながらドワイ

トはがつくりとうな垂れた。

暴れても無駄だと判断したのか、今は大分大人しくなっていた。

その時を見計らって、アニエスが声を掛ける。

「……ドワイト」

「ハ”ア”、ハ”ア”、ハ”ア”……」

「ドワイト！！」

「ハ”ア”、ハ”ア”……お”ま”え”は”、ア”ニ”ー”か”？」

ドワイトはアニエスの顔を見ずに言った。

「ああ！！私だ！！アニエスだ！！」

アニエスは思わず興奮しながら答える。

こんな状況でも無ければ、飛びついて抱擁<sup>ハグ</sup>の1つでもしたいところであろう。

しかし、懐かしの再会と言うには、ドワイトの姿はあまりにも変わり果て過ぎていた。

今の彼から昔の姿を連想するのはアニエスでさえ出来ないようであ

った。

「どうして……どうしてこんな……ドワイト」

「……………」

ドワイトはまるでアニエスの顔を見ないようにしているかのように、一切顔を上げようとはしなかった。

アニエスも何か言いたそうにしているが、言葉に出来ないといった感じでドワイトを見下ろすだけである。

その様子を後ろから見えていたレイはハアと息を吐いて前へ出ると、ドワイトの前に立った。

レイの存在に気が付くなり、ドワイトはすぐに顔を上げる。

「き”さ”ま”！！ア”ニ”ー”か”ら”は”な”れ”ろ”！！」

そう声を張り上げると、ドワイトはぎりりと歯を食い縛りながらレイを敵のように睨み付ける。

レイはドワイトのこの態度に思わず肩をすくめると、アニエスに目配せした。

レイの視線の意味を瞬時に汲み取ったアニエスはドワイトに落ち着いた声色で話し掛ける。

「……ドワイト、レイは敵じゃない。こいつは私のパートナーみたいなものだ」

「……今だけ、な」

「だから、そう敵視しないでくれないか？」

アニエスがそう言うと、ドワイトは納得いかないというように首を激しく振った。

しかし、次にレイを見た時は、先程のようにレイを睨み付けるのを

止めていた。

レイはアニエスに「すまなかつたな」と目で合図を送った後、再びドワイトと向き直った。

「……色々言いたいこともあるんだろうが、少しこちらの話をさせてもらってもいいか？ あんた……ドワイトと言ったか？ これに見覚えは無いか？」

レイは懐から錆びた十字架のようなものを取り出した。十字架の真ん中に髑髏が張り付けにされているような奇妙なデザインである。

「!!!!!!!!!!!!!!」

それを見るなり、明らかにドワイトの態度が変わった。その十字架からしきりと目を逸らしている。ドワイトの変化にレイは確信を持つ。

「やはり知っているな？『教団』のことを！」

「ちよ、ちよっと待ってくれ、レイ」

アニメスが慌てて話しに割って入って来る。

「何だその十字架は？それに『教団』って何だ？」

「……詳しく知ればお前も巻き込まれる」

「お前の心遣いは分かった！だが、ドワイトが関係しているなら、私が何も知らないというわけにはいかないだろ！」

.....

「レイ！！」

アニエスが再度問い質すと、レイは苦渋の表情で彼女へと向き直った。

「……確かにこの男がお前の知り合いなら、お前も無関係ではないか」

レイは覚悟を決める。

「いいか、この話は決して口外するな。知ってる素振りすらも見せない方がいい。下手をすればお前も奴らに目を付けられるかも知れないからな」

「ああ、分かった」

「……少し前になるか、俺は旅の中でロバ・アル・カリイエに寄ったことがあった」

「ロバ・アル・カリイエだと！？そんなの旅の途中で寄るような場所じゃないだろ！？」

「まあ、確かに気軽に行ける場所では無いが、それでも行き来出来ない場所では無いだろ？」

「……お前はただ者では無いとは思っていたが、本当にとんでもない奴だったんだな。おっと、話を逸らしてすまなかった。続きを話してくれ」

「……ロバ・アル・カリイエのとある街に立ち寄った時のことだ。

そこではとある新興宗教が盛んでな。新興宗教とは言っても、開かれたのは20年も前のことらしいが……街の住人の殆どがその信者と言っても過言じゃなかった」

「新興宗教……か」

アニエスはその言葉を聞いて、微妙な表情になる。

「……それがもしもこちら側の話だったら、とつくに上から弾圧さ



れてるな。その新興宗教とやらの繁栄も、そういった支配の行き届かない土地だからこそその事象と言えるな」

「ああ、それでその開祖がダリウスとかいう男なのだが……」

嫌なことを思い出したかのように苦虫を噛み潰した表情をするレイを見て、アニエスは首を捻った。

「どうかしたのか？」

「……ああ、すまん。この男に関してはあまり思い出したくなくてな。つい、な」

「大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。……で、そのダリウスという男だが、街の住人……というか奴の信者にはとても慕われていた。信者たちは奴を尊敬し、そして愛していたよ。奴の言うことなら何でも聞くくらいにな。恐ろしいのは奴が、それ以前はただのメイジだったということだ。そんな男がそこまで成り上がったんだ。とにかくただ者ではない。そして、奴は街に『教団』を作り上げた」

「『教団』……」

アニエスはちらとホワイトの方を見ると、その言葉を口の中で噛み締めた。

「『教団』は表向きはただの慈善団体のようなものだ。街に花を植えるだの、飢えた者にパンを与えるだの。まあ、ここらじゃ全く見られない光景ではあるが」

「表向きってことは当然……」

「そう、裏の顔もある。『教団』は自分たちに従わない者や自分たちの不利益になる者を秘密裏に始末している。……そんな噂が一部では囁かれていた。とは言え、街には信者では無い者もいたし、旅人の往来も多い街だったから、それもあくまで噂の域を出なかった」

「だが、その顔から察するに噂だけ……ということは無さそうだな」  
「ああ、その通りだ。だが、俺がそれを知ったのは奴に……ダリウスに会ってからだった」

「会ったのか？その開祖って人物に？」

「会った、と言うよりも会わされたと言った方が正しいかも知れないな。奴は俺に色々と自分の理想について語った。そしてその後、俺にこう言った。『私の元でこの教えを広めて行かないか？』とな」  
「……お前は当然、そんな申し出を受けることはないだろうな」

アリエスがそう言うと、レイは無言で頷いた。

「俺は縛られるのは好きじゃないし、基本的には裸一貫でいたいかな。そんな教えを広めるなんて大義名分を持って旅をしたくは無かった。だから、その場で断ってやった。だが、問題はその後だ」  
「というところ？」

「奴はすぐに本性を現した。俺と別れてからそんなに時間も経たない内に、奴は刺客を放ち、俺を暗殺しようとした」

「……それはまた急な話だな」

「ああ、あまりに急過ぎて、逆に奴を陥れたい誰かの仕業か？と裏読みしたくらいだ。信者たちに囲まれ、身動きが取れなくなってた俺は、その時たまたま知り合った旅芸人一座の人間に助けられ、街の中を脱出することが出来た」

「なあ、何でお前は狙われたんだ？いくら自分たちに従わない者を殺すと言っても、あまりに大事過ぎやしないか？それに奴らに従わない人も街にはいたんだろ？……いち旅人のお前が何で殺されそうになったんだ？」

「……悪いがその理由を話すことは出来ない。お前まで巻き添えにしかねないからな」

「……どうやら軽い気持ちで聞いてはいけない理由があるらしいな？」

「ああ、そうだ」

「……分かった。理由は聞かない。私としても復讐という目的があるし、そちらを優先したいからな」

「そうしてくれるとこちらも余計な気を回さなくていいから助かる。」

……以来、俺は奴ら『教団』の連中に付け狙われている」

レイはそこまで話すと、懷から先程の錆びた十字架を取り出した。

「これはその時俺を殺そうとした暗殺者から奪ったものだ。奴ら『教団』のシンボルらしい」

「……そう言えばその十字架。先程は唐突だったから知らないものだと思っていたが、こうしてお前から話を聞き、落ち着いて見ると何処かで見たことがあるような気がする」

「『教団』の教えは時々、ここトリスティンやガリア何かにも来たりしているからな。何かの拍子に見たのかも知れん。最も、その大半はロマリア辺りが揉み消してるとは思うがな」

実は暗殺者も一緒にこちらへ来ているのだから。とレイは心の中で付け加えた。

アニエスは今までのレイの話を頭の中でまとめ、納得したように頷く。

「『教団』については大体分かった。問題はそれとドワイトがどう関係しているか、だ」

「このドワイトとかいう男はこの十字架を見て動揺した。奴らと関係がある可能性が高い」

「……それは少しこじ付け過ぎじゃないか？『教団』の人間が時々こちらへ来ているなら、ドワイトもそれで知ったのかも知れないし、関係があるとまで言い切るのは無理が無いかな？」

「もう1つ根拠がある。とは言っても、もうこの場にはいないがな」

「それは何だ？」

「カラスだ」

「カラス？」

「先程、ここから飛び去ったカラスが1羽いただろ？」

「ああ、急に鳴き出したから流石の私も少し肝を冷やした」

「……思い出したんだ。あのカラスが『教団』の中にいる奴の使い魔だってことをな」

「それは確かかなのか？そもそもそんなカラスの見分けなんかつくのか？」

「間違いない。そいつがご丁寧に自慢していた。『オニキスのように美しき我が使い魔』とな」

「だとしても……」

「……もういいい、アニー」

アニエスがレイに反論しようとした時、ドワイトが確かにそう言ったのを2人は聞いた。

アニエスはドワイトへ向き直る。

「ドワイト！」

「アニー、その男の言う通りだ。俺は連中を知っている。いや、奴らとつながるんでい」と言ってもいい」

ここまで長い言葉をこの男が喋るのは初めてであった。

アニエスも思わず押し黙ってしまう。

ドワイトは2人を見つめると、再びその口を重々しく開いた。

「話してやる……連中のことも、そして俺のことも」

## ラ・ロシエール周辺の森にて 2（後書き）

教団との出会いの話はまた追々…（またか！）

次話では執筆の手間を省くという意味でもドワイトの台詞の一部に

「」を付けずにやりますのでご了承ください。

### ラ・ロシエール周辺の森にて 3

今から10数年前。

ブルギツシユと名乗った男から炎の魔法を受けた俺は全身を焼かれ、既に死んでいてもおかしくない状況だった。

だが、神の奇跡か悪魔の拷問か、俺は辛うじて息を繋いでいた。

村が焼き尽くされ、生き残った者たちさえもが次々と殺されていく様を、俺はかすかな意識の中で見ていることしか出来なかった。

奴らは破壊の限りを尽くすと、ようやく満足したのか村を去って行った。

そうして、後に残ったのは炭クズと死体の山だった。

俺は動くことすら出来ず、気を失っては、激痛で目覚め、また気を失う。

この繰り返しだった。

全身を襲う激痛に気が狂いそうになりながら死を迎えるのを待っていた。

この時ばかりは俺は早く死にたいと願っていた。

それくらい存在していること自体が辛かった。

肉体的にも精神的にも。

そうして何時間経ったかは分からない。

何度目かの気絶から目を覚ますと、村に1人の男が来ていた。

男は黒いフードを被り、ブツブツと何かを呟きながら村の中を散策しているようだった。

男は俺を発見するなり、すぐに駆け寄って来た。

そして、懷から取り出した薬を飲ませてくれた。

痛む喉で無理に薬を飲み込むと、途端に頭がボーッととして、体が宙

に浮いたみたいに軽くなった。

気持ち良くなつて、全身の痛みも嘘のように治まっていた。まるで天国にでも行つてしまったみたいだったよ。

何か特別製の薬らしく、傷口に効果はないものの痛みを最大限に和らげてくれるらしい。

痛みが消え、安堵した俺を確認すると男は自らをザッパスと名乗った。

ロバ・アル・カリイエからやって来た修道士らしく、自分たちの教えを広めに来ていたらしい。

先程の散策は、死んで行つた村の人の為に黙祷を捧げていたのだと俺に言つた。

俺は治療の為、体を浮かす魔法をかけられた後、彼に何処かへ連れて行かれた。

どうやらそこは、彼らの教えを普及させようとこちらへ来た修道士たちの隠れ家らしい。

中には他にも数名、似たような格好の者がいた。

そこで俺は治療を受けたが、完全に回復するのは不可能だと言われた。

俺はその言葉で悲嘆にくれたが、体を動かすことなら出来るかも知れないと言われ、それに賭けることにした。

定期的な例の薬を貰つて痛みを和らげながら俺は何ヶ月もベッドの上で過ごした。

そうしてようやく立つて歩くことが出来るようになったのは村が襲われてから1年以上も経つてからだ。

これでも恐らく奇跡的な出来事なんだろうな。

俺はあの時、既に死んでいたも同然の状態だったのだから。

自分の体のことがある程度終わつたら、俺の胸中は奴らへの復讐で

いっぱいになっていた。

毎夜見る夢は村が襲われた時のものだった。

その時その時で細部は異なっていたが、大筋は大体同じ。

夢の中じゃアニーは何度も殺されていた。

俺はその度にまともな声も出ないこの喉から絶叫を吐き出していた。  
夢を見る度に俺は考えていた。

どうしてこんなに同じ夢を繰り返すのか。

どうして俺だけが生き残ってしまったのか。

そうして、1つの結論へと至った。

俺が生き残ったのは、奴ら……村を襲った連中に復讐する為。  
何度も同じ夢を見るのは、その復讐を忘れさせない為だとな。

ある日、俺はザッパスへその旨を打ち明けた。

彼は反対すると思った。

彼らの教えに背くものだと思ったからな。

それでも打ち明けたのは、俺の覚悟を誰かに聞いて貰いたかったからだ。

例え反対されても、俺は復讐を成し遂げる。

志半ばに倒れたとしても、最後の1秒まで奴らへ刃を突き立てることを諦めないとな。

ところが、ザッパスは俺の話を聞いてこう言ったのさ。

「手伝おう」と。

俺はキョトンとした。

あの時の俺はきつと間抜けな顔をしていたに違いない。

まあ、もつともその時から俺は全身包帯姿で、そんな表情は他の奴らからも見られなかったと思うがな。



ザッパスは俺の復讐に協力してくれると約束した。

俺は彼に聞いた。

「人を殺めるのはあなたたちの神の教えに背くのではないか？」と。そうしたらザッパスはこう言った。

「人を殺すような者はこの地上のあらゆる存在よりも下劣な存在。寧ろ殺すことこそがその者に対する祝福なのだ」と。

俺は最高だと思ったね。

人を殺すことを下劣と言いながら、人を殺した者は殺すべきだと。

矛盾しているが、何て素敵な神様だとその時の俺は思った。

ああ、今も思っているがね。

始祖ブリミル？あんなのはダメだ。

綺麗事じゃあ、誰も救えないということは俺が身を以って知ったからな。

ザッパスはとても協力的だった。

俺みたいな平民に剣を買い与えてくれ、更に魔法に関する知識まで教えてくれたからな。

もっとも、魔法についてはよくは分からなかったが。

体は万全ではなかった。

立って歩けるようになったとは言え、傷は完治していないのだから当たり前だ。

少しの運動で体は激痛を訴えた。

下手すれば、ちょっと走っただけで2日は寝込む羽目になるくらいに俺の体は弱り果てていた。

そんな時、ザッパスは俺にあの薬を与えてくれた。

あの薬さえあればどんなに体中が悲鳴を上げようと、俺は通常通り

……いや、通常以上に動くことが出来る。

俺はいつしか薬に依存していた。

それでも、ザッパスは嫌な顔1つせず俺へ薬を与えてくれた。

神の使いとは彼らのことを言っただと俺は知ったよ。

やがて、俺は一国の兵士並みには剣を使えるようになった。  
だが、それだけじゃメイジ相手には心細い。

相手は極悪非道なメイジなのだから、それだけじゃ勝てない。  
いや、殺せない。

そんな時、ザッパスは俺に十字架をくれた。

何でも、彼らが仕える『教団』のシンボルらしい。

マジックアイテムでもあるらしく、これを持っていると魔法のダメージを抑えてくれるそうだ。

彼らの神の祝福を受けた十字架だから大事にしろと俺は言われた。

俺は喜んだ。

ようやく彼らと本当の意味で仲間になれたと思ったからな。

そうして、俺は奴らへの復讐を開始した。

だが、いち平民の俺が仮にも貴族である連中の居所を掴むなんて、  
正に雲を掴むような話だった。

王国に忍び込んで、奴らの名簿でも奪うか？

いや、俺は“旋風のトラッシュ”でも、今で言う“土くれのフーケ”  
でも無いからそれは無理だ。

そもそも、王国に奴らの名簿があること自体が確定的なことでは無  
かったからな。

仕方なく、自分の足で探すことにした。

だが、この見てくれじゃ街の中も堂々と歩けない。

人目を出来得る限り避けなきゃならない。

正に日陰者だったよ。

おかげで人に話を聞くことすら出来ない。

ザッパスがいなければ、俺は生きてることさえ難しかっただろう。

彼は独自に調べてくれると約束してくれた。

本当に彼には感謝してもし足りないくらいだ。

それから10年以上、進展の無いまま時は流れた。

所詮、いち平民じゃ……しかもこんな見てくれじゃ連中の中のただの1人さえ知ることとも出来ないということだ。

現実の高い高い壁にぶち当たり、俺は途方に暮れていたよ。

そんなある日、俺は不意にブルギツシュ・デ・アブラーという名前を思い出した。

それは俺を焼いた奴の名前だった。

何でそんな大事なことを忘れていたのか、俺には分からなかった。年々物忘れが酷くなって来ていることと関係があるのだろうか？と俺は思ったが、そんなことはどうでもいい。

物忘れにしても、思い出そうとすれば思い出すことは出来るのだから特に気にはしていなかったしな。

俺は思い出した名前をザッパスに告げた。

そうしたら、彼はすぐにその男を探し出した。

奴は……ブルギツシュ・デ・アブラーは何時の間にか何処かの領主になっていた。

村を焼き、皆を殺した極悪人が、まるで聖人君子のように素晴らしい領主様と称えられているんだ。

俺は激しい怒りを覚えた。

それは、俺が復讐を誓ったあの頃と同じような……久しく忘れていた感情だった。

ザッパスは言った。

「長かったです、ようやくその時が来ました」と。

俺も頷いた。

彼は俺にあの薬を再び与えてくれた。

今度はより強力な特別製で、活力が漲るんだと。

有難くそれを受け取ると、俺は躊躇わずにそれを飲み干した。  
そして、素人手入れが祟って錆び付いちまった剣を手にとって無我  
夢中で飛び出していた。

気が付いた時には、奴が無様な姿で俺に命乞いをしていた。  
俺は奴の命乞いなんぞに耳を貸す気は毛頭無かった。

奴らだってそうだったんだ、俺が聞いてやる義理も糞もあったもん  
じゃないからな。

俺は奴の首を刎ねてやったよ。  
錆び付いた剣でもあんなに人の首は綺麗に飛ばせるんだな。  
俺は歓喜と興奮に打ち震えていた。

……だが、それからよく覚えていない。  
再び気が付いた時には、アニー……お前と剣を交えていた。  
俺はお前を殺そうとしていた。  
本気で。

俺は怖くなってその場から逃げた。  
とにかく走った。  
体中の痛みさえ気にならないくらいに。

だが、痛みはしつこく俺の限界を知らせて来た。  
やがて動けなくなった俺は、地面の上でみつともなく倒れ込んで動  
けなくなっていた。

このままだと、俺は追って来たアニーたちに殺される。  
それは嫌だ。

殺されるにしても、誤解されたままは嫌だ。  
そう思った時、彼に予備として貰ったあの薬の存在に気が付いた。  
俺はすぐにそれを飲み、また走り出した。

「……そして、今ここでお前たちと話  
していい」

ドワイトの長い話が終わる。

声を出すのが辛いのか、ただたどしい喋りで必要以上に時間を掛けていたが、レイもアニエスも彼の言葉を一言一句逃さぬよう、真剣に聞き耳を立てていた。

話を終えたドワイトは、疲れたのか再びぐったりと頂垂れていた。アニエスは無言で彼の元へ行くと、縛っている縄を解こうとした。レイは冷静にそれを止めようとする。

「アニエス、縄を解くのはまだ早い。2度も襲われたことを忘れたのか？」

「しかし、今のドワイトに敵意は無い！」

「そいつの言葉を思い出せ、奴はこう言った。『気が付いたらお前を殺そうとしていた』と」

「……！」

「……頭は冷えたか？」

「すまない……。フツ、やはり私はダメだな。知り合い……。それも同じ村の者だと思うと、つい警戒が緩んでしまう。普段ならこんなミスを犯そうとは思えないんだがな」

アニエスは自嘲気味にそう言うと、ドワイトから離れた。

「……しかし、どういうことだ？今のドワイトには確かに敵意は無い。それに先程の時点で自分を追っているのが我々だということも分かっていた筈だ。なら、あんな奇襲みたいなことをするのはおかしい」

「奴が服用したという薬が怪しいな」

「薬……特別製とか言っていたアレか？」

「ああ、どうも奴が記憶を混濁させていることと奴が服用している薬には何か関係があるみたいだ」

レイはドワイトに近寄った。

ドワイトは相変わらずレイには警戒心をあらわにしている。

「……何”た”？」

「先程話の中に出て来た薬は今持っているか？」

「……予”備”に”1”つ」

「それをこちらに渡してくれないか？」

「……………」

ドワイトは無言で視線を自身の腰の辺りにやる。

そこには、濃い紫色の何かが入った小瓶が見えた。

レイはそれをドワイトの腰から取り上げ、蓋を開ける。

そして、小瓶の中身に鼻を近付けた。

「……………！！」

レイは思わず咳き込み、小瓶を顔から遠ざけた。

アニエスが何事かと声を掛ける。

「どうした！？」

「これは……………」

レイはアニエスの方を振り返る。

「これは禁制の麻薬だ。ロバ・アル・カリイ工製のな」

「麻薬！？」

「服用すれば、脳が破壊され健忘症に陥る……………なるほどな、これで

奴の行動に納得がいった」

「そんなものが……」

「ここいらじゃまず手に入らないものだからな。ロバ・アル・カリイエでも公認されているわけではないが、平民でも服用している者がいる。俺の知り合いもこれを持っていたしな。少量ならそんなすぐに影響が出るわけでも無いらしいが、これだけ純度の高いものを多量に摂取すれば自我が保てなくなっても不思議ではない」

「ドワイト……」

アニエスはドワイトの名を呟くと、そのまま絶句する。

ドワイトはレイの言葉を信じたくないといった感じで頭を振っていた。

「そ”ん”な”筈”は”無”い”！そ”ん”な”……」

レイはドワイトに訊ねた。

「そのザッパスという男は今何処にいる？さっきの話から察するに、お前は知っている筈だ」

「……そ”れ”は”言”え”ん”。俺”は”恩”人”は”売”ら”な”い”」

「例の隠れ家とかいう所か？」

「言”え”な”い”と”言”っ”て”い”る”！」

「そうなんだな？」

「く”と”い”！」

歯を剥き出しにしながらドワイトはレイを睨み付けた。

レイもじつとドワイトの目を見つめた。

お互い、無言のまま見つめ合っていると、突然ドワイトが咳き込んだ。



「ゴフツゴフツゴフツ、う”っ”!?”」

ドワイトは思わず顔を下に向けると、地面へ大量の血を吐いた。それを見て、アニエスが慌てて駆け寄った。

「ドワイト!!」

「ゴフツゴフツ、来”る”な”、ア”二”ー”……」

ドワイトはより一層苦しそうな声で言った。

そんなドワイトを見てレイは目を瞑り、首を振った。

「……あんだ、そのザッパスという男にいいように使われているだけだぞ」

「何”を”!?”っ”、ゴフツゴフツ」

「あんだ、さつきこう言ってたな?『薬に依存している』と。確かにそれは麻薬だから依存性が高い。その効用で体の痛み程度は簡単に忘れられるだろう。だが、その代わりに薬はあんだの肉体と精神を本当の意味で破壊する。あんな純度の高いものを飲めば尚更だ。それでもいいのか?」

「う”う”っ”、ゴフツゴフツ」

「そんな危険な薬と知りながらも与え続けたのは誰だ?そのザッパスって男だろ?そんなものを平気で与えるような奴をまだ庇う気が?」

「ゴフツゴフツ」

「あんたは10数年前に守ったアニエスを自分の手で殺す気か?」

「!!!ア”二”ー”……」

その名を聞き、ドワイトは思わずアニエスの顔を見た。

アニエスは心配そうな顔でドワイトを見ている。

彼女の顔を暫く見つめるドワイトの脳裏には途切れ途切れながらも過去の記憶が浮かんでくる。

すると、観念したようにドワイトは目を閉じた。

「……この”先”を”暫”く”行”く”と”、傷”の”入”つ”た”木”か”何”本”か”立”つ”て”い”る”場”所”か”あ”る”……。それ”を”辿”っ”て”い”け”は”彼”ら”の”隠”れ”家”に”行”け”る”……。あ”ま”り”目”立”た”な”い”傷”た”か”ら”一”目”て”は”気”付”か”な”い”た”ろ”う”か”、注”意”し”て”見”れ”は”分”か”る”」  
「そうか、分かった」

「勘”違”い”す”る”な”……俺”は”……ア”ニ”ー”と”の”思”い”出”を”守”り”た”い”……そ”れ”た”け”た”」

レイはいつものようにフツと笑って見せると、ドワイトを縛る縄をナイフで切断する。

縄は地面に落ち、ドワイトの拘束が解かれる。

ドワイトはよるめきながらも、自分が縛り付けられていた木を支えに立ち上がった。

そして、レイを見る。

「……い”い”の”か”？お”前”を”後”ろ”か”ら”襲”う”か”も”知”れ”ん”そ”？」

「今のお前じゃ俺を殺せない。アニエスもな」

「そ”う”か”……」

ドワイトは弱々しく笑うと、木に体重を預けて寄りかかる。

側には相変わらず心配そうな顔をしたアニエスがドワイトの体を支えている。

レイはドワイトに背を向けると、先程教えられた場所へ向かって歩

こうとする。

すると、アニエスがレイの背中へ向けて言った。

「……すまん、私はここでドワイトを見ている。レイ、お前とは一緒に行けん」

「……それもいいだろう。そもそも奴に会いに行くのは俺の勝手みたいなものだ。お前が無理について来る必要も無い」

「すまん。そう言ってくれと助かる」

「ア”ニ”ー”……」

ドワイトはアニエスの頬を撫でた。

「……す”ま”ん”な”、せ”っ”か”く”の”再会か”こ”んな”ん”て”」

「どんな再会だっでもいいさ。死んだものと思っていた知り合いとまた出会ったんだ。これ以上は何も望まん」

「ア”ニ”ー”、お”前”は”変”わ”ら”ない”な”」

そう言うと、ドワイトは今までにない程優しい笑顔を浮かべた。それを見て、アニエスも微笑む。

「ドワイトも変わってないさ」

郷愁に暮れる2人を背に、レイは何も言わずにその場を去って行った。

ドワイトに教えられた通りに歩くと、ようやく人為的につけられたであろう傷のある木を見つける。

それ程大きい傷では無く、確かに一目見ただけでは気付かないし、これが目印であるとも思えない。

他にも似たような傷のある木を確認すると、その木を辿って行く。

すると、やがて1軒のログハウスを発見する。

森の奥にひっそりと佇んでおり、正に隠れ家という言葉がぴったりであった。

レイは木々の中から、隠れ家の周辺に人がいないか神経を研ぎ澄まして気を探してみる。

すると、誰かが1人隠れ家の中にいることが分かった。

更に神経を研ぎ澄ましてみるが、この周辺にも他に人が潜んでいる様子は無いようだ。

レイは警戒しながら隠れ家へと近付き、入り口の前に立つ。

そして、剣を何時でも抜けるように構えながら、入り口の扉を開き中へ入った。

すると、中には黒いローブを被った男が、まるでこちらを待ち構えていたかのように立っていた。

「……よく来ましたね。お待ちしておりましたよレイさん」

「お前がザッパスか？」

「ええ、その通りです。……立ち話も何ですし、中へどうぞ」

そう言うときザッパスは頭に被った黒いローブを取った。

中からは白髪混じりの中年の男が現れる。

一見すると誠実そうな聖職者らしい顔つきである。

ザッパスはレイを中へ招き入れた。

レイは何時でも攻撃態勢に移れるようにしながら、彼の招待を受けることにした。

ザッパスへ連れられ、中を見ると隠れ家内は見た目通り狭く、玄関

らしき所を抜けるとすぐにリビングへと出て、近くに寝室らしき部屋が確認出来た。

テーブルの上にはロバ・アル・カリイエでよく飲まれている緑茶が2つ置かれている。

「あなたが来ると思って用意したのですが……冷めてしまいましたね」

「……………」

レイは無言でザッパスの一挙一動を観察している。

何かこちらへ危害を加えようと動いた瞬間に、レイの剣がザッパスの首を刎ねられるようにレイは身構えていた。

「……そう怖い顔をしないで下さい。私は杖を持っていますよ？」

ザッパスは両手をレイへ見せて、自分が無力であることをアピールした。

しかし、レイはそれでも油断はせずにザッパスを観察し続ける。

ザッパスはやれやれといった感じで椅子に座った。

そして、レイにも座るように手で促す。

レイは警戒を怠らずに席へと着いた。

ザッパスは冷めた緑茶を一口啜る。

「……やはり、このお茶は美味しいですね。冷めてもその美味しさは失われない」

「俺はお前とお茶について話に来たんじゃない。いいから、本題へ入れ」

「これは手厳しい……」

ザッパスはそう言うと、人当たりのいい顔で笑ってみせる。

「彼のことを聞きたいのでしょうか？」

「それも理由の1つだ」

「いいでしょう。教えてさしあげます。『求める者には与えよ』。

これは我々の神のお言葉です。その相手が例え敵であっても」

「それはご立派な言葉だな」

レイは不愉快そうな顔を隠さずにそう言った。

ザッパスは気にする素振りを見せずに話し始めた。

「彼……ドワイトと出会ったのは10数年前のことです。恐らく詳しい経緯は彼から聞いているのでしようから大筋は省きますが、私はあの村で死に瀕した彼を見てこれは運命だと感じました」

「……………」

「当時、我々『教団』は密かにとある薬を開発していました。それはあの地方で採取されるとある実を粉末状にしたものなのですがね。これには人を一時的に神の地へ近付かせる効果があることが分かったんですよ」

「……………」

「しかし、これを使用した者はその代償として心身ともに危険に晒してしまうということが動物実験で分かりましてね。それで人ではどうなるのか、実験のサンプルを探していたんですよ」

「……………」

「そんな時、たまたまこの地を訪れていた私が調度減ばされた村を発見しましてね……心躍りました。神のお導きを目の当たりに出来たのですから」

「……………」

「そこで神の地へ旅立つ寸前の者はいないかと探していたのですが……そこに偶然彼が居合わせましてね。迷わずにあの薬を使いましたよ」

「……………」  
「そうしたら、彼は痛みも忘れ、まるで神の地へ行つたかのように安らかな顔をしたのです。薬は人にもちゃんと効果があるのだと分かり、私は神に感謝しましたよ」

「……………」  
「それから彼へは薬を与え続けました。彼は見る見る内に健やかになり、ついには剣さえも触れるようになったのです。もう少しで神の地へ旅立ちそうだった彼がですよ？これは素晴らしいことです。人には動物よりも強く依存性が現れるということも分かりましたしね」

「……………」  
「彼はいい実験のサンプルになつてもらいました……。10数年与え続けても健在であり続けられることを身を以って証明してくれましたからね」

「……………」  
「……あの薬を流行らせたのはお前たちか？」  
「ええ、そうですよ。神の地へ生きながら到達させる……………」この偉業を成し遂げたのですから、早速広めないと思ひましてね」

「何故、奴にあんな純度の高い薬を与えた？」

「実験データが欲しかったんですよ。あれだけの純度での生成を達成出来たのはつい最近のことなのでしてね、どうも」

「お前は人を何だと思っている？」

「尊い、掛け替えのないものだと思つておりますよ」

抜け抜けとザッパスは言った。

「しかし、やはりあの純度のものだと人体への影響も大きい……。これは実用に適さないことが分かりました。これも彼のおかげで分かったことです」

「奴はどうなる？どうせずっと監視していたんだから大体分かるんだろ？」

レイは室内に置かれた鳥籠を睨み付けた。  
そこにはオニキスのように美しい黒色をしたカラスがこちらを見つめていた。

ザッパスはニッコリと笑いながら言った。

「残念ですがそろそろ神の地へ行くと思いますよ。心も体も……」

.....

「ドワイト？」

先程からずっと宙を見つめたまま動かなくなったドワイトへアニエスは声を掛けた。

しかし、何も反応がない。

「どうしたんだホワイト……」

アニエスがドワイトの肩へ手を伸ばそうとしたその時、ドワイトは絶叫した。

[illegible]

「ド、ドワイト!？」

戸惑うアニエスヘドワイトはすぐに顔を向けた。  
そしてアニエスは見てしまった。



殺意に満ち溢れ、今すぐにも自分を殺そうとしているデジャットの  
目を。

ザッパスは一通り話し終わると、再び緑茶を手にとって一口啜った。

「……ふう。そうそう、そのお茶、遠慮しないで飲んで下さいよ。

私独自に茶葉をブレンドした特別なものなんですよ。味も香りも今までで一番の出来です」

「……………」

「……もしかして、毒が入っている。とか思っていますか？」

ザッパスが困ったように笑ってみせると、レイはそれを一瞥してから視線を逸らす。

緑茶には一切、手をつけようとしなかった。

「……仕方が無いですね。無理強いはいしないでお願いします」

そう言つて、ザッパスは残念そうに首を振ると緑茶を啜った。

そして、何かを思い出したかのようにレイの顔を伺った。

「そう言えばお連れの方はどうしました？」

「連れ……ああ、あいつのことか」

「まさかとは思いますが、彼の側にいるのでは……。おお、それはとても危険です。彼の心と体は神の地へ旅立ち、その亡骸は最早人あらざる者へと変わっているでしょう。……また尊い命が失われてしまいました」

ザッパスはわざとらしくそう言つと十字を切った。

しかし、レイはそれを見て馬鹿にしたようにフツと笑ってみせる。レイの態度にザッパスは「おや？」という顔をした。

「お連れの方が心配では無いのですか？」

「心配？フン、笑わせるな。あいつが……アニエスはそう簡単に殺されるような人間じゃない」

「凄い自信ですね……何か根拠でもあるのですか？」

「俺は人を見る目だけはあるつもりだ。でなきゃ今まで生き残ってはいない。アニエスは出来る人間だ。俺なんかよりもずっと……な」

「カ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

「ぐっ……！！」

ドワイトはアニエスに馬乗りになり、彼女の細い首を全力で絞め上げていた。

アニエスを殺そうとするドワイトの目は血走り、カ一杯歯を食い縛った口からは唾液が止め処なく溢れている。

「離”せ”っ”！！」

アニエスは近くに落ちていた石を掴み、それでドワイトの即頭部を殴りつけた。

すると、首を絞める力がフツと弱くなる。

その瞬間を見計らってアニエスはドワイトの腕を取り、彼の体ごと横へ払いのけた。

そして、すぐに立ち上がると咄嗟に後方へ飛び上がり、ドワイトと距離を取った。

左手で絞められた首を擦りながら、もう片方の手を手を剣の柄へと

持つて行くも、アニエスは目の前の状況に明らかに動揺していた。

「ドワイト……！？どうしたんだ一体！？」

「カ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

アニエスの問いに、ドワイトは獣じみた咆哮で返した。

とてもではないが、アニエスには今のドワイトが正気であるとは思えなかった。

それでも僅かな望みに掛けて、ドワイトへ呼び掛ける。

「ドワイト！私だ！アニエスだ！」

「カ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

ドワイトは再びアニエスに掴み掛かろうと飛び掛つて来る。

それを交わしながら、アニエスは尚も呼び掛けを続けた。

「ドワイト！！私はアニーだ！！お前の幼馴染でお転婆だったアニーだ！！！」

「ア”二”ー”……」

その言葉に僅かに反応を示すドワイトを見て、アニエスは頷く。

「そうだ！！私はアニーだ！！」

「ア”二”ー”……！！」

ドワイトはハッキリとアニエスの名前を呼ぶ。

「ドワイト！！」

「俺”を”……殺”せ”！！」

「……何を言うんだドワイト！？」

アニエスは驚いて言った。

ドワイトは頭を抱えながら唸るように言葉を続ける。

「俺”か”俺”て”無”く”な”る”前”に”……殺”し”て”く  
”れ””!!”」

「そんな!!」

「頼”む”!!俺”は”お”前”を”……ア”ニ”ー”を”殺”し  
”た”く”な”い”!!そ”れ”に”お”前”の”手”に”掛”か  
”つ”て”死”ね”る”な”ら”そ”れ”か”一”番”い”い”!

「自分は殺したくないのに、相手には殺させるのか!?矛盾しているぞ!!」

「す”ま”な”い”な”……」

ドワイトの顔から僅かに見える目は、アニエスには笑っているように見えた。

次の瞬間、ドワイトはアニエスへと飛び掛った。

アニエスは2、3度首を振ると、剣の柄をしっかりと握った。

「この……馬鹿野郎おおおおお!!!!」

アニエスはそう叫ぶと剣を抜き、自らも飛び出した。

そして、そのまますれ違いざまにドワイトの体を斬り捨てる。

ドワイトは力無くその場へうつ伏せに倒れ込んだ。

すぐに血の海が彼の周囲へ広がって行く。

アニエスは荒く呼吸をしながら、ゆっくりと振り返った。

「……ドワイト?」

「……………」

アニエスが呼び掛けても、ドワイトは一切返事をしようとはしなかった。

思わずアニエスは彼の元へと近付いた。

すると、僅かに体が動いていることに気が付く。

アニエスはうつ伏せになっているドワイトを仰向けに直すと、すぐに声を掛けた。

「ドワイト!!」

「ヒュー……ヒュー……」

変則的な呼吸が、彼が死の淵に立っていることを示していた。  
ドワイトは虚ろな瞳をアニエスへと移す。

「ヒュー……ヒュー……ア”ニ”ー”……」

「ドワイト……」

アニエスが今にも泣き出しそうな顔でそう呟くと、ドワイトは震える手で彼女の頬を撫でた。

アニエスはドワイトの手を優しく握る。

ドワイトは僅かに口の端を緩ませた。

「……ありがとう」

その言葉をハッキリとした口調と声で言うと、その直後にまるで憑きものが落ちたかのようにドワイトの全身から全ての力が抜けた。  
瞳孔は開き、変則的な呼吸音も完全に途絶える。

ドワイトの死を目の前で確認すると、一筋の雫がアニエスの頬を伝った。

「何がありがとうだ……馬鹿野郎……」

吐き捨てるようにそう言うと、アニエスはドワイトの手を握ったまま声も無く泣いた。

光も射さぬ森の奥深くで孤独に。

「……まあ、彼のことはもういいでしょう。他に何か聞きたいことはありますか？あるのでしょうか？でなければ私は会った瞬間に殺されていますからね」

ザッパスは笑みを絶やすことなく、相変わらずの丁寧口調でレイに向かって訊ねた。

レイは腕を組みながら、無言でザッパスの顔をじっと見つめている。少し間を空けてから、レイは口を開いた。

「聞きたいことなんて決まっているだろう？『教団』のことだ」

「我々の素晴らしさは以前、充分に説いたつもりだったのですが…

…」

「ああ、確かにお前らは素晴らしいよ。あまりに素晴らしいので、つい殺されそうになったがな」

レイは皮肉混じりにそう言った。

ザッパスは相変わらずニコニコと笑みを浮かべ、それを意にも介さなかった。

「死ぬのではなく、神の地への旅立ちです。恐れることなど何もありません。あるがまま受け入れるのです」

「……つまり、無抵抗で死ねたことか？それはとても素晴らしい神の教えだな」

「死ぬのではなく、神の地への旅立ちです」

「フン、お前らの神の戯言なんかどうでもいい……」

ザッパスがレイに諭すように繰り返すと、レイはそれを鼻で笑い、話を元に戻した。

「お前は確か、『教団』の選ばれし7人……要するに幹部だったよな？以前会った時にそう自称していたと俺は記憶しているが」

「ええ、確かに私は幹部の1人です。あの薬の研究、及び生成をしたことが認められ、『教団』を代表する7名の中に選ばさせて頂きました」

「ならば、話は早い。他の6人の情報を教えろ」

「一応、お聞きしますが、聞いてどうするのですか？」

「殺す」

レイはただ一言そう告げた。

それはシンプル且つ絶対的な決意である。

ザッパスはやれやれと首を振ってみせる。

「……求める者には与えよ、奪う者には死を。これが我々の神の御言葉です」

「随分と都合のいい神もいたものだ。俺は始祖ブリミルとやらもどうかと思っているが、お前らの神はもっと酷い」

「我らが神を愚弄なさいますか。実にあなたらしいです。しかし、それは間違いなのだと気付くべきですね」

「俺は俺のやることなすことが正しいとも合っているとも思っていないから、別に気付く必要は無いな」



ザッパスは「おおっ！」と声を上げ、祈るようなポーズを取った。

「神よ……この哀れな子羊に天罰と悔い改める機会をお与え下さい。いえ、どうせあなたのことだから既に天罰は下り続けているのでしよう。ならば早く悔い改めなさい！」

「ほう？よく知っているな。そう言えばここ最近、俺を殺すと襲つて来る奴がよく来ているなあ」

「やはり、我らの神は全てを見知っていて、あなたへ天罰をお与えになっていましたか」

「惚けるな。神じゃなくてお前の差し金だろ？目の下に蛇の入れ墨……あれは間違いなく『教団』の暗殺者だ。俺が何人始末したと思っ  
っている？」

「……なるほど。彼らを差し向けたのが私であると？」

「流石に全部が全部、お前の仕業だと思っ程俺も単純ではない。だが、その多くにお前が関与していたのは間違いない。違うか？」

「私は、穏健派ですよ？暗殺者を仕向けるなんて、とてもとても……」

……

首を振って白々しく否定の意を示すザッパスを見て、レイは大きく息を吐く。

目の前の男は暗殺者を仕向けたことは否定したが、『教団』に暗殺者がいることは否定しなかった。

しかも、それが当然といった様子で話している。

無論、この2人の間では既知のことであり、それがレイの命が『教団』に狙われる要因の1つでもあるのだが、それでもザッパスという男の本性が垣間見える瞬間でもあった。

「今思えば、あの時の暗殺者もお前の差し金だったか……」

「どうもあなたは私を勘違いしていらっしゃる。私は命が尊く掛け替えの無いものだということを知っています。それを失わせような

どと考えるわけがないじゃないですか」

「……どの口がそれを言いやがる。この外道が」

レイの口調は淡々としていたが、それでもそこには目の前の男に対する強い敵意が込められていた。

ザッパスは立ち上がると、そのまま玄関の方へと歩き出した。

「……話になりませんね。どうやらお帰り頂いた方がよろしいよう  
だ」

そう言つて、玄関の扉を開いた。

「さあ、出て行つて下さい。もうあなたと話すことはありません！」

「……なるほど、『教団』の幹部についての情報を教えられないから、適当な理由をつけて帰すつてところか」

レイは酷く冷めた目でザッパスを見ている。

「別に俺はお前が俺を殺そうとしたかなんてどうでもいい。俺が欲しいのは『教団』の情報だ。さあ、教えろ」

「お帰り下さい！」

「……話にならないのはこっちの台詞だな」

そう言つと、レイは背中中の剣を抜き、切っ先をザッパスへ向けた。

「煙に巻こうとしても無駄だ。知っている情報は全て話してもらつ。どんな手を使つてもな」

「フッフ、やはりこういうことになりますか……」

ザッパスは先程までとは打って変わって、下卑た笑みを浮かべた。

「我らの神に従わず、あまつさえには愚弄するような下郎は私自身の手で始末をつけましょう……」

そう言つて、杖を取り出そうとした瞬間、目の前にいた筈のレイが消えていた。

「!?」

「……………!!」

レイは一瞬で間合いを詰め、ザッパスの死角へと回り込んでいた。そして、そのまま彼の杖を持つ手を目掛けて躊躇無く振り抜いた。

「……………!!」

しかし、剣は何も無い宙を斬った。

ザッパスは笑いながら、レイの後ろに立っている。

「アースハンド!」

ザッパスがそう唱えると、土で出来た大きな手が床を突き破りレイの足をしっかりと掴んだ。

レイはその場から身動きが取れなくなる。

(どういう……ことだ?)

レイ程の人間が目測を誤るなどということは有り得ない。

それならば、ザッパスが何かの魔法を使ったというのが考えられる。しかし、魔法には杖と詠唱が必要である。

杖を取り出すのと同時に詠唱を終えていたとしても、レイの斬撃の

方が早かった筈である。

「フフフ、驚いていますね?」

レイが思案していると、ザッパスがニタニタと笑いながら見ている。

「恐らく私が何か魔法を使った。と思ったのかも知れませんが、私の魔法は今のですよ? 私は土のメイジなのでね」

「くっ……!」

「フフ、何の為にあなたをここへ招いたと思っっているんですか?」

「……やはり罠か」

「ええ、罠です。それもごく単純な、ね。でも、あなたなら掛かってくれると信じていましたよ。あなたは欲しいものの為ならどんな危険をも厭わない……そんな人だ」

「俺に何をした?」

「フフフ、これです」

そう言うと、ザッパスは懷から濃い紫色をした粉末状のものが入った小瓶を取り出した。

「事前にこれを燻した煙を充満させておいたのですよ。この隠れ家の中にね。通常なら直接吸い込むより効果は薄いのですが、純度の高いこれなら多少効果が続いていてもおかしくはないでしょう?」

「つまり、俺は軽い幻覚を見た、ということか」

「ええ。なるべく効果が出るようにここへ長居させようと、色々とお話もさせて頂きました。まあ、その殆どはあなたが知っても何にもならない情報なんですけどね」

「……お前もあの薬を吸っている筈だ」

「これを作ったのは私ですよ?それに常用している人間ならこのくらいですぐに影響が出たりはしません。かくいう私も愛用している

のですよ」

「……匂いで気付かれると思わなかったのか？」

「現にあなたは気付かなかったじゃないですか……まあ、その為に香りの強い緑茶を淹れておいたわけなんですがね。ちなみにあなたのそれには予想通り毒が入っていたんですが……まあ、そこまで単純な罠には流石に引っかけませんでしたね」

「……不覚を取ったな」

「自分のミスを素直に認める……フフ、あなたのそういうところは嫌いじゃないですよ」

ザッパスは笑みを浮かべながらレイに杖を向けた。

「さて、そろそろお話は終わりです。あなたも神の地へと旅立つ時が訪れました。それを受け入れなさい」

## ラ・ロシエール周辺の森にて 6 (前書き)

今回でアニメス編は終了です。

「さて、あなたはもうすぐ神の下へと旅立つわけですが……最期に何か言いたいことはありますか？」

さも自分は慈悲深い人間である、という顔でザッパスが訊ねると、レイは虫唾が走るのを隠さずに言った。

「何か勘違いしていないか？確かに足は動かないが、それ以外は動く。お前を斬り伏せることだって不可能じゃあない」

「あなたこそお忘れですか？あなたは今、軽い幻惑状態にある。今話している私がこの場所に立っているとは限らないですよ。それに……」

ザッパスは話すのを中断すると、軽く詠唱を始める。

それを終えると同時に杖を振ると、今度は土礫が床を突き破って浮かび上がった。

「わざわざ私があなたの間合いに入る理由もない。安全な場所からじわじわとなぶり殺しにしてさしあげますよ。おっと！私としたことが口が滑りましたね！」

ザッパスは陰惨な笑みを浮かべながら、まるで虫けらを見るような目でレイを見下した。

「でも、安心して下さい。当たり所が悪ければ……いえ、この場合は良ければ、でしょうか？苦しむことなくすぐに神の地へと旅立てますよ」

「下衆野郎が……悪いが、お前の悪趣味に付き合うつもりは無い」

そう吐き捨てるレイは剣の柄を持ち直し、まるで槍を投げるように構えてから目を閉じた。  
訝しげにその様子を見ていたザッパスは思わずレイに訊ねる。

「何の真似です？」

「見て分らないか？」

「まさか、それを私に投げつける……なんて愚かなことをお考えで？」

「そのつもりだ」

「何故目を閉じているのです？」

「……いくら相手の気を察知出来ると言っても、実際に目で見てみると、どうしても目に頼ってしまう。その目が役に立たないと分かったなら使わなければいい。そう思っただけのことだ」

「絵空事を……！」

憐れみを通り越して怒りを顕わにしたザッパスが杖をレイへと向ける。

「ブレット！」

ザッパスの周囲に浮かんでいた土礫が弾丸のような速度でレイへと向かうと、容赦なく彼の体を打ち付けた。

レイは逃げる素振りさえ見せず、先程の構えのまま目を閉じてその場にじっとしている。

やがて土礫が通り過ぎた頃には、彼の体はボロボロとなっていた。土礫が直撃した箇所が見る見る内に赤黒く変色し、箇所によっては出血もしている。

それを見たザッパスが高笑いをした。



「どうしました！？何も出来ないではないですか！？」  
「……………」

ザッパスは無言のレイを一瞥した後、フンと鼻を鳴らすと再び周囲に土礫が浮かび上がらせる。

ザッパスの表情は先程までとは打って変わって厳しいものとなっていた。

「……気が変わりました。とつとと神の……いや、地獄へ行っ下さい」

そう言い捨てると、ザッパスは再び杖をレイへ向ける。

「ブレッ……………！！」

「そこだ！！」

その刹那、レイはカットと目を見開くと、素早い動きで剣を思い切り投げ放った。

剣は正確にザッパスの中心を捉え、まるで閃光のような速度で彼の胸を貫く。

そして、勢いそのままにザッパスの体ごと壁へ突き刺さった。

ザッパスは壁に張り付けにされた形となる。

「力…………ハア…………？」

ザッパスは自分の身に何が起きたのかすぐには分からなかった。気が付いた時には口から大量の血を吐き出し、体中が痙攣を始めていた。

「ぐ、ぐううう？な…………ん、だと？」

「フツ、当たったか」

「あの状態で私に当てるなど……き、貴様は人間か……？」

「生憎、まだ人間は止めていないつもりだ」

「ゴフツ、な、何故私の位置をこうも正確に……？」

「お前がこの隠れ家内に充満させていた薬のおかげで、いつも以上に集中することが出来た。まあ、また使おうなどとは微塵も思わんがな」

「ゴファツ、くつ、そうか、わ、私は自ら墓穴を掘ったというわけか……。ガハア、さ、策士策におぼれるとは、このこと……ゴボツ！……だな」

「死ぬ前にさっきの質問に答えて貰おうか？」

「……いい、だろう。俺を殺した以上、どうせ貴様はすぐに地獄へ行くことになる……ハハハハ！ゴボア！……こっちへ来い」

レイは言われた通りにザッパスの元へと歩いて行く。

無論、警戒はいっさい怠らず、相手が何か仕掛けてこようとしたら、すぐに対処出来るように懐の隠しナイフへと手を伸ばしながら。

そうしてレイがザッパスの目の前に立つと、彼はニヤリと口の端を吊り上げた。

「ロマリアの……教会……」

今にも消え入りそうな声でそう呟くと、次の瞬間、ザッパスはがっくりとうなだれた。

全身から力が抜け、手足がだらしなく投げ出されている。

レイは手をザッパスの口と鼻に翳し、彼の呼吸が完全に止まっていることを確認する。

そして次に首に手をやって脈拍を確認し、完全に死んだことを確信すると、彼に突き刺さっていた剣を躊躇なく抜いた。

抜いた箇所からは血がまるで泉のように湧き出る。

レイは剣に着いた血をある程度振り払うと、鞘に収め、室内を照らしていたランプを手を取った。  
そして、それを地面へ叩き付けると、火が燃え上がり、徐々に広がっていく。

このままならば、木材で出来た隠れ家はすぐに何もかもが焼き尽くされてしまうだろう。

焦げた臭いの中で、レイは改めてザッパスの死体を見た。

「……神だの何だの言っても、所詮は貴様も平民を嘗めた一メイジに過ぎなかった。それだけのことだ」

レイはそう呟くと、さっと踵を返して隠れ家を後にした。

「あれは……？」

アニエスは、遠くの方が突如ぼんやりと明るくなったのに気が付くと、そちらの方に顔を向けた。

それが火事だと分かると、一瞬過去のトラウマが彼女の頭を過ぎるが、頭を振ってそれを払拭した。

そして、火事の原因となりうるものにすぐに思い当たる。

「……まさか、レイか!？」

アニエスが火事の方へ行こうとすると、その方角から人が歩いて来るのが見えた。

細身の長身、そして大きな剣を背負ったシルエットを見て、アニエ

スはその人物の正体にすぐに気が付く。

「レイ!!」

遠目からでも相手の顔が認識出来る距離まで近付いて来ると、その人物は紛れもなくレイであった。

レイはフツと笑う。

「どうした？俺の心配でもしてくれたのか？」

「まさか……。お前が簡単に殺られるような人間じゃないことくらい分かるさ」

「そうか、なら俺の思い上がりだったな」

「まっただ」

アニエスは呆れたように笑ってみせた。

2人はその場から別の場所へドワイトの死体ごと移動した。

アニエスは土の柔らかい場所を探し、見つけるとそこを掘った。

そして、ある程度の深さまで掘り進めると、ドワイトの死体をその中に入れる。

「……本当は故郷の村に帰してやるのが一番いいんだろうがな」

アニエスは無念そうに呟いた。

もしかしたらドワイトを救う方法があったかも知れない。

こんな結末にならなかったかも知れない。

そう思っでは1つ1つ後悔の念に駆られる。

「……未だに復讐に囚われている私も最期はこうなってしまうんだ  
ろっか？」

誰に言うでもなくアニエスは呟いた。

決して答えが欲しいわけではない。

例え答えがあり、それが今の自分と正反対の答えだったとしても、  
それで10数年も復讐に拘ってきた自分を変えることなどおよそ無理  
だろう。

しかし、それでも問わずにはいらなかった。

「自分を見失ってしまえば……な」

その様子を少し離れた場所から見ていたレイが言った。

アニエスはレイの顔を見ずに聞き返す。

「自分を……見失う？」

「……そのドワイトという男は、『教団』の介入によって自分を見  
失っていた。もし、奴が正常だったなら、復讐に囚われていたとし  
ても、お前に剣を向けたりはしなかった筈だ」

「……………」

「俺は復讐を否定しない。寧ろそれは成し遂げるべきとさえ思っ  
ている。だが、関係無い人間……それも親しかった者を巻き込んでま  
で行うのは復讐ではない。ただの殺戮だ」

「レイ……………」

「人の心を失ってしまえば、復讐はただの殺戮となるだけだ。復讐  
は人間だけが行えるもの。獣は自分の親や住処を奪われても、奪つ  
た相手に復讐など考えない。仮に奪った相手を殺すことがあったと  
しても、それは復讐じゃない。自己防衛か狩りか、そのどっちかで  
しかない。人の心が介在しない復讐はそれと同じだ。……お前はど

うなんだアニエス？」

「私……か？」

「今でもまだ人の心を持っているか？」

「さあ、な。だが……」

アニエスはドワイトの亡骸をじっと見つめる。

「こうして物言わぬ死体となったドワイトを見て、悔しくて悲しくて泣きそうになっている自分はまだ人間であると信じたいな」

「なら、それを忘れないことだ。それさえ忘れなければ復讐を終えてもお前は人間でいられる。例えば後悔しようとな」

そう言うと、レイはアニエスに背を向け、静かにその場を立ち去った。

レイの姿が見えなくなるなり、アニエスは慟哭とも怒号ともつかぬ声を上げた。

その声は薄暗い森の中に響き渡った。

数分後、離れた場所で佇んでいたレイの元にアニエスがやって来た。

その表情は出会った頃と同じで、凛々しくそして気持ちの良い笑顔であった。

「……もついいのか？」

「ああ、心配かけたな」

「お前がここで簡単に挫けるような奴ではないことくらい分かったさ」

「……なるほど、先程のお返しという奴か」

アニエスがニヤリと笑って見せると、レイもフツと笑う。  
二人はその後、特に言葉を交わさずに薄暗い森を後にした。  
会話こそ無いが、二人の表情は決して暗くはなかった。  
やがて森を抜け、街道へと出るとアニエスが口を開いた。

「……………ここでお別れだな」

「ああ」

元々2人はブルギツシュへの復讐の為に手を組んだに過ぎない。  
それもドワイトが既に果たしていた。  
それならば、これ以上2人が一緒にいる意味は無かった。

「レイ」

「ん？」

アニエスはレイを呼び止めると、右手を前に差し出した。  
レイがその手を取ると、アニエスは笑顔で言った。

「お前とはまた何処かで逢えるような、そんな気がするよ」

「フツ、そうか。その時は復讐とは関係なく逢いたいものだな」

「ハハハ、そうだな」

そうして握手を解くと、レイはロマリア方面へ、アニエスはそのま  
まトリステイン方面へと向かって歩いて行った。

あの森にいる時は時間の感覚が薄れていたが、そろそろ夕方に差し  
迫る時間でオレンジ色の空に日が沈みかけていた。

斜陽の中、2人の影はどんどん離れて行き、やがてお互い見えなく  
なっていた。

それでも、2人の心の中には互いの存在がずっと生き続けていた。

やがて再会するその日までと。

そして、その日はそう遠くないのであった。



## ラ・ロシエール周辺の森にて 6（後書き）

ということで、無事終了となりました。

前回から間が空いてしまい申し訳ありませんでした。

アニエスと再会する話はまた後のお楽しみということでした。

それでは、次の話もご期待下さい。

## 少年と名前

少年は何も覚えていなかった。

自分の親の顔さえも記憶の中には無い。

物心ついた時には、貴族に売られる奴隷として鎖に繋がれて各地を転々としていた。

単純な労働力として、または慰みものとして、貴族たちは奴隷を奴隷売りから買い、自分たちの元に置いていた。

その為、奴隷自体の需要はかなりあったのだが、その少年はなかなか買われることは無く、いつも売れ残っていた。

「ったく、てめーらを飼ってるのだってタダじゃねえんだぞ！？商品にもならねえクズはとっとと野垂れ死ね！！」

そう言われ、少年は奴隷売りから腹いせの為によく殴られていた。

少年は自分が今、どういう立場にいてどういう風に扱われているかを子供ながらに理解していた。

そして、意外にも少年はその現実を冷静に受け入れていた。

「何であなたはそんな平気な顔でいられるの？私たち奴隷の運命なんて、もうこのまま死ぬか、こき使われた挙げ句に死ぬか、それしか無いと言っのに……」

同じ奴隷仲間である没落貴族の少女がそう少年に訊ねたことがあった。

少年はそれには答えず、虚ろな目でここではない何処かを見つめていた。

ある日、遂に少年を買う男が現れた。

男はそこそこ大きいところの領主らしいが、少年にとってはどうでもいいことだった。

ただ、周りの風景が変わるだけ。

少年にとってはそれだけのことだったのだから。

男は少年を買い上げると、すぐに過酷な労働を強いた。

そして何かと理由をつけては少年をいたぶり、ありとあらゆる暴力を奮った。

それは男の家で働く使用人たちも思わず少年に同情してしまう程であつたが、この世界における奴隷の扱いなどこんなものである。

人としての尊厳も何もかもを全て奪われ、主人の為に仕えるただ1つのものとして扱われる。

主人の気分1つで殺されたとしても何も文句を言えない。

奴隷とは、そんな存在であつた。

だから、理不尽な目に遭わすことはしても、殺そうとはしないだけ少年を買った男はマシであると言えた。

そんな男にも家族はいた。

男と同じように少年を執拗にいたぶる意地の悪い妻とそんな彼らの間に生まれた息子が1人。

その息子は両親とは全く似ても似つかなかった。

彼は奴隷である少年にも分け隔てなく接し、対等に扱っていた。

その貴族然としていない態度はこの世界においては異端な存在であつた。

彼の両親はそのことで頭を悩ませ、よく注意をしていたものの、彼はその態度を改めることはしなかった。

ある日、少年が外で薪割りの仕事をしていた時のこと、突如彼が現れて声を掛けてきた。

「やあ」

まるで友人にでも話しかけるような調子で言われる。

少年は直ちに姿勢を正すと、無言で彼に向かって頭を下げた。

「……そういうのは止めてくれよ。少なくとも僕と2人きりの時くらいはさ」

「……お言葉ですが、自分は奴隷です。本来ならこうして口を聞くことさえ憚りません」

「全く、君に文字やそういう難しい言葉を教えたのは誰だと思っているんだい？……それにしても、君がこんな不遜で慇懃無礼な奴だったなんて、そんなことを知っているのはきつと僕だけなんだろうなあ」

「口を開けば御主人様にどやされますから」

「君は面白いなあ」

彼はそう言って笑った。

彼は少年をまるで自分の弟のように可愛がっていた。

両親の目を盗み、こうして少年に会いに来ては会話を交わし、時には文字や言葉を教えることもあった。

そのおかげで少年は奴隷なのに、平民以上の知識を手に入れることが出来たのだった。

「君は奴隷じゃなければ、きっと何か大きなことを成し遂げられたんじゃないかな？」

「……突然、何ですか？」

「そのふてぶてしさはただの平民が持ち得ぬものだよ」

「御冗談を……」

「ハハハ、君がそこらの者と同じなら、そんな風に僕の顔を見なが

ら対話なんか出来ないよ。僕は貴族でそれなりの権力者なんだよ？  
普通なら目を合わすことさえ恐れ多いだろうさ」

「買い被り過ぎですよ」

少年はそう言うと、再び薪割りの仕事に戻った。

彼も少年の邪魔をしてまで会話を続ける気は無かったらしく、その場を去って行った。

そんな会話があつてから数日後、少年は薪を採る為に近くの森へと入った。

普段は近場で間に合わすのだが、生憎その日は薪の数が足りず、その為に普段は立ち入らない奥の方まで出向くこととなった。

森の奥は薄暗く、少年が普段薪を拾う場所と比べると、まるで別世界であつた。

この辺にはオーク鬼やコボルトが出没するという話を使用人たちから密かに聞いていた少年は急いで必要な分の薪を集めていた。

そんな時、地面に落ちた木の枝がポキッと折れる音を少年は聞いた。

パツとその音がする方を振り向くと、そこには1匹のコボルトがこちらを睨み付けながら立っていた。

それを見た少年は冷静にその状況を把握する。

ここで自分の命は終わるのだな。

何の感慨も無く、そう直感した。

近付いて来るコボルトに対し、少年は特に抵抗はせず、かといって怯え震えるわけでもなく、ただその場に立ち尽くしていた。

視線はコボルトに向けられている。

1歩1歩、まるでスローモーションのようにコボルトがこちらへ向

かつて来る。

その時、近くの木から突然枝が伸び始め、コボルトの側頭部を貫いた。

コボルトは一瞬で絶命し、その場に崩れ落ちる。

流石にこれには少年も驚きを見せ、何事かと目の前を注視していた。

すると、コボルトの後ろの方に人影が見えた。

近づくにつれ、その正体を目視出来るようになると、少年は更に驚きを見せた。

それは1人の少女であつた。

まるで黄金のように美しく輝いた長い髪を風に靡かせ、その整った顔つきで少年をじっと見つめている。

何よりも特徴的だったのはその長い耳であつた。

## エルフ

ここハルケギニアにおいて、人類の敵であり、様々な面で高い能力を擁する種族。

それが何故こんなところへ。

少年は敵意や脅威よりも先にまずそれを思った。

エルフは自分たちの国から出ることはあまり無く、まず人里には現れないと聞く。

はぐれエルフを見た、などという噂話もあるにはあつたが、エルフを見た者は殺されるという思い込みがハルケギニアの人間にはあつたからか、その話も眉唾ものとされていた。

しかし、今少年の目の前にはこうしてエルフがいる。

少年はそれでも冷静に今の状況を見据えていた。

先程コボルトに対峙した時と比べると、不思議と自分が死ぬという直感が無い。

少年はエルフの少女を見つめ返した。

幼いとは言え、同年代の少年少女の中では一際背の高い少年に負けない身長で、目線の高さがほぼ同じであった。

暫くそうしていると、突然エルフの少女が楽しそうに笑い声を上げた。

「アッハッハッハ！お前、人間のくせに面白えな」

凜々しくこちらを見つめていたエルフの少女の顔がまるで獲物を見つけたいたずらっ子みたいに変わる。

口調もまるで少年と同年代の男の子のようであった。

「大抵は俺たちを見るとビビって逃げ出すか、怖い顔になって襲って来るかのどつちかなのに、お前は違う。まるで、俺がエルフだと分かっていねえみたいじゃねえか！」

「エルフくらい知っている」

「なら、尚更変だ！そうだ、お前は変だ！」

「変なのはお前だ。人を見るなり変だ変だと笑いやがって」

少年は反論する。

「大体、何でエルフがこんなとこにいるんだ？」

「……なあ。お前、俺が怖くはねえのか？俺って言うかエルフがさ」

「何でだ？エルフなんて所詮は耳が長くて変な魔法を使う亜人……ただそれだけだろ？それにお前は怖い怖くない以前の問題だ」

「やっぱりお前は変だ！」

エルフの少女は再びゲラゲラと笑った。  
笑い過ぎて思わずこぼれた涙をその細く長い指で拭う。

「アツハツハツハ、あーおかしいー……そう言えばさっきの質問に  
答えてねえな」

エルフの少女は一先ず笑うのを止める。

「何でここにいる、だっけ？それは簡単だ。俺はこうして各地を旅  
してんだ！」

「旅？」

「性分なんだよ。一つのところにじっとしてられねえって言うの  
？まあ、他の連中からは変わった奴だってよく言われてるけどな」  
「確かにお前は変わってるな。俺が聞いてた話の中のエルフとお前  
が全く結び付かない」

「聞いてたって、どんな話だ？」

「残忍な性格で人を繰り返し襲う……。それが俺の知るエルフだ」  
「ハア？何だよそれ！」

エルフの少女は憤慨する。

「そもそも仕掛けてきたのは人間の方だろ？俺たちエルフの土地を  
土足で荒らすような真似しておいて、悪いのは全部俺たちかよ！」

「俺に言うなよ。あくまで聞いた話であって、俺の見解じゃない」

「じゃあお前はどっ思ってたんだよ？」

「さっきも言っただろ？耳が長くて変な魔法を使う亜人。それ以上で  
もそれ以下でもないよ」

「お前、本当に変わってたんだなー」



「まだ言うか」

少年がそう言っただけで睨むとエルフの少女は笑いながら「悪い悪い」と謝る。

「……ところでお前、名前何て言うんだ？」

「名前？何で突然？」

「お前みたいに面白い人間は初めてだから覚えておこうかと思ってな。で、名前は何か？言ってみろ！」

「おい、お前、貴様、君、このクズが！……どれでも好きに呼べばいい」

「おいおい、それ名前じゃないだろー。お前の名前だよ」

「無いよ」

「？何でだ？」

「奴隷だから」

「そっかー。でもそれじゃあ不便じゃないか？」

「大抵はさっきので通じるから不便じゃないよ」

「いや、不便だ！何より俺が困る！よし、俺がお前に名前をやるよ！」

「……勝手な奴だな」

少年は半ば呆れ気味に言った。

エルフの少女は額に手を当てて真剣に考えている。

「うーん、うーん……。ダメだー！浮かばない……。俺、こっこのセンス無いからなあ……。うーん、そうだ！」

何かを思い付いたようにエルフの少女は手を叩いた。

「お前に俺の名前をやるよ！」

「ハア？」

思いもよらぬ提案に少年は意味が分からないという顔をした。しかし、エルフの少女はとても満足そうな顔で何度も頷く。

「俺の名前なら、俺も忘れないし一石二鳥だ！」

「待て、どうしてそうなる？」

「お前は今日からこう名乗れ！」

戸惑う少年を指差すのに、エルフの少女がイタズラっぽい笑顔で告げる。

「レイ！」

## 少年と貴族

「アッハッハッハ、君は本当に面白いね」

レイが森で起きた出来事について話すと、彼はそう言って笑った。

「レイ……か。いい名前じゃないか。今度から君のことをそう呼ばせて貰うよ、レイ」

「ハア、話すんじゃないかな」

ため息を吐きながらレイは若干の後悔を覚える。

「何か誤解しているみたいだけど、別に君を馬鹿にしてるつもりはこれっぽっちだってないよ？」

「だが、楽しんでるだろ？」

「そこは否定しないなあ」

彼は再び笑い声を上げた。

何時の間にかレイは彼に対して敬語を使わなくなっていた。

敬語を使うと彼からしつこいくらいに注意されるのも鬱陶しく、それに元々そういった喋り方が面倒臭いというのもあった。

森で出会った変わったエルフに余計なお節介で名前を貰ったのを機に、レイは本来の口調に戻すことにした。

「……にしても、旅をするはぐれエルフとはね」

「何だ？信じてないのか？」

「まさか！君がそんな嘘を吐くような人間じゃないことくらい分かるさ。ただ……」

彼は一瞬、遠い目をした。

「会ってみたかったなと思ってさ」

「森の中へ行けばいい。上手くいけば会えるんじゃないか？」

レイが何とはなしに答えると、彼は少し寂しそうな顔で笑った。

「フフツ、無理だろうね。僕はそういう星の下には生まれていない。そのはぐれエルフにしたって君だから会えたんだと思うよ。……きつと僕はこのまま貴族として領主の息子として、それでしか生きられないんだろうね」

「十分だろ？俺みたいな奴隷には夢のような話だ」

「ああ、分かるよ。僕みたいな人間にそんなこと言う資格は無いってことぐらいはね。それでも思うのさ。もしも自分が貴族でも領主の息子でも無く、ただの平民で旅人だったらなって」

「ただの平民が聞いたら殺したくなるような台詞だな」

「アツハツハツハ、確かに。でも平民でそんな気概のある人はきつと君みたいな大物だろうね。なら喜んで討たれるよ」

彼はそう言つとレイに背を向け、そのまま振り返らずに口を開いた。

「レイ、君は歪んでいるね」

「？何だいきなり？」

「君は平民……それも奴隷という立場なのに、まるでそれらしくない。でも、そんな君が好きだし、羨ましくもある」

「……どうした？熱でもあるのか？」

「かもね」

それだけ言つと、彼はポカンとした表情のレイを残してその場を後

にした。

名前を貰ったとは言え、それでレイの日々が劇的に変わるということとは無かった。

相変わらず領主の男にはこき使われ、時には理不尽な暴力を受けていた。

そんなある日、領主の男が大事にしていた壺が割れるという事件が起きた。

怒り狂う領主の男は使用人たちとレイを呼び出し、誰がやったかを問い質した。

使用人たちは全員が首を横に振り、その中の1人がレイの仕業ではないかと言い出した。

「おい、貴様。アレを割ったのは貴様か？」

レイには全く見覚えの無いことであつた。

しかし、奴隷の身分である彼が主人の許可無く勝手に口を開くことは出来ず、仮に弁解したところで無駄であることを察して黙っていた。

「否定せぬということはアレを割ったのは貴様か……」

押し黙るレイを見て、領主の男は手にした杖を振るつた。

すると、空気の塊がレイの体を打ち付け、幼い彼の体はその場から10数メートルも吹き飛ばされた。

背中から壁に衝突したレイは口から血を吐いてそのまま倒れ込んだ。

使用人たちも顔色を変えてざわつく。

領主の男は倒れたレイへ近付くと憎悪に満ちた顔で見下ろした。

「どうしてくれる？アレは父の形見でもあり、金だけでは代えられぬものだ。貴様如きの命では足りぬのだぞ？」

「……………」

それでもレイは口を開くことは無かった。

ただ、強い意志を秘めた瞳で領主の男を見つめていた。

領主の男はその視線に苛立ちを覚える。

「そうか……なら、死で償え。もつとも貴様如きの命などで償えるものでは無いがな」

そう言つて領主の男が杖を向けた瞬間。

その場に彼が現れた。

「父さん！」

「！……ライトか」

彼は素早くレイと領主の男の間に割り込むと、その身を挺してレイを庇った。

領主の男は彼の行動に眉を顰める。

「……ライト、何故その奴隷を庇う？」

「彼の申し開きを聞くべきです！彼が『自分がやった』とその口で言つたのですか？」

「奴隷に口を利く権利などない。それにこやつが犯人であると言葉よりもその態度がハッキリと示している！」

「……ならばその認識は誤っているとわざるを得ません」

そう言うと、彼は懷に手を忍ばせた。

領主の男は怪訝そうな顔で彼を見つめた。

「どついう意味だ、ライト……」

「こついう意味です！」

彼は懷から何かを取り出して、領主の男へ見せた。

それは割れた壺の欠片であつた。

「それは……？」

「壺を割つたのは僕です！」

「何だと!？」

領主の男は驚いた顔を見ると、屋敷中に響くような大声を上げた。

使用人たちもざわめく。

その中で冷静にこの場を見ていたのは、ただ1人レイだけであつた。

「ライト……本当にお前なのか? よもやその奴隷を庇つて……」

「見くびらないで下さい! たかが奴隷の為にしてもいない罪を被るような真似はいたしません!」

彼は声を張り上げた。

領主の男は暫く言葉に詰まっている様子だったが、何とか気を取り直すと一言だけ告げた。

「……その奴隷を地下の仕置き部屋の牢に入れておけ」

「父さん!」

「……ライト、お前は後で私の部屋へ来い。以上だ。貴様らも仕事へ戻れ」

領主の男は使用人たちを一瞥しながら言うと、くるりと背を向けて去っていった。

その様子を1人のメイドの少女が青ざめた顔で見つめていた。全身が小刻みに震えている。

彼はその少女に目を止めると、彼女の肩をポンと軽く叩いた。

「あ、ああ、ライト様、私……」

「……大丈夫。僕に任せて」

彼はそう言つて微笑むと領主の男の後を追った。レイは守衛の男に地下へと連れられながらもそんな彼の顔を見ていた。

その視線に気が付いた彼は少しだけ振り返ると、困ったような顔で微笑を浮かべる。

その顔が妙に印象的で、それが見えなくなるまでレイは彼を見続けた。

地下の仕置き部屋はいわゆる拷問室のような造りをしていた。中には簡易的な牢屋があり、レイはそこの中へ入れられていた。

牢屋は狭く、いくら体格が良くても所詮は子供であるレイがギリギリ大の字で眠れるくらいの広さしか無かった。

1日に1度だけ食事（とは言っても奴隷、しかも牢に入った者が食べるようなものなのでたかが知れている）が運ばれる以外、その部屋に人の出入りは無い。



また地下故に窓などは無く、外の様子を知る術は無い為に時間や日にちの感覚がすぐに消え失せていった。

そんな状態になって2日くらい経った頃、レイの元に餓え死なない程度のささやかな食事を持って彼がやって来た。

彼はレイに優しく微笑みかけるとその場に食事を置いた。

レイはまるで獣のようにそれへ飛びかかると、礼儀も作法も関係無く両手で腹の中にかき込んだ。

皿はあっという間に空になったが、レイの腹は満たされず「ぐー」と空腹を訴える。

それを見た彼は苦笑すると、何処からかパンを1つ取り出し、レイに差し出した。

それは普段レイが口にすることは決していない、彼らの食卓に並ぶような上質のパンであった。

レイは奪うようにそれを受け取ると、ガツガツとかぶりつく。

外はサクサクし、中はフワフワ、微かに胡桃の味もする。

しかし、レイにとってはそういうのを味わうことよりも腹を満たすことの方が先決であった。

これまたすぐにそれを胃の中に収めたレイはようやく心地ついたのか、ドシツとその場に座り込んだ。

その様子を見て、彼はやつと声を掛ける。

「落ち着いたかい？」

「……初めてあんたに感謝するよ」

「君にお礼を言われたのは初めてだよ」

彼はそう言っただけで笑った。

「……久し振りだね、レイ。とは言っても2日振りだけど」

「2日……まだそのくらいしか経ってなかったのか」

「……確かにこんなところじゃ今が朝か夜かも分からないね」

彼は周囲を見回す。

そんな彼を見ながらレイは訊ねた。

「……何であんな嘘を言ったんだ？」

「ん？」

「あの壺を割ったのはあんたじゃないだろ？」

「……そうだね、君に隠し事は出来ないね。あの壺を割ったのは僕じゃない」

「恐らく、あのメイドだろ？」

「うん、十中八九メリッサだろうね」

彼が自らを犯人だと名乗り上げた時、1人のメイドが青ざめた顔で震えていた。

その反応から察すれば、彼女がその件について何かしら関わっている可能性が高い。

彼は上を向き、宙を仰いだ。

「……確かに僕はあの壺を割ってはいない。でも、僕が割ったことにすれば、一番平和にこの事件を解決出来ると僕は思ったんだ」

「あんたは馬鹿だ」

「うん、そうだね。でも、馬鹿でも君とメリッサは救えたよ」

「でも、あんたは……」

「レイ、聞いてくれ」

彼は真剣な表情になった。

「今回の件で、改めて僕は思った。どんなに大切な思い出が詰まっ

ていようが、所詮は壺。物にしか過ぎない。人の命には絶対に代えられないものだ。でも、今の世界はそれを否定する。父さんだってそうだ。例えば君が犯人では無いと知っても、君の命を躊躇いもなく奪おうとしただろうし、メリッサが犯人だと知れば、その命さえも奪おうとしただろう。……僕は君みたいな奴隷も、メリッサみたいな平民も、等しくあるべきだと思っている。それは貴族としては異端な考えかも知れない。けれども、僕はこの考えを曲げず、世界へ発信し続けたいと考えているんだ。僕みたいな若造1人が人々の意識を変えることは難しい。それでも、変えなきゃいけないと僕は考えている。貴族の為に平民がいるわけじゃない。平民の為に貴族はあるのだから」

彼は真っ直ぐな瞳でレイを見つめる。

レイは少し気恥ずかしくなり、思わず視線を逸らしてしまった。

彼はにこりと笑った。

「君をもうすぐここから出してあげるよ」

彼はそう言つと、踵を返して出入り口へと戻って行った。

それがレイが見た、彼の最後の姿であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4202q/>

---

最強のメイジ殺し

2011年4月25日16時30分発行